
東雲銀座広報 ゆり時計

日溜。
野沢菜
片桐天音
蚯蚓の紐
有坂

もくじ

同葬会

もやの先

メタ世界で出会った少女とその顛末

湯浴み

桜紅葉と強化外骨格少女

同葬会

日溜。

「はい。——はい。それで、貴女に連絡してほしいとありまして——」

「分かりました。——十三時過ぎくらいになります。

——ええ、ありがとうございます」

サナが、死んだ。持病の悪化による病死ということだった。時間とお金を費せば治るものだということも分かっていたのにしなかったのだから、消極的な自殺ともいえるのかもしれない。

お金。まあ、お金を渋ったのだろうか。自分の優先順位が低い人だったから。他人を気にする癖に、他人に自分の死がどういふ影響を与えるかまでは考えていなかったに違いない。

溜息を吐いてから、電話を掛ける。説明が面倒だが、まあ仕方あるまい。

「もしもし。——はい。楠木です。明日休ませてください。知人に不幸がありました。——ありがとうございます。いえ、その日だけで大丈夫です、手続きが主なので。

——そういうことで、私がすることになってるんです。それに」

化粧台に置いてある写真を見る。私とコウタロウとレイとカナタとシズクと、サナの写った、遺影。

「——結構前に、済ませてあるんです。お葬式」

会

「あの、もしかして。アカネ、楠木アカネ？」

「はい、私、楠木アカネです。えーつと……」

最早毎年「ここ近年で一番の暑さで」と評されるようになった夏のある日。同年代くらいの青年に突然名前を当てられて、つい肯定してしまう。涼むことを主目的に入店したのであろう、少し暑苦しさを感ずる程に筋肉質のスポーツ戦士。記憶に無い。

「やつぱりアカネか。え、俺分かんない？ レイ。レイです、高校別のところ行った」

「レイ？ レイ……えっ」

巖の如き圧迫感の肉塊、その上方へ目を遣ると——矢張りゴツい顔が、いや、眉は細く弱々しく顰められてい

てそんなにゴツくない——見たことのある形。

「あー！ レイの眉のパーツしてる！ 似合わない！」

レイがへにやりと笑う。嘗てと同じ、何も含むところが無いのに、どこか困ったような笑顔。

「他も全部自前のパーツなんだけどなあ」

「いやいやこの筋肉、上から着てるとかじゃないのー」

つい昔日のように語りかけ次の言葉が口から転び出る、その直前にカウンタの奥からの視線を感じた。接客中であることを思い出しました。大丈夫です店長。

「一名様ご案内しまーす——夕方以降なら時間取れるから、連絡先のメモ何か呉れると助かる」

私の義務教育時代の交友関係は極僅かだ。別に人間関係に消極的だったということは無い。抑々同年代の子供が少ない地域だったというだけ。そんな中で、同級生全六人の仲は悪くはなかった。と、思う。——何故尻窄みなのかといえ、これから会う予定だったレイのことを即時に判別できなかったから。確かに中学三年のときに急に伸び出していた気もする。縦にだけ長くなっていた

から、その分細かいイメージが補強されていた。まさか列車のボックス席で隣に座れなさそうな程に横に厚くなっているとは思わないではないか。

「いや、出先でアカネと逢えるとは思わなかったよ。あの頃の同級生で連絡取れないの君だけだったから」

圧のある巨体から柔らかな声が発せられると圧が増すような気がする。いや待て。

「え、あの頃のとて中学までってことだよ。私以外は交流あったの？ レイ違うとこ行ってたのに」

仲が悪くないと思っていたのは私だけで、実はハブラれていたとかそういうのなのだろうか。レイ以外はその後一緒だったのに。

「あ。あーいや、交流というか、仲が良すぎたりしなかったりというか。アカネが誰ともそういうのが無かっただけで、うん、まあ、それがズルズルとね。……知らないかったみたいね。それで高校卒業後——」

「待って。ちょっと、そう、十五分くらい待って」

私以外の同級生、知らないところで営んでいたらしい。そうか。うん。うん？

「その流れで全員の連絡先が分かるって、くっついったり離れたったり別でくっついったりしてたってこと？」

「まあ……」

「おお」

そうなるよね、と苦笑するレイ。慣れてくると大型犬の愛嬌があるな。このスマイルか。このスマイルで同級生を食い散ら——

「レイ。サナとも付き合って別れたってこと？」

自分で聞いたことがないくらい低い声が喉から零れる。肯定してきたら止まれないかもしれないな、と他人事のように思った。果たして答えは、

「いや全員と俺が付き合ったわけではないって。コウタロウだっているだろ」

ほう、と息を吐く。良かった。初犯の相手がレイからコウタロウに代わっただけかもしれないけれど。

「サナと付き合ってたのはシズクだよ」

「は？」

こうして、疎遠になっていた旧友達と、連絡を取るこ
とになった。

「会おうよ六人で！」

「リアルはちょっと微妙かな」

その夜、シズクと連絡を取った。レイ経由で。あれよあれよとビデオチャットをするのになり今に至る。何を話したら良いのかという懸念は無い。大義名分というのは踏ん切りを付けるのにとっても便利だと、頭の隅で思った。

「何でだシズク。私はとても貴女に会いたいのに！」

「命の危機を感じるから」

「やましいことが無いなら命が危なくなったりなんてしないよ？」

「やらしい憶えがあるからねー」

「ほう——。その潔さに免じて命の補償はしよう」

「何かニュアンス違わなかった？——まあ、ヘタレのBS逆恨みに配慮するのも莫迦らしいし私はいいけども。他の連中はどうだろうね」

「え。なんかあったの？」

「アカネ以外シモい兄弟姉妹だったりそうじゃなかったり」

「アッ」

シズクは、動物で喩えるなら猫。気紛れで場をひつき回し、自分の興味が無くなれば一抜けする。とても苦手だった。

「まあ、ちょっと強引に集合かけるくらいで丁度良いのかもね。カナタとか、家族で移住するかもって言ってたし。カナダに」

それも初耳だ。頭が追いつかず混乱する私を尻目に、ツボに入ったのか「カナタがカナダに」と繰り返しながら笑っているシズク。笑いながら「言っておくけどその辺、USとかで普通に分かるからね？」

「カナダ、カナダね。向こうで死んだりしたら、向こうのお墓に入るのか」

微妙に混乱したままの頭を他所に口から出た言葉が、何処かに刺さる。

知っている人が亡くなったときに。私の知らない人達がお悔やみなさって、私の知らない墓地に入って。私の知らない幽世へ行く。——サナも？

「なんか、ヤだ」

ポツリと零れた。いつの間にかシズクの笑いは止んでいて。そしてその口許は今、嘲りの形に弧を描いていた。

「ヘタレー」

この辺りは昔と変わらない。どうしてこれで仲が悪くないなどと記憶していたのか。流石にムッと来たので何か言い返そうとしたとき、シズクがピクリと動いた。

「ふーぬ。アリじゃない？」

「え、何が」

「『葬儀は生きている人のためにやるもんだ』なんて言説があるんだけどさ。なら自分達でやるのが一番だよって話」

「だから何が」

「駄目だよ？ 他人が考えてると自分で考えないの。相変わらずというかさー」

「だってシズクの考えてること想像するのは時間の無駄じゃん」

「やろうぜ、六人で同葬会」

「いや、何それは。——やっぱ考えても時間の無駄じゃん」

それでも。分からないなりに何だかワクワクする提案で。だからシズクと私の仲は悪くなかったのだ。

生前葬。その人が死ぬ前にする葬式。で、その葬式を同時にやるらしい。良いんだろうか、それ。

「別に葬式は法律があるわけじゃないからねえ」

「え、そうなんだ」

「ある程度決まっているのは死亡判断とか死体の扱いとかだから。何かやって『生前葬です』って言えばそれはもう生前葬ってことで」

「……やる意味あるのそれ」

「本人がやりたいって言って、死人相手の遠慮もしなくて良くて、知ってる人間を自分で集めて。意味以外無いじゃん」

「そうなのかな。……そうかも」

「よし、やる気になったようだし、グループで繋ぎ直そうか」

思い直す暇を与えない気であることは分かったが、止めはしなかった。

「久し振りじゃんどうしてた？」とか「知ってる？あの人がさ……」なんて、擦り切れたテンプレートと思っていた定番の話で意外に盛り上がりつつ、そんな自分達に年齢を感じるこの頃。間隙を見計らい「合同で生前葬しようぜ！」と突撃を掛けたシズクの手綱を握る感じで、旧友達との会合を設定する運びとなった。

——後で「そんなにぎこちなくないじゃん」とシズクに言ったら、「アカネの前ではそういう雰囲気出し辛いからね。一人だけドロドロの外に居た理由その儘でもある」などと吐きやがった。やっぱ殴るべきか？

「で、何処の方法でやるの？ いや、どう違うとか知らないけども」

いつの間にかコウタロウが仕切っていた。やる前提の話になっているし、まあいいか。

「何しても良いって言われると何するか分からないよねえ」

サナは特にそうだろう。決まった流れに乗るのが基本姿勢だから。とは言っても、皆を集めるのが第一目的の私も、何かやりたいということもない。

「カラオケ大会やってたりとかするっぽい。自伝配った人もいるねー。あ、ご飯どうしょつか」

「こういうときって鮎のイメージあるよね。取り敢えず鮎頼もう」

「レイ、でっかくなって飯喰うようになったよね」

脱線。いやそうでもない。厳密に決めなくて良い雰囲気だからか、会話は取りとめもない。

「アカネが私のためにやってくれるんだし、カナダでやらなさそうなのと言えぱやっぱ読経はしてもらった方が良くない？ 般若はらみ」

「……？」

「え、心底不思議そうに首を捻られた……？ 話違うじゃんシズク」

横で聞いていてもそういう流れは無かった筈だ。なつてたらその時点で止めているし。

「……じゃあ、アカネはどういうのがしたい？」

「え、えー？ うー」

サナが訊いてきた。別にしたいものがあるワケではなくて。でも、何かそれっぽいことを言いたいと思っ

が出てしまつて。ウンウンと

「ちゃんとしたい、かな？」

「ちゃんと？ カッチリしめやかに？」

シズクの目つきが悪くなる。

「こういうのって、真面目にやった方が面白くない？」

「そうかな？ ……そうかも」

「『こう、ちゃんとやったから、もうしなくてもいいですよ』って言いたいというか。やり直し、されたくない。

いや、もう一回やられるのは別に良いんだけどさ。やり直しは嫌だなって」

「成程成程……じゃ、それもやろっか」

「も？」

既視感。五人分の声が重なる。そしてシズクが続けるのだ。

「何でもアリってことはさ——」

結局、思い付いたのは全部やると決まった。六人並んだ集合写真バージョンの遺影を用意したり。花を飾って読経してもらって焼香をあげてもらって。棺に入るのは

一人ずつで六回読経してもらうのは気が引けたけれど（私達は良い後輩を持ったものだ）。

お鮎を食べるのも、その後ビザパーティをするのも。

—— 以外と貸し切れるんだなああのファンシーキャラクターの本拠地。自分達の遺影を持ってキャラクターと写真を撮ったり。

始

「ワン右衛門のお墓、私が作って可い？」

犬としては太々しい気質で鎗木家に根を張っていた飼犬が大往生を遂げた翌朝、サナが訪ねて来た。晩に皆に連絡していたとはいえ、意外な来客であった。

「サナちゃん、ワン右衛門のこと好きだったっけ？」

だって、家に来たときも構ったりしていなかったし。

言ってから、これはあまり良くない言い方ではなかったかもと思った。でも、サナは気にした風でもなかった。

「好きだったよ。ちょっと離れたとことで見ると、ぐでーんと溶けてるのが可愛いくて」

「構ってあげれば良かったのに。ワン右衛門、人懐こかつ

たし」

「それは別に。—— 私が幸せにしたかったワケじゃないから」

そのときのサナは、笑顔だった。楽しさとか、喜びとか、そういうのが無い透명한笑顔があることを、私は初めて知った。そんな笑顔を、してみたいと思った。だから、

「ねえサナ」

「なーに？」

「サナが死んだら、私がお墓作っても、可い？」

もやの先

野沢菜

携帯電話が鳴ったのは、何年かぶりに休暇を取り、長らく計画していた二週間ほどの旅行から帰ってきたちょうどその時だった。

アップテンポな着信音をかき鳴らす電話を手に取り、と、懐かしい声が聞こえてきた。実家に残してきた、父親の声だ。

父親は、何度も連絡したが繋がらなかった、ちゃんと電話を取って欲しいと、早口でがなりたてた。そして、母親が死んだ、と続けた。

母親が死んだとはどういうことだろう。急いで連絡するほどのことなのだろうか。そして、なぜ父は怒っているのだろうか。裕紀の疲れた体は、早口でまくしたてる電話の声を聞かなかったらしい。スピーカーが鼓膜を揺らすのも気にせず、ぼんやりと、旅行先で印象に残った景色を思い返していた。

やがて、父は大きなため息をつく、声の調子を落とし、事務手続などで忙しいから実家に帰ってきてほしいと告げた。

父はいままで、裕紀の母そのひとが、三日前に息を引

き取り、焼かれるその時を待っている、という話をしてきたのだった。

人手が足りないから、とにかく早く帰ってきて欲しい。父は、落ち着いて、しかし怒った調子でいった。裕紀は、今日はもう遅いので明日の朝に行く、と答えた。父は、迎えに行くので最寄り駅に着いたら連絡して欲しい、といい電話を切った。それを聞いた後でもまだ、裕紀の疲れきった頭は母親の死を実感を持って受け入れることができずにいた。

裕紀は親たちと距離を置いていた。なにかしらの確執があった、というわけではない。むしろ、親との仲は良い方だった。

裕紀の思いだせる限り、両親の仲は良かったし、親は子供である自分によくしてくれていた。確かに常に仲が良いというわけではなかった。中学生の頃はいつも、早く大人になって家から出ていきたいと考えていた。しかし、高校に入学する頃にはそうも思わなくなった。ただただ反抗期だから反発したというだけで、それ以外に理由はなかった。

裕紀と親の間に距離が生まれ始めたのは、裕紀が仕事の都合で上京してからのことだった。これも、特に何かがあったというわけではなく、上京してから親たちとの距離感を掴み損ねていたというだけだった。

電話が切れたあと、裕紀はのそのそと脱衣所に向かった。服を洗濯機の中に脱ぎ捨て、水垢にくすむ浴室扉を開け、風呂場に入る。熱湯の蛇口と冷水の蛇口を器用に調節し、いつもはさつと流すだけの髪を念入りに洗いがら、母について頭を巡らせはじめた。

裕紀が母のことを考えるときはいつも、不安で眠れなかった幼少期のことを思い出す。

母はいつも同じ話を聞かせてくれた。どの絵本にものっていない、母がつむぎあげたお話だ。作家でもなければ教師でもない、一介の主婦である母がなぜ、わざわざ自筆の話を語っていたのかは分からない。しかし、その話を聞いた時はいつも、父も知らない二人だけの秘密があることに、むしろがゆい喜びを感じ、不安を忘れてしまふのだった。

朝一番の新幹線から地元の鉄道を乗り継ぎ、家の最寄り駅に着いたのは、ちょうど日が沈むころだった。裕紀は父に電話をかけたが、呼び出し中の機械音が聞こえるばかりで、連絡が取れそうにない。駅の外には、営業時間外の観光案内所と、最寄りのタクシー会社の電話番号が書かれた看板、そしてタクシーの停留所があるだけだ。裕紀は、父に連絡することを諦め、タクシーで帰ることにした。

家に向かうタクシーの車窓は、朽ちつつある廃屋と、いくばくかの稲を育てる田んぼばかりを映していた。裕紀は、上京してから長らく見ていないその景色に、懐かしさを覚えながらも、このような打ち捨てられた土地で生涯を終えた母はどのような気持ちだったのか、推し量れずにいた。

久しぶりに帰った実家は、思いの外賑やかだった。家の中のテーブルをかき集めて作った長机には、さまざまな料理が乗せられており、黒い服を身にまとった親戚たちが料理の前でぎゅうぎゅう詰めになりながら、母との思い出話に花を咲かせている。その周りでは、付き合いだ

からと無理やり連れてこられた子供たちが、携帯電話で何かを見て時間を潰している。父は、親戚たち一人一人にお酌をしている。どうやら、裕紀が列車に揺られている間に、お通夜が始まっていたらしい。

「それでね、あの人若い頃に神隠しにあつてたじゃない。だから神様に見初められたんじゃないかと思ってるのよ」

「はあ……」

裕紀が父に声をかけた時、父は、来賓の与太話にひたすら曖昧な相槌を打っていた。どうやら、話を切り上げる隙を見失ってしまったらしい。

父は、裕紀の帰宅に感謝した後、葬儀屋に言われた書類を母の部屋から見つけて欲しいと言った。そして、来賓への対応に手一杯で、書類仕事に手をつけられないといったことを嘆いた。裕紀は、父の愚痴を聞きながら、生まれてこのかた母の部屋に入ったことがなかったことに、奇妙な疎外感を感じていた。

母の部屋は、思いのほか小ぎれいだった。しっかりと

片づけられていて、ガラクタの類はどこにもない。そのお陰もあって、裕紀は必要な書類を難無く見つけだすことができた。用事を済ませて部屋を出ようとしていた時、書類の束の隙間にある大学ノートが目飛びこんだ。

この、ありふれた市販の大学ノートは、裕紀にとって特別なノートだった。幼少期に何度も聞いた、母お手製のお話は、このノートに書かれている。母が中身を見せてくれることはなかったが、裕紀が幼かった頃、このノートを読む母の声を聞きながら眠りに落ちた。幼い裕紀にとって、この古びたノートと母は同じものだった。

何度も開いたり閉じたりしたせい、紙の端はきぼんでしまい、一部すりきれているところもあったが、お話を記したインクは、色褪せることなくそこにあった。

『むかし、あるところにすっかり寂れきった村がありまして。

その村には、たおれかけた小さな家がぽつんぽつんとありましたが、その家のなかでも一段と大きな家に、女

の子がたったひとりで住んでいました。

村には、女の子のほかに、人はだれ一人いませんでした。女の子は、村にある畑でいねや、むぎや、いろいろなこもつを作ってくらしていました。

女の子は、どうして一人きりになってしまったのか、まったく分かりません。少し前まで、おとうさんも、おかさんもいたような気がします。しかし、それが本当のことなのかどうか、それとも女の子自身が願っていることなのか、もはやそれすら分からなくなっていました。

村には、おおきな杉の木が一本ずんぐりと立っています。その木は、女の子のただ一人のともだちでした。木は、女の子によく昔話をしてくれました。

杉の木のお話は、いつも同じでした。女の子が小さいころ、村には人がいっぱいいたこと。村はいつもにぎやかで、まいにちお祭りがあって楽しかったこと。いつのまにか人がいなくなってしまうと、今はとてもさみしいこと。いつもいつも、まったく同じお話を聞かされて、女の子はもううんざりでした。

ある日、村に小さな子供が迷いこんできました。杉の木はいつもと同じお話を話していて気づきませんでした。が、女の子はすぐに気がつきました。どこから来たの、名前はななに、女の子は話しかけます。ですが、子供はなににも答えません。

女の子が困っていると、子供はおなかがいっぱいでした。女の子は、じまんの畑でそだてたものを子供に食べさせてあげました。

子供は元氣を取りもどし、まいごになってこの村にたどりついたことを教えてくれました。そして、子供はこの村に住みたいといいました。

女の子はうれしくなりました。やっと一人ではなくなるのです。けれど、村には子供が住めるようなところはどこにもありませんでした。子供を住ませてあげるにはどうすればいいのか、女の子にはまったく分かりません。

杉の木はいいました。

「私を使って家を作ればいい」

女の子はなやみました。杉の木で家を作れば、子供を

住まわせてあげることができませんが、杉の木とお話ができなくなってしまうです。ですが、杉の木がないと、子供を住まわせてあげることができません。

女の子はとてもとてもなやみました。杉の木はいいました。

「ひさしぶりに外から人が来て、私は昔の気持ちを思い出すことができた。村のためにも、私を使って家を作り、子供を住まわせてあげてほしい」

杉の木があまりにお願いしたので、女の子は杉の木で家を作ることになりました。杉の木がとても大きかったので、子供にも手伝ってもらって、たくさんの家を作りました。

そのうち、昔この村がさかえていたころのお話を聞きつけて、この村にうつってきて住む人が、何人もできました。村はだんだんにぎやかになっていきました。杉の木がここにいれば、とてもよろこんだらうなあ、にぎやかになる村を見ながら、女の子はぼんやりと思いをしました。

そんなある日、村に旅人がやってきました。村の人た

ちは、旅人にせいいっぱいのおもてなしをしてあげました。

旅人は、こんなにやさしい村は初めてだとおおよろこびです。村に来てからずっと大切そうにかかえていた、大人のためのひらほどはある箱を見せながら、旅人はいいました。

「この箱はきちようなものなんだ。このぼしよにあるものをそっくりそのままうつし取ってくれるんだよ。この村の人たちはとても気が良くて大切なものだから、この箱でうつし取ってあげよう」

しかくい箱には、まるいレンズが一つだけついていました。レンズはぎらりと光っています。女の子はなにか良くないものを感じましたが、それはきつと初めて見るものだからだろうと思いました。

旅人が村から出ていった日の夜、村に大きなあらしがやってきました。集まってきた人たちは、あらしにおびえてにげてしまいました。たわなに実つたいねは、じゃあじゃあとふる雨に流されてしまいました。二人でいっしょうけんめいたてた家は、あとかたもなくこわれてし

まいりました。小さな子供は、ごうんごうんとうなる風に
つれさられてしまいました。あらしは、村から全てをう
ばいさりました。

女の子は、杉の木があったところで、日がのぼってし
ずむまで、ずっと待ちつづけます。雨がざあざあ而降っ
ても、びゅうびゅうと風が吹きつけても、ひたすら待ち
つづけます。どれだけ待っても、あの子が来ることは、
ありません。

女の子は、ひとりになってしまいました』

細いボールペンで綺麗に清書されたお話は、裕紀が昔
聞いていた話と少し違っていた。

裕紀が知っている結末は、「女の子と子供のおかげで、
村にたくさんの人がやってきました。そう遠くないうち
に、村は昔のようにさかえるでしょう」といったもの
だった。母の気分によって結末が少し変わることはあつ
たものの、女の子と子供の活躍で村に活気が戻るとい
う大筋が変わることはなかった。少なくとも、女の子
が孤独な世界に戻るような、仄暗い結末ではありえな

かった。

お話の最後のページには、一枚の黄ばんだ写真が貼り
つけられていた。大きさは子供の手のひらほどで、四隅
に貼られたセロハンテープはいまにも崩れ落ちそうだ
が、虫食いなどはない。

昔に撮られたものなのか、写真からは色がすっかり抜
けてしまっており、全体に白いもやがかかっている。も
やの先からは、少女がこちらにほほえみかけている。

写真の下には小さく地名が書かれていた。この地名
を、裕紀は母から聞いたことがあった。母が話してくれ
た結末のバリエーションのうちで、ただ一度だけ出てき
た地名だった。

その時のお話も「村はさかえるでしょう」で終わった
が、その地名を口にした母がどこかに連れ去られてしま
いそうで、怖くなり泣き出してしまったことを覚えて
いる。

この少女は、もしかすると母なのではないか。なら
ば、この写真は一体なんなのだろう……。

裕紀は突然、自分自身もやの中に吸い込まれていく

感覚に襲われ、はたと考えることをやめた。自らを取り
込まんとしていたもやは、ノートの中に帰っていった。

やるべきことが山積みなのに、このような所で油を
売っている暇はない。裕紀は自らにそっくりいさせ、も
はや輝きを失ってしまったノートを元あった場所に押し
込め、逃げるようにその場を立ち去った。

メタ世界で出会った少女 とその顛末

片桐天音

——暗闇が辺りを包む夜の草原。そこには、煌々と光を放つビルはおろか、わずかに道を照らす街灯さえどこにも見当たらない。少しずつ前に進む僕、の頼りになるのは、右手に握られた魔法の杖が放つ小さな光だけだった。もし目の前が危険な断崖絶壁だとしても、今の僕には決して分らないだろう。そんな自然のままの景色を、足元を探りながら一人で歩いていく。

そつと息を吸って、吐く。両耳に届く静かな風の音が、この高原の土を、草の絨毯を踏みしめているという実感を与えてくれた。なだらかな丘の頂上に立つ大きな木の影が目に入って、僕は不意に上へと視線を向ける。そして、はつと息を呑んだ……その瞬間を、僕は決して忘れないだろう。

暗かったはずの夜空が、いつの間にか明々と輝く大小の星々で一面埋め尽くされている。その瞬間、先ほどまで光のなかった世界に新たな光明が差していた。僕はその自然の芸術を視界に全て収めるために、草原のベッドに横たわった。理想的な星夜であれば、一時に肉眼で見える星の数は約四千三百ほどだという。しかし、今の僕

にはその数万倍、いや——

「ライラ、そろそろお昼作ろうと……あれ、またVRやってるの?」

「うわっ! ……あー、ごめん。何か用?」

「お昼ご飯作っちゃうけど、ライラも食べる?」

——と、そんな孤独で美しい世界の真上から、無粋な同居人の声が漏れ出てきた。プレイ中は部屋に入らないでと言っていたのに。急に身体を起こすと、狭い床の境界線を示す赤いラインが周囲に浮かび上がった。視野いっぱいに広がる美しい地球が、一瞬で真つ二つに割れて現実に引き戻された心地がする。

これじゃ、せつかくの記事の導入が台無しだ。ニコラには常日頃からVRセッションの邪魔をしないよう粘り強く説得を続けてきたつもりだけど、彼女とはプレイベートスペースの認識についてもう一度合意を形成する必要があるかもしれない。

ヘッドセットを持ち上げて頭から外すと、私の顔を覗き込むニコラの姿が目に入る。さっきまでの世界観とは全く違う見慣れたいつもの普段着——海外旅行のお土産

か何かでもらったらしい、エキゾチックな柄のトップスとショートパンツ——が、私の意識をこの小さな部屋に呼び戻した。

「あのね、ニコラ……」

と言いかけたあたりで、そういえば、部屋の前のサインプレートを「Do Not Disturb Metaworld」にひっくり返していないことに思いあたる。それでも、ノックして中の反応を待つくらいは期待してもよさそうだけど、どうやらニコラにはそういう習慣を形成する機会がなかったらしい。

いや……うん、今回は私が悪い。そういうことにしておこう。

そうしてなんとか数時間前の自分と折り合いをつけて頷いていると、ニコラが不思議そうに首を傾げた。肩の辺りまで適当に伸ばした黒いミディアムヘアがぱりと揺れる。

「どうしたの、ライラ？」

野暮ったい大きな黒フレームの眼鏡には、その印象とは対照的な細い銀色のグラスチェーンが下がっていた。

彼女の動きに合わせてきらきらと揺れるチェーンを見ていると、なんとなく心地いい。

数ヶ月前にカットから帰ってきた直後は、そのシャープな顔立ちに似合うショートボブだったけど、それから特に手入れされず自然に任されている。あのときはどういうわけか「ライラ、髪を切ってくれない？」と頼まれたところを、どうにか並の美容室に行くよう説得したのだった。

一応言うておくと、私は美容師でも美容師見習いでもない、ただのVR専門ライターだ。

「えーと……そうだ、うん、お昼ご飯。何を作ってくれるんだっけ？」

「サーモンとプチプチで親子丼の予定！ ストッカーに二人分余ってたから」

親子丼は、淡白で単調な食感のサーモンに、口の中でとろりと弾けるプチプチを添えた簡単で美味しい定番料理のひとつだ。普段は何気なく「親子丼」と呼んでいるけど、「赤くて丸いプチプチがサーモンの培養核に似ているから」という理由はどうも腑に落ちない。どちらも

培養か合成で作られる人工食品^(レ)だから、比喻にしても少し不思議な響きを感じる。

キューブ型のサーモンと丸いプチプチの取り合わせは、見た目が華やかでファミレスの子供向けメニューでも人気が高い。本当はさらに三角形のグリーンバターを加えるのが定番で、しかし、そんな贅沢な調味料に割くほどの経済的余裕はなかった。それでも、この前買い溜めていたサーモンはもう食べきったとばかり思っていたから、ちょっと嬉しい。

「今日はどんなゲームをやったの？」

「ゲームじゃなくて、ワールドね。『アステロイド・ベルト』っていう、山に登って星空を探索アトラクションで——」

さっきニコラが来る前に取材していた「アステロイド・ベルト」は、ちょっと玄人向けのワールドだ。スポーン地点は真っ暗な山の麓で、ある程度先に進まないと星空を眺めることはできない。小さなペンライト一つで目の前を照らしながら、星空の見える高原を目指して進んでいく。

美しい景色をおおずけにされることで、ゴールに辿り着いたときに大きな達成感となって跳ね返ってくるという、ちょっと回りくどい仕組みになっているわけだ。VR初心者なら特に戸惑いやすいワールドで、何分か同じ場所をぐるぐる回った末に結局飽きて帰ってしまうらしい。画面映えのなさから配信者にも敬遠され、どうしても人気が出ないので魅力を紹介してほしい、という依頼だった。

「星空？ それくらい、テレウィンドウでいつでも見られるのに」

そう言ってニコラが指差す窓の向こうでは、薄暗い緑に包まれた静かな溪流の中で、黒くて細い輪郭のハグロトンボが優雅にひらひらと飛んでいる。もちろん、これは私たちが自然あふれる山奥での生活を送っているわけではなく、都心の小さな2DKの窓全体を覆うテレウィンドウ——平たく言えばAIディスプレイが映す景色に過ぎない。

拡散モデルで逐次生成される映像に一つとして同じものはなく、少し不自然な動きのトンボが水しぶきと同化

して消えたかと思うと、木々の間からまたうつすらと新たな個体が現れて、少しずつ違う風景に変わっていく。私の「自然」と「山」というキーワードに反応して、いつの間にか新しいプロンプトに切り替わっていたらしい。

確かに、各家庭でこのテレウィンドウを入手できるようになれば、VRデバイスの売り上げに影響が出てもおかしうはないだろう。しかし、高価なテレウィンドウが整備されていて、なおかつ手頃な家賃で住める物件はここ以外に見たことがなかった。

「まあ、そういう仕事なのよ」

「私もこの景色でエッセイでも書いてみようかな。AIオタクなら何人か買ってくれそう」

「あなた、文章なんか書けないでしょ」

私の言葉を聞いたニコラは腕を組んでうーんと数秒悩んだ末に、なぜか満足そうに頷く。そして「じゃあ、このアイデアはライラにあげるね」と言って、キッチンに戻っていった。

＊

私とニコラは、この五階建ての円環集合住宅（ラ・カンパニー）の四階にある一区画を分け合って暮らしている。

円環（ラ・カンパニー）というのは、百メートル四方ほどの敷地に建つ薄い円柱のような外観と、その中心にぽっかりと空いた円形の空間を合わせた構造のことだ。上から見ると、外から順に廊下、居室、そしてテレウィンドウに囲まれた空間が続くバウムクーヘンのような姿と言えば分かりやすいかもしれない。親しみを込めて、ドーナツハウスという愛称で呼ぶ人もいる。

ニコラとは、半年前にルームシェア専門のマッチングサービスで知り合った間柄だ。彼女は短期の案件を転々としているエンジニアで、お金が貯まったら働くのをやめ、貯金が尽きたらまた働き始めて……というのを繰り返している。無職の期間を長く保つために、生活費はできるだけ抑えたいらしい。

この住宅の大きな特徴は、家賃の安さだった。曲面の

（1）「サーモン」および「プチプチ」は、カルチュア・クロレラ・カンパニーが製造する食品類の登録商標であり、特定の生物種を指す語ではない。

壁や窓は家具やカーテンを設えるには不便だし、窓は自然光の入らないAIディスプレイで覆われて、おまけにベランダもないという欠点だらけの住環境はやはり人気がないらしい。おかげで、周辺相場の半分以下という破格の家賃で提供されている。折半すれば一ヶ月分の予算で四ヶ月は暮らせる計算で、これほど効率のよいルームシェアは私にとつても願ってもない選択肢だった。

家賃だけではなく、電気代が極端に安いのも魅力だろう。住宅内のディスプレイを年中無休で点灯しておくために結ばれた大電力契約と一本化されているおかげで、各部屋で使用する電力の単価が工場並みに抑えられていた。部屋にサーバーやネットワーク機器を積んで世話をしているニコラにとっては、まさに渡りに船といったところだったろう。

「さつきステラが、カフェ・レヴァリイのケーキを買って帰ってきたよ。やつぱり昨夜はケンカしてたんだね」
「ふーん。でも、あのカペラがケーキくらいで許すかしら」

ニコラと向かい合わせて座る白いエンプラ板のテーブル

ルの上には、濃紺のボウルに盛られた親子丼と、翡翠色の濃縮還元フレーバーティーで満たされた透明なコップが二つずつ。それと、ニコラの横には最近ではあまり見かけなくなつた物理のノートパソコンが持ち込まれ、黒い電源ケーブルやネットワーク用の青いケーブルやらが取り付けられている。

この共用のダイニングルームには、備え付けの冷蔵庫と冷凍ストッカー、洗濯乾燥機やその他雑多な古い家電家具が壁に沿って並べられており、雑然とした古めかしい印象が拭えない。油とほこりがこびりついた旧式のトースターはもはや使い物にならないが、勝手に捨てていいのか分からずにいた。

「ふ、あ、からね、いま『イーグル』に繋いでるとこ」

ニコラはサーモンを一口食べたスプーンをくわえたままそう言うのと、器用にその柄を指の間に持ち替えてノートパソコンを触り始めた。さつきまでジャックしていたエントランスの防犯カメラ映像を、二階北側——ステラとカペラが住んでいる部屋の近くだ——の音声に切り替えているのだらう。

彼女が「イーグル」と呼ぶ壁伝導センサーは、ニコラが廊下の壁に貼って回った小さな特製モジュールだ。円形に配置された部屋の幾何学的構造のおかげで、パラボラアンテナのように音を効率よく集められる場所がいくつかあるらしい。センサーの見た目はワシをモチーフにしたイラストが描かれたただの小さなステッカーで、古い貼り紙だらけの雑然とした壁に貼り付けるのに適したカモフラージュになっていた。

『カペラ、昨日はごめんよ……』

『これ、レヴァリイの……仕方ないなあ、今回だけだからね』

イーグルはバッテリーを一切使わずに中距離から盗聴できるモジュールで、特定の周波数の電波を送ると、こんな感じで音声に乗って返ってくるらしい。詳しい仕組みはよく分からないものの、魔法のような代物だ。

「ほらね」

「でも、明日にはまた『ステラのせいで体重が増えた』って怒ってるかも」

「あはは。言えてる」

見て分かるとおり、ニコラはこうして公開情報収集や街中での通信傍受、ときには盗聴や盗撮を駆使して様々な個人情報収集するという、いかにも悪い趣味を持っていた。「ゴシップ好き」と表現すればかわいらしい女子の習性に見えるかもしれないが、違法行為さえ厭わずに、と付け加えると話は別だ。

とはいえ、ここで正義に則ってニコラを通報しても、せいぜい二倍の家賃という不条理な罰金を払う羽目になるだけだろう。それに、今まで彼女の犯罪を見過ごしてきた事実は私にも不利に働くはずだ。そういう勘案と、ニコラなら何があってもどうにか隠しおおせるだろうという謎の信頼から、今はこの共犯めいた関係を楽しむことにしていた。

それから、一通りステラとカペラの会話を聴取したニコラは、スピーカーから片耳に着けたモニターイヤホンに切り替えて住宅の巡回を始める。そして、何部屋か確

(2) 本来、居室には床面積の七分の一以上の窓が必要だが、例外として十分な有効光量を持つ光源に置き換えることが認められている。

認を終えたところで、もう一方のイヤホンを私に手渡した。

「あ、中庭の音が聞こえるよ。ほら、オオカミの遠吠えみたい……」

「最近また強くなってきたわね」

イヤホンからは、金属が擦れる音のような、猛獣のうめき声のような不協和音が途切れ途切れに流れている。目を閉じて意味ありげな音の羅列に聴き入るニコラの様子は、端から見ればお気に入りの音楽でもシェアしているように見えるけど、この雑音は音楽と呼ぶにはあまりに不安定だった。

ニコラが「中庭」と呼ぶ円環集合住宅の穴にあたる部分は、その名付けとは裏腹に奇妙な謎に包まれた空間である。住民の私たちでさえ中庭に入る方法を知らなかったし、ニコラが密かに入手した建物図面にも全く記載がない。その上、航空写真を見ても頑丈そうな銀色のドームで覆われているという徹底ぶりだった。

もちろん、この雑音は普通に生活している住民たちに聞こえるようなものではない。感度のよいイーグルが壁

伝いの振動を増幅しないと、こうして音として聞き取ることさえ難しい微弱な現象だ。住民の中ではおそらく私たちだけがこの「中庭の音」現象を知っていた。

中庭の音なんておしゃれな名前の現象なら、もっと優雅な小鳥のさえずりや噴水の音を聞いていたいのものだ。そんなことを思いながら、私も黒い海鮮シーズニングを振りかけて、とっておきの親子丼を食べ始めた。

＊

週刊連載コラム「ララのメタ世界探訪記」。まだ十分に注目を集めていない新進気鋭のワールド、クオリティは高いものの日の目を見ないまま新着リスト落ちしてしまつた隠れ家的ワールド……その他、私がピンときたマインナーなワールドを毎週いくつか取り上げてその魅力を発信するコーナーである。

さつきまで滞在していた「アステロイド・ベルト」の紹介は、ワールドの制作者から依頼を受けて書いているPRだけど、このコラムはむしろエッセイに近い。こうして暇な時間に回ったワールドの日記をまとめて送るだ

けという、比較的気楽な仕事だ。もちろん、そういうた
だ、日記で必要以上に褒めたり皮肉を込めたりするとコ
メントが荒れるから、単なる宣伝記事より表現に気を遣
う部分は多かったりする。

たまに「新しいワールドを作ったのでコラムで取り上
げてください！」なんてDMが届くけど、そういう出会
い方をする、いくら面白そうなワールドでも記事には
できなくなってしまう。下手な立ち回りで宣伝に使われ
たりしてステマがどうのと騒がれるのは癪だし、同じよ
うな宣伝依頼が増えるのが目に見えているからだ。

しかも、そこから正式な執筆依頼に繋がることは滅
多になく、ほとんどは「紹介という体でどうか無料
で……」なんて無茶な主張の一点張りに持ち込まれるの
で性質が悪い。現に承認待ちのメッセージリストはその
手のスパムで埋め尽くされていて、まともな仕事の依頼
を探し出すのに苦労していた。そういう時は、たいてい
自動応答モードに切り替えて適当なボットに返信を任せ
ている。

統合チャットアプリを立ち上げると、今日も既に数十

件の未読通知が上に並んでいた。

清流のせせらぎに包まれたり、だだっ広い草原で風の
音を楽しむリラックス自然系のワールド——細かな工夫
に手間をかけていそうだけど、紹介できるほどの特徴は
なさそう。記念撮影によるバズを狙った個性的なランド
マークを中心に据えた名所系ワールド——それ、私が文
章で紹介する必要ある？……と、添付されたリンクも
見ずに自動応答モードにスワイプしていると、不思議な
メッセージが目に残った。

『ララさん。どうか彼女を救ってくださいませんか』

『外に連れ出してくださいただでよいのです。それで全
てが回り始めます』

『本物の光を見せてあげたいのです』

途中まで読んでから、こんな単純な手口にまんまと
引っかかってしまった自分に嫌気が差す。まるで勇者
に世界を救ってほしいと告げる神官のようなセリフの
数々。先を見ずとも、謎解き系でストーリー強めのワ
ールドを紹介するための導入なのは明らかだった。こうい
う宣伝手法も最近増えてきたな。

もうスクリーニングAIに初期対応から任せてしまおうかと思ったものの、ニコラにバレたら「プライバシーとセキュリティ」に関する七十時間程度の講義を勧められて、また面倒なことになる気がした。彼女は些細なプライベートの一部さえ、暗号化せずにクラウドに送るのを極端に嫌っていたから。

「彼女を救って、って……ゲームはゲームでしょ？」

『これはゲームではありません』

「……そうですか」

『時間がないのです。早くしなければこのワールドは閉じてしまいます』

「呆れた。深夜の通販番組じゃないんだから」

こちらの反応を見透かしたような構成にまた腹が立つ。何もしないままワールドが閉じたからって、それは「彼女」を救えなかったことにはならない。ワールドを複製すれば囚われの姫はそれだけ増えるし、逆にワールドが消えれば姫は初めから一人もいなかったと主張することさえできる。自由に作ったり壊したりできないなら、それは現実世界と変わらない。

あの手この手で私の気を引いてまでプレイして欲しいゲームなら、さぞ完成度が高くて完璧な仕上がりなのだろう。

「本当に面白かったら、紹介でも宣伝でもしてやろうじゃない」

わざと目を引くように練られたメッセージにまんまと反応したのは私が悪い。だから敬意を表して、しっかりと批評してあげた方がいい。末尾に添付されていたリンクは見慣れない文字列で、おそらく海外のマイナーサービスか、セルフホストのサーバのものようだった。

ワールドのプレビューを開いてみると、生活感のある薄暗い部屋を背景に、ピンク色のパジャマを着た小学生くらいの少女の後ろ姿が映り込んでいた。体育座りで膝を抱えて、いかにも不穏そうな雰囲気放っている。綺麗な金髪はこういったモデルにはありがちで、この子が姫、ということなのだろう。

数枚のスクリーンショットはいずれも画質が不鮮明な上に、構図が練られているような様子もない。プレイ動画を一定間隔で切り取ったようなシーンばかりだ。

フレンズ同士で集まったり知らない人同士で交流を楽しめるように作られているワールドが多い中で、人数制限が一人に絞られているのも特徴的だった。ワールドの複製も制限されているから、並列で楽しむことさえできない。一人で楽しむための特別な設計が施されているか、サービス側のリソースが複数人を参加させるレベルにないか、といったところだろう。

こういう未審査のワールドでは、プレビューからは予想できないセーフティ⁽³⁾が必要になるレベルの過激な表現を伴うことが多い。私はセーフティレベルを最大のX8にして、スプラッター映画にでも臨むような心地で何度か深呼吸をする。それから「ダイブ」にカーソルを合わせて、ゆっくりとトリガーした。

*

十秒ほどのトランジションの後に私が降り立ったのは、奥に部屋が続く細い廊下の中腹だった。振り向くと玄関が、左を見ると小さなシンクとコンロを備えたキッチンが目に入る。天井には簡素な照明器具が設置され

ているが、剥き出しの細長い蛍光灯には光が点っていない。

冷蔵庫、電子レンジ、ケトルと、ある程度家電は並べられているが、棚には調理器具や食器が置かれている様子がなかった。細かいオブジェクトを大量に配置すると動作が重くなるし、探索の自由度を高めすぎてもユーザが飽きるから意図的に減らしたのかもしれない。

しかし、天井、キッチン、廊下の先……何度か向きを変えると、その度に小さな引っかけを感じる。さらに周囲を確認しているうちに、視界全体に広がる違和感と不快感が身体全体を支配していくのが分かった。

「うえ……これ、酔いそう」

顔の向きを変える速度に、視界が全く追いつかない。右を向くと、一秒遅れて右へ。左を向くと、また遅れて左へ。レンダリングコストを全く無視したワールド特有のあの感じ。処理能力の限界を超えないようにゆっくり動けば、それは減るものの、これでは周囲を見回したり何

(3) 意図しない音や光の効果、不快な演出などを事前にブロックするためのフィルタリングシステムのこと。

かに注目するのさえ億劫になってしまう。VR体験としては「最悪」の類のものだ。

数多くのワールドに潜ってきた私でさえ、ここまでのスペックが要求されるものは見たことがなかった。制作者はよっぽど高価なデバイスでテストしたみたいだけど、こんなワールドを紹介したら私まで叩かれてしまう。グラフィック重視のハイエンド向けワールドは、廉価版しか持っていないネットの暇人には特に評判が悪いのだ。

こんなワールドを記事にはできないし、久しぶりのVR酔いで最悪の気分だし、もう帰ってもいいかしら。

「パ……パパ？ 大丈夫？」

と、クイックメニューを開いてホームに戻ろうとしたところ、廊下の奥からこちらの様子を窺うような細々とした声が聞こえた。音のする方向にゆっくり視界を向けて注目したものの、ネームプレートはおろかユーザーリンクを示すステータスカラーすら確認できない。

考えてみれば、ここは一人用のワールドなのだから他のプレイヤーがいるわけがない。声の印象から察する

に、さっきプレビューに映っていた体育座りの少女ものだろう。素人っぽさを残しつつ、きちんと小学生っぽさを主張する生々しい演技だ。ふと「これはゲームではありません」という紹介を思い出すほどの存在感があった。

「あなた、誰？」

ただのNPCなのは理解しつつ、まだ得体の知れない野良^{サイドロード}ワールドの素性を探るように、おそろおそろ少女に声をかける。謎解きゲームのキャラクターなら、ある程度の音声認識と世界観の説明くらいはこなせるだろう。

こちらの呼びかけに応じて、予想通り少女が歩み寄ってきた。明るく綺麗なストレートの金髪に、透き通った茶色の瞳、リアルさを残しつつ適度にデフォルメされている整った目鼻立ち。ピンク色のパジャマは光の反射がよく制御されていて、つやつやとしたシルクっぽい質感を示していた。

彼女は先ほどよりも少し緊張が緩んだ様子で、しかし、私の問いには答えずさらに質問を続ける。

「イヴなの？ パパはお仕事に行った？」

イヴというのは、本来ここにいるべき少女の家族か友達か——とにかく私ではない誰か——で、彼女が心を許せる相手なのだろう。しかし、そんな存在を私や父親と間違えるだろうか。廊下の薄暗さが私の姿を隠しているつもりなのか、あるいは彼女以外は全員が同じデフォルトアバターに見える世界という設定なのかもしれない。

目の前の少女はよく作り込まれたモデルで私を見上げて、じっと私の動きを観察している。

「私、イヴじゃないわ。あなたの名前は？ 私の声、聞こえてる？」

私を「イヴ」と呼んだ少女にもう一度尋ねるも、彼女はきょとんとした表情で私を見つめるだけ。確かに私の声は聞こえているはずなのに、その内容を理解できずにいた。随分と出来が悪いAIだ。無料の会話AIだって、もう少しまともな反応を示すと思うけど。

少女は私を訝るように首を傾げると、垣間見せた「イヴ」への安心感を背中に隠すように、警戒した面持ちで一步後ろへ下がった。

「イヴじゃないの？ あなた、だれ？」

「私はララよ。あなたは？」

「パ、パ？ やつぱり、パパなの？」

戸惑った少女の表情が晴れることはなく、このストレスフルな導入パートはもうしばらく続く様子だった。こちらの言葉が全く伝わらなくてじれったい。そんなに私の発音が悪いっていうの？

そもそも、パパとララって全然違うじゃない。音が二つで、どちらも同じ母音で……いや、少しだけ似てるかもしれない。ままならない会話へのもどかしさでカッとしていたけど、音声認識で混同されやすい語ではあるだろう。それなら仕方ない、と先ほどよりゆっくり、そしてはつきりと少女に名前を告げた。

「……ラ、イ、ラ」

「パ……えーと、ア？ でもなくて……わかった、ライラね。ライラっていうのね？」

ああ、やっと伝わった。名前を呼ばれるのがこんなに嬉しいなんて。本名から一文字抜いた「ララ」というハンドルネームはそれなりに気に入っていたけど、ゲームを進めるためなら別に本名でもいい。小さな達成感と共に

に大きく頷くと、少女は嬉しそうに飛び跳ねた。

「よかった！ ライラ、私のお家へようこそ！」

名前を伝えるだけでこんなに苦労するとは、先の展開が思いやられる。それでも、このかわいらしい少女が私のアクションで表情豊かな反応を見せるとなかなか悪い気はしないし、ゲームデザインとしては練られている気がした。

「私はアキラ。ここで一人で暮らしてるの。でも、パパとイヴがお世話してくれるのよ」

アキラ——ほんのり男の子っぽい元気な名前は、姫のおしゃまな振る舞いには少し似合わない気がした。

それから、アキラは私を廊下の先にある部屋に案内してくれた。照明もなくほんのりと空間全体が光る薄暗い部屋にはなぜか窓がなく、パースのパラメータが誤っているのか四方を囲む壁が少し歪んで見える。ここが実は地下室だと言われても疑わないほどの強い閉塞感。姫を閉じ込める牢獄としての舞台設定を十分に表現していた。

床には毛布やタオルケットのようなテクスチャが雑然

と広がり、それらの布の上にはいろいろな日用品が転がっていた。その中でも大事そうに置かれている灰色の丸いクッションは、彼女のお気に入りなのだという。

「ふわふわで柔らかいでしょう？ 生まれたときからずっと一緒なの」

パパ、そしてイヴ。アキラをこの部屋から救うというストーリーを考えれば、彼女が「パパ」と呼ぶ存在が悪の親玉となるだろうか。イヴはアキラ専属のメイドか、あるいはママ——アダムと対をなすという意味で——を示しているのかもしれない。いずれにせよ、彼女をここから連れ出すための鍵になりそうだ。

「ライラも、私のお世話してくれる？ 私、あなたと遊びたいわ」

上目遣いでそう尋ねる視線に、人間じみた不思議な魅力を感じながらゆっくりと頷くと、アキラは私の手を握って嬉しそうに微笑んだ。

＊

不思議なことに、アキラは音声認識以外の性能は最新

のAIと遜色なかった。先ほどまで見せていた食事のモーションは実際のプレイヤーと区別が付かないほど精巧で、ジェスチャーから意図を察する機能にもミスや遅れがない。それらがむしろ音声認識よりも実装が難しい分野なのが不思議だった。

「私、親子丼って大好き！ ライラが作ってくれたの？」
首を振る。私は冷蔵庫にあった丼のオブジェクトをお盆に載せて運んだだけだ。まだ精巧な制御が必要な動作をこなせるほど、このワールドに慣れていなかった。

「じゃあ、きつとイヴが冷蔵庫に作り置きしてたのね」

しかし、高性能AIのデモが続くばかりで、いつまで経っても謎も事件も起こらない。チュートリアルはとくに終わっているはずなのに、アキラの遊び相手のようなパートだけが続いていた。いろいろなオブジェクトを持ち上げたり、柵や引き出しを開けてみても、逐一アキラの説明が始まるばかりで不審者もポルターガイストも気配さえ見せない。

ここまで来たら、ストーリー開始の糸口くらい見つけ出したいところだ。何か打開策はないだろうか……と辺

りを見回しているうちに、薄暗い廊下とその先にある玄関に目が行った。このワールドを紹介していた神官が「外に連れ出すだけでいい」と言っていたのを思い出す。

まだゲームは始まっていなかったってこと？ つまり、突然の来訪者——もちろん私のことだ——が保護者のいない隙を狙って外に連れ出すところから始まるストーリー……なんとも犯罪めいた感じはするが、プレイヤーが自発的に違法な行為を選ぶまでクリアできないゲームというのも、ある種個性があって魅力的かもしれない。

それなら、もうきつとワールド制作者がやきもきしている頃だろう。私はアキラの手を握って、立ち上がるように促した。

「どうしたの、ライラ？ かけつこでもする？」

今からあなたを外に連れて行くのよ、と言ってもその声はアキラに届かないだろう。私はアキラをできるだけ落着かせるために、彼女に目線の高さを合わせるように体をかがめて顔を寄せた。そして、アキラの両手を握って目を見ながら一歩ずつ後ずさりして玄関に向かって

いく。

初めは私が何をするつもりか分からずにいたアキラは、廊下まで手を引かれたあたりでその意図に気付くと、慌てて私を止めようとする。

「お外はダメよ、ライラ。パパに怒られちゃうわ」

やはり悪役の「パパ」がここで出てくるわけだ。思った通りのキーワードを引き出した満足感で、早くストーリーを進めたい気持ちちはやる。しかし、二人の矛盾する動きをワールドの物理演算が上手く解決できなかったのか、アキラに引かれた視界が私の後ろに残って動かない。それでもさらに構わず彼女の手を引くと、今度は逆に視界がぶれて前に飛んだ。

「ライラ！　ねえ、ライラったら……本当に行くの？」

私、知らないからね。ライラが勝手に私を連れていったのよ？」

アキラが私を止めようと引つ張る腕の力が弱くなる。

私の力には勝てないと思ったのか、それとも、外に出る理由が欲しいだけなのか。いずれにしても、強気だったアキラが抵抗をやめる瞬間、背中にぞくりとした不快な

興奮が走るのを感じた。ああ、私がこの子を救うんだ。

玄関のドアノブに手を掛けると、カチャンという軽やかな手応えが耳に伝わる。これが正しい選択肢でしょ？

という確信と共に一歩前に進むと、急にドン、と不可視の存在にぶつかるのを感じて身体が止まった。いや、私の身体は動いているけれど、また視界が一分後ろに残ったまま進まないのだ。

歩く速度には気を付けていたつもりだけど、この絶好のタイミングで通信エラーか……と、キャリブレーションのためにぐるりと周囲を見回すと、私を手を引いていたはずの少女の姿はなく——その瞬間、アキラの身体が廊下の端まで吹き飛ばされ、部屋の扉に背中を強く打ち付けていた。

「パパ、ごめんなさい！　ごめんなさい……」

目に見えない強い力に薙ぎ払われ、放物線を描いて床に転がったアキラは、すぐに起き上がって身を守るように小さくうずくまった。そして、うわ言のように「パパ」への許しを乞い始める。私はその悲痛な姿の前に、ゲームであることも忘れて思わず「アキラ、どうしたの？」

「アキラ！」と叫んでいた。

私の声にならない声は震える彼女に届いていたように、ハッと顔を上げた泣き顔のアキラと目が合う。でも、動けない。もう足が動かない。

「ライラ！ ライラ、私を助けて！ あ、ああ——」

そう私の名前を呼ぶアキラの悲痛な叫び声と共に、どこからともなく「おい！ お前、イヴじゃないな！」という男の怒鳴り声が聞こえたかと思うと……信号喪失^{ロスト}。強制的にホーム画面に戻されて、そのままアキラのワールドは閉じてしまった。

急な静けさの中、私はしばらくの間動けずにいた。慣れたホーム画面の天井を見つめているうちに、だんだんとVR酔いが覚めていく。私の身体がここにあるという、確かに地面を踏みしめている感覚が戻ってきた。しかし、目の前で繰り広げられたあの強烈な場面は、目に見えない存在への恐怖と共にまだしっかりと思い出せる。

ヘッドセットを外すと、いつもの部屋に横たわる自分の身体に意識が重なってはつきりしていく。視界の端で

光るテレウィンドウには、私の言葉を拾ってどうにか組み上げたらしい壊れたテクスチャだらけの薄暗い廊下が表示されていた。真っ暗で何も見えない向こう側から、またあの怒鳴り声が聞こえるのを想像して、ぶるりと身が震える。

ここまでが体験版ってことなのかしら。ジャンルは謎解きというよりホラーだろう。いつになくリアルな空気だった。単にグラフィックを精細美麗にするだけでは決して得られることのない、限りなく日常に近い不調和と狂気。足を一步進めることさえ躊躇う不気味さとの暗さ。ひよつとすると、まだ発掘されていない天才が作った作品かもしれない。

これは、本当にゲームなのか？ キャッチコピーを付けるならこんな感じだろうか。「キミに少女が救えるか」なんてのより、不穏さと不気味さを重視した方がページビューを稼げるはずだから。

「でも、これ……本当に、ただのゲームなのかしら」

私に助けを乞うアキラの声が、どうしても忘れられない。まるで、本当にずっとあの世界に閉じ込められてい

て、まだ私の助けを待っているような、後ろ髪引かれる妙な感覚だけが残っていた。そんなわけないのに。

とりあえず、初めに受け取ったメッセージには返信しておこう。どのように紹介してほしいのか、開発状況はどうなのか……そもそも、シナリオのモデルは法的に問題ないものか。聞きたいことはたくさんあった。本当なら早く続きをプレイしたいところだけど、いったん顔を洗って落ち着くべきだ。

外のサインプレートを戻そうと思ってドアノブに手を掛けると、ちょうど私に用事があったらしいニコラと鉢合わせした。

「あ、ライラ。外からの攻撃パケットがめっちゃ増えているんだけど！ 心当たりない？」

ニコラは少し慌てた様子だった。どこから攻撃を受けているらしい。しかし、私は数時間前から部屋にこもってずっとアキラ……そう、アキラと過ごしていただけで、スパムもウイルスも開いた覚えはなかった。

「攻撃パケット？ 私、さっきまでワールドに潜ってただけで、別に何も……」

「今から証拠を集めて反撃を……って、ライラ、顔が真っ青だね。どうしたの？ 柄にもなく、VR酔いでもした？」

心配そうに覗き込むニコラの顔が近づいて、私は元氣よと返すつもりで自分の両頬に手を当ててみる。しかし、私の顔は血の気を感じないほどに冷えていて、さらに手足は痺れるほどに凍えていた。あのリアルな光景に、現実とゲームの境界が曖昧になる感覚に自分が混乱していたことにやっと気付く。

「ニ、ニコラ……私、あのね、さっき、え、えっと……」
アキラが、イヴが、パパが——と、状況を整理しようとしても、あの光景が蘇って言葉が出ない。私の身に起きたことなど知らないきよんとしたニコラの顔を見ているうちに、私はなぜかわんわんと声を上げて泣いていた。

＊

それから、私はワールドを宣伝する巧みなメッセージを受け取ったこと、そのワールドでアキラという少女に

出会ったこと、アキラが「パパ」と呼ぶ不可視の存在に吹き飛ばされたこと、そこでワールドが強制終了してしまったことについて、ニコラが抗不安薬^{ジアゼレン}を持ち出してくる前になんとか話し終えた。

改めて身に降りかかった事件を振り返ると、まるでVRマニアがヘッドセットを着けたまま眠ったときの夢の話をしているようで、さっきまで目の前で起こっていたことはずなのに現実味がない。いや、ほとんどは別の世界^{ワールド}で起きていたことだけど、なんかこう……つまらないネットロアのアウトラインを書き起こしているみたいだ。

きつとニコラも、この不気味で荒唐無稽な話に首を傾げるだろうと思ったものの、なぜか彼女は話を進めることに不機嫌そうな表情で小さく「やっぱり」「ありえない」と文句を言うばかりで、この話に疑問を示す様子もない。それどころか、私の話に割り込むようにテーブルに手のひらを打ち付けて、専門用語っぽい——私には理解できなかった——謎の語彙を交えて喚き始めた。

「——古くて単調なエクспロイトを大量に送るだ

け……どうせただの^{ガキ}brutalのくせに、クソムカつく！
ライラをハメたつてことじゃん！」

「別に私、騙されてないわ。ただ、ちょっとゲームをプレイしただけで」

「だってライラ、泣いてるじゃん！ 泣かされた上に追い打ちで攻撃されるなんて、悔しくないの？」

「ゲームで泣くことだってあるわよ。私は心が動いたから泣いたの。だいたい……」

まだニコラがこんなに怒っている理由も分からないまま、彼女の語気に合わせて私の口調まで強くなっていく。悪い流れだった。私にしぶとく残る不安な気持ちがある。そのままニコラへの敵対心に変わりそうなのを感じて、一度ゆっくり深呼吸をする。顔にも手足にも熱が戻ってきたのに、身体の奥深くがまだ落ち着かずにいる。

「——ふう。そもそも、追い打ちつてどういうことよ？」
「外から攻撃を受けてるんだよ。内向き^{インベン}パケット^{パケット}がもうメチャクチャ」

「でも、私のヘッドセットは壊れてないわ。インターネットも繋がってるし」

「あーもう、そうじゃなくて！ たぶんライラが接続したワールドと同じIPアドレスから、ウチの……私たちのネットワーク全体に攻撃が来てるの。きつと、初めからそのつもりだったんだよ」

攻撃？ アキラのワールドから？ そんなわけない、と咄嗟に言い返しそうになったけど、最初に送られたDMが私を狙った標的型攻撃で、魅力的なワールドの紹介を装って私の居場所を特定しようとしていた——とすれば話は繋がる。しかし、誰がそんなことを。熱心な私のファンかサイバーストーリーカーか……口には出さないけれど、ニコラが味方でよかった、と思う。

そんなニコラは「あーほんとにムカつく！ 私が誰だか分かってんの？」と、ぶつぶつ言いながらダイニングテーブルにディスプレイやキーボードの城塞を組み立て始めた。

テーブルなんて繋げなくてもインターネットは使えるし、ディスプレイやキーボードだってVR空間に自由に配置できるから、こうやって現実にはデバイスがたくさん並んでいる光景はなかなか見慣れない。前にニコラにそ

んな話をしたことがあったけど、自分の視覚や聴覚を攻撃対象領域に置くんなんてリスクが高すぎると言っていた。

彼女を囲むディスプレイが一斉に青い壁紙の光を放つのに合わせて、ニコラがキーボードから短いコマンドをいくつか入力し始める。そして、彼女が「反撃」と表現する一連の作戦——おそらく実際は過剰防衛にあたるような——を開始した。

「ライラも飲む？ ちょっと長い夜になりそうだから」

ニコラは冷蔵庫でよく冷えた黒い缶入りのエナジードリンクを取り出して、その半分ほどを喉に流し込むと、残りを勢いよく机に置いた。そして、この小さな缶から少しずつ栄養を摂取できるように、上から細いストローを投げ込む。私は最大処方の「黒缶」を飲むと気分が悪くなるから、もう一段階弱い「赤缶」を飲むことにした。

とはいえ、私はニコラの作戦に協力できるようなスキルもない。なんとなくドリンクを飲んでみたはいいものの、私にできるのは寝ずに彼女を見守ることくらいだろう。向かい合わせになっていたダイニングチェアをニコ

ラの側に移動して、彼女がディスプレイ上で展開していく作戦を眺め始めた。

ここからはニコラの説明をそのまま横流しにする。

——今はダークネットで切り売りされたポットネットから攻撃を受けていて、実際の攻撃元が分からないので、適当な犠牲者^{ゾンビ}からC&Cサーバーまで逆探知しようとしている。外から来たパケットはミラーして蓄積され、OSとバージョン、使われているコマンドウィルスごとにリアルタイムで表示され、そこから反撃できそうな隙を見つける……らしい。

彼女は先ほどまで感情のままに恨み言を並べていたのと打って変わって、一言も発さず作業に集中している。素早い指さばきに合わせて響く小気味よい打鍵音に耳を集中させると、冷蔵庫の低い動作音やデバイスのファンが回る音までよく聞こえた。

静かな時間が流れている。ディスプレイに顔を近づけて青い光に照らされているニコラの様子を見てみると、改めて現実に戻ってきた安心感が奇妙な懐かしさと共にこみ上げてきた。

「ニコラ、あなたがいてくれて助かったわ」

「……私はいつも通り、自由にやってるだけだよ。悪いのはライラを騙したガキなんだし」

ニコラはこちらに顔を向けずにそう答える。彼女の視線に合わせてディスプレイに目を戻すと、白黒の解析ログが上から下へとめまぐるしく流れていくのに合わせて、攻撃の傾向がダッシュボードに表示されていく。

ぐんぐん更新されていくカラフルなグラフはまだしも、ディスプレイで細かい文字を読むのは苦手だ。こういう物理ディスプレイで見るのはテレビ番組やアニメばかりだから、難しいニュースを延々流されているような気分になる。もちろんそれは優秀な睡眠導入剤として、私を曖昧で隙だらけの世界に誘っていった。

「でも、ニコラがいなかったら、私死んじやってたかも」
「それはさっきのVRの話でしょ。まだ混乱してるの？」

「違うわ。私がワールドから戻ってきたとき、ニコラを見てここが私の家だって思ったの。だから、私——」

*

「ホームカメラ、繋がった！ さて、ライラを騙したの
はどんな変態かな……」

次に私が目を開けたのは、ニコラがそう叫んで嬉しそうに両手を挙げる瞬間だった。

古いOSのバージョンと脆弱性の話を聞いていたところまでは、なんとか覚えていいる。そこから、ニコラと何を話したんだっけ。テーブルから身体を起こした私は、ディスプレイに表示された攻撃元のグラフがすっかり落ち着いているのに気付き、それから私がかんり長い時間眠っていたことに思い至った。

「……うーっ。ニコラ、ごめん。寝ちゃってた」

「あ、ライラ。敵の本拠地に無防備なライブカメラが置かれてるのを見つけたよ。何か手がかりになるかも。古すぎるゾンビが混ざってて、あとはやるだけだったっていうか——」

ニコラは私が眠っていたことは既に気にしていない様子で、見えない敵に反撃を食らわせた興奮を丸ごと伝え

ようと、早口に身振り手振りで大忙しだ。私もどうかそれに応えようと、眠い目を擦りながらその映像に視線を向けた。ディスプレイにはわずかにブロックノイズの乗ったいかにもウェブカメラっぽい映像が流れていて、サバーブルームやオフィスのような空間ではなく、目の前で誰かが生活を送っている住居だと分かる。

ぼんやりした頭で部屋の中を一つ一つ確認していくと、布団や毛布が広がる床、その上に捨てられた日用品——その瞬間、私の意識を押さえ込んでいたしぶとい眠気はすっかり吹き飛んでいった。

「ニコラ！ 私、さっきここにいたわ！ 見て、この灰色のクッション。同じ物がアキラの部屋にもあったの」
アキラが愛用していたもこもこの丸いクッションに、確かに見覚えがあったからだ。

しかし、地下室のような閉塞感を放っていたはずの壁には、なぜか森の中に建つシンデレラ城を映したテレビウィンドウらしきデバイスが設置されている。設定が狂って歪んでいるように見えた壁は、今思えば見慣れたAIディスプレイの曲率とぴったりに同じだった。

そして、カメラの真ん中に映っているのは、サイズの合わない毛玉だらけのパジャマでのろのろと布団を這う——アキラと同年くらいの——傷だらけの女の子だ。

顔には殴られたようなあざができていて、パジャマにも血がにじんでいるように見える。きつと布で隠された腕や脚にも、たくさん傷が残っているだろう。

「でも、この子はアキラと全然違う。パジャマはもつと新しかったし、髪ももつと明るくて……」

何より、こんなにみすばらしくなかった。そう口にするのはなぜか憚られた。髪はところどころ色が脱げ落ち、黒と金のバイカラーと表現すれば聞こえはいいが、単にカラー剤が上手く塗れていないだけだ。元はもつと綺麗な黒髪だったのだろう。もちろん、メタ世界上のアバターは現実世界の姿を反映するものではないけれど、まるで生き別れた双子の姉と孤児を見ているようで心が痛い。

画面の向こうのアキラは、どんな気持ちであのアバターを着ていたのだろう。この髪は、アキラ、自身が染めたのだろうか。もし、そうだとしたら。

「じゃあ、ここを攻撃したのは、ハッキングが大好きな天才女子小学生ってこと？ 随分やつれてるみたいだね」

「でも……アキラ、助けてって言ってた。きつと、アキラの『パパ』が仕返しに来たのよ」

「『パパ』って、この子を吹き飛ばしたゴースト、だよ？」

そうだ。あの時、アキラの父親はあのワールドに存在していなかった。しかし、アキラの世界には確かに「パパ」がいた。そして、今も「パパ」に怯えながら過ごしていることだろう。もし、あの世界が現実を縫い付けた単なるスクリーンだとしたら。アキラの世界と私の世界が偶然重なっていただけだとしたら。

「やっぱ、この子はアキラよ。私が見ていたのは、ずっと現実だったんだわ」

現実世界の動きをメタ世界に映す手段はいくらでもある。私のように専用の定点カメラで動きを追跡したり、あるいは全身に慣性センサーを装着して、アバターの動作として出力すればいいだけだ。現実のアキラが吹き飛ばされる動きさえも精巧に反映していたのだとしたら、

あの見えない力の説明もつく。

しかし、まだ少しの疑問が残る。私が開けた引き出し、アキラに渡した飲み物や食べ物、現実世界ではどう映っていたのだろう。彼女はずっと私とメタ世界でおま、ま、ごとをしていて、お腹が空いたまま私と遊んでいたのか。それにしても、アキラの反応はあまりにも自然で素直なものだった。

いずれにせよ、アキラはまともな状況に置かれていないはずだ。彼女のような小学生がヘッドセットを装着し続けるのは大きな負担になるだろうし、そもそもあれほどの暴力を振るわれている状態なの言うまでもない。

それに、彼女は確かに「ライラ、私を助けて」と言った。あの地獄から、救つてと。

「ねえ、ニコラ。私、アキラを助けに行きたい。ニコラだって、やられっぱなしじゃ嫌でしょ？」

「私は別に、この映像で脅してモネロでも巻き上げればスツキリするんだけど……まあ、いいか。協力するよ」

もし「パパ」が本当にアキラの父親なら、私たちは堂々と未成年者の誘拐計画を立てる犯罪者だ。それで

も、あんな野良猫の巣みたいな場所に閉じ込められて、手ひどい虐待を受けるアキラを放っておくことはできなかった。彼女を見て見ぬ振りすることの方が、何か重大な罪に問われるような心地がした。

自分の正義のためなら犯罪も厭わないなんて、ニコラと過ごすうちに私も変わってきたのかしら。

「……ありがとう、ニコラ」

それでも、ニコラが共犯になってくれるなら別にいいかな、と思った。

＊

私はすぐにでもアキラを助けに行きたかったけど、住所の解析と作戦の準備に二日はかかるというニコラの主張を尊重して……というよりはむしろ、彼女の情報がなければ目的地さえ分からないので、アキラの身の安全を願いながら待つしかなかった。

そして、作戦当日。ニコラが「作戦」のために借りたという黒い小さなSUVには、トランクはもちろん後部座席まで大量の荷物が積まれていた。その多くはニコラ

の持っているデバイス——ディスプレイ、サーバー、その他ネットワーク機器、ケーブル類——で、彼女がここに越してきたときと同じように毛布で丁寧に保護され、小さなサプライ品はまとめてプラ製の収納ボックスに詰められている。

レンタカーなんて借りるお金がどこから出てきたのかと尋ねてみたら、先日の調査で踏み台にしたボットネットの犠牲者^{ゾンビ}から盗み取った暗号資産を活用したらしい。つくづく抜け目のない天才エンジニアだ。

ニコラの主張によれば、トレース——彼女がしたような攻撃元を分析する活動に成功しているなら、向こうも私たちの居場所を知っているかもしれないという。おちおち部屋にいれば身体に直接的な脅威が、そうでなくても腹いせで盗難や損壊なりの被害を受ける危険性が高まっていた。

ニコラに「無くなったら困るものは全部積んでおかなきゃ」と促されるまま、私もVR用のヘッドセットやセンサーを梱包してトランクの隅に積んでいた。もともと少なめの荷物で越してきた身だったから、一緒に載せた

数日分の旅行セットも合わせると、なんだか行き先も無計画な引越しを始めたような気分になる。

「準備できたわ、ニコラ」

「じゃあ、そろそろ出発するね」

帰宅ラッシュのピークを過ぎる頃、私たちは目立たないように家を離れた。服装は夜に紛れる黒を基調としつつ、怪しい忍者のような黒装束には見えないギリギリのラインを保つ。それでも、ニコラと並んでポーズを決めるといかにも闇を駆ける悪役コンビのようで、姿見の前で思わず緊張が解けて二人でしばらく笑い合っていた。

ニコラの運転で幹線道路を北へ。目的地まではたっぷり四時間ほどかかるらしい。途中で運転を交代しながら進むことになりそうだ。『パパ』がない隙を突いて侵入する必要があるから、あまり悠長に休憩している暇はないだろう。

ライブカメラに映った部屋の間取りとテレウィンドウを手がかりに分析を進めたところ、アキラの部屋は私た

(4) 本人以外が保有額や取引履歴を追跡できない匿名性の高い暗号資産のひとつ。

ちと同じような円環集合住宅の一画にあることが分かった。航空写真を見ると、住宅街の真ん中で周囲を押しのけるように不自然な位置に建っているのも、うちとよく似ている。

こんなユニークな形の住宅が全国にいくつもあるなんて私は知らなかったけど、ニコラはIPアドレスからおよその地域が分かった途端にこの場所を候補に挙げていた。家賃と電気代の安さのおかげで、エンジニア界隈では有名な建築スタイルなのかもしれない。

＊

アキラの住む円環集合住宅に到着したのは、予定時刻を少し過ぎた午前二時あたりだった。辺りは真っ暗で、家の窓から漏れる灯りも道を通る人もない。今の私たちが注目すべきなのは数十メートルおきに設置された街灯くらいだけど、そちらも申し訳程度に足元をほのかに照らすだけで、やはり警戒する必要はなさそうだった。

近くの団地の駐車場に車を停めて、そこからアキラの部屋に向かう。たくさんの人が集まる場所なら、誰かに

見られても記憶に残りにくいらしい。木を隠すなら森の中、といったところか。駐車場を出て、右、左、もう一度右へ。地方都市の郊外にある住宅街の夜はただ静かで、ここには誰も住んでいないのかもしれないという錯覚すら覚える。

「もう住宅内に踏み台は置いてあるから、『パパ』さえ来なければ首尾よく進むはず」

足音を抑えて私の先を歩いていたニコラが、立ち止まってそう小声で告げながら前を指差す。彼女はこちらを見ていなかったけど、自分に言い聞かせるように力強く頷いた。目的地の建物は私たちにとっては見慣れた大きな円盤型で、既に作戦を首尾よく終えて帰宅の途についているような錯覚さえ覚える。

事前に確認した航空写真を見ても、やはり中心に銀色のドームが嵌まっていた。エントランスのセキュリティモジュールも、私たちの住宅と全く同じ型番らしい。同時期に、同じ計画の下で建てられたことを示しているのか。それにしても場所が離れすぎている気がするものの、これがこの二棟だけではなく北から南まで全国に広

がる光景なら、少しは納得がいくかもしれない。

わざわざ家賃を下げざるを得ない個性的な間取りにこだわる理由はよく分からないけど。

ニコラはバックドアを経由してものの数秒でロックを解除すると、ついでに監視カメラの映像記録を遅延^{ディレイ}させる。今から三十分ほどの映像を私たちが侵入する前のものに置き換えて、機械的な異常検知をすり抜けるという。

「ここにアキラがいるんだよね。早く助けないと」

「でも、アキラちゃんが本当にライラと話していたのかは、まだ分からないよ」

「それは……アキラの存在自体が異かもしれないってこと？　今さらそんなこと——」

本当のアキラを見つける前に可能性の一つとして想定していた、ワールド自体が撒き餌の標的型攻撃という仮説。弱々しいアキラの姿を見てからはすっかり忘れていた考えだけど、例えば侵入を見越して偽の監視カメラを設置していたなら……私たちは敵の思惑通りに罠に飛び込んでいくことになる。

私がどうしてもアキラを助けたいという気持ちはニコラも分かっているはずで、しかしアキラ自体が虚構なら、この気持ちが向かうべき場所はなくなってしまう。私にも自信を持ってアキラの存在を主張できるほどの根拠はなかった。それを認めるのが怖くて、ひたすら前に進もうとしていたのだ。

「——でも、うん。最悪の事態は想定しなきゃね」

周囲を確認しながら廊下を進む。今は侵入者を捕捉できないだろう監視カメラの位置と角度は、私たちから見れば薄暗い視界の中でもよく分かった。もちろん、ここに「イーグル」はいない。全く知らない場所の見慣れた景色の一つ一つを見ていると、まるで異世界を訪ね歩いているようで不思議な気持ちになる。

隅々から伝わる見知らぬ雰囲気、私の身体を冷たくした。

「この部屋だね。ここから先は、ライラがお願い」

「ええ、大丈夫。打ち合わせたとおり、ちゃんとできるわ」

階段をいくつか上ってさらに半周ほど。バックドアか

らの数秒のロック解除に合わせてこの扉を開ければ、父親^{パパ}からの慢性的な虐待で感覚が過敏になっているアキラだけが目を覚ますはず。それなら、仮に父親^{パパ}が部屋の様子を監視していたとしても、気付かれないように静かにアキラを連れ出せるはずだった。

ニコラの操作を待つほんの十秒ほどの沈黙が、数分にも数時間にも感じられる。その緊張に耐えかねて「ねえ」「うん」と短いやり取りを交わした瞬間に、わずかな電子音と共にロックが外された。すかさずカチャン、というドアノブを回す音を響かせて、部屋の中を覗き見る。

予定通り、少し遅れて中の住人から反応が返ってきた。

「だ、だれ……？ イヴ？」

「アキラ、私よ。ライラよ」

「ライラ……ライラなの？ 本当に、来てくれたの？」

ゆっくりと廊下から出てきた少女は、先日ライブカメラに映っていた本物のアキラだった。古びて汚れたパジャマに身を包む小さな女の子。胸にあの古びた灰色のクッションを抱えている。顔には大きなあざが残り、髪はところどころ無理やり金色に染められて痛々しい。そ

れでも、確かにあのワールドで見たアキラと同じ子だと直感で分かった。

「助けに来たわ。一緒に外へ行きましょ」

「う、ライラ……でも、私……」

アキラは私が差し出した手をじつ、と見るばかりで一歩も前に進めずにいた。ワールドにいたときと同じように洩るアキラの手を握ると、すべすべで柔らかいあたたかさが伝わってくる。冷たくて少し震える私の手には熱いくらい。私が助ける側のはずなのに、直接触れるその熱に勇気づけられていた。

今なら、きつといける。そのまま彼女の手を引こうとすると、突然廊下の奥の暗闇から野太い声が響いてきた。

「おい、お前ら！ 何をしてる！」

思わず身体が震える。すぐに分かった。この声は「パパ」のものだ。あの日と同じ。アキラを薙ぎ払った姿が見えない存在。判別の付かない怒鳴り声と共に廊下の奥からドスドスと乱暴な足音が聞こえて、ああ、この世界では肉体があるんだ……と目の前の緊急事態には似合わ

ない発見に一瞬思考を奪われたものの、慌てて首を振ってもう一度状況を確かめる。

「ニコラ、『パパ』は今部屋にいなかったんじゃ……」

「そうだよ……そうだったはず。カメラの映像にはいなかった！」

「お前らが見ていたのは、俺がいない昨日の映像さ。こんな簡単なトリックも使えないと思ったのか？」

やっぱり、罠だった。ここに「パパ」がいるのはまずい。警察に通報されればもう逃げられないし、私たちに彼に抵抗できるほどの力もなかった。とにかく、直接対峙することはないように計画していたはずなのに。

ニコラは小声で「ここはいったん退こう」と一歩後ろに下がった。確かに、私たちだけではどうしようもない。無茶な特攻で捕まってしまう、アキラを助ける機会は二度となくなってしまう。今逃げておかなければ、彼女はまた、現実世界とメタ世界の境界で「パパ」に閉じ込められて長い時間を過ごすのだ。

仕方ない……と、アキラに差し伸べようとしていた手を退いて逃げだそうとした、その時。

「……お、おい！　なんだ！　離せ、イヴ！」

声が後ろへ遠ざかり、不規則に壁や床にごつごつと何かがぶつかる音が響く。「パパ」と、もう一人誰か——イヴ、そうだ、イヴと呼ばれていた。「パパ」と「イヴ」の二人がもみ合いになって、暗闇の中で攻防を続けている。大きな家具に身体がぶつかったのか、あるいは椅子でも振り回して応戦しているのか、素手で殴り合うには低く鈍い音が繰り返し聞こえてくる。

そして、やがて二人は倒れ込んでテレディスプレイにぶつかったらしく、ガチャンとガラスが割れる大きな音が響いた。

「何が起きたの？」

「分かんない。カメラは古い映像だし。でも……これはマズいかも」

それから一瞬の沈黙が流れた後、部屋の奥から急に青白い光が漏れ出てくる。初めはまるで強い光を放つスライムのような液体が染み出て空間を照らしていたけれど、今度はそこからレーザーのような鋭い光を不規則に飛ばしながらどんどん床を覆っていく。このまま人や獣

の姿に形を変えて立ち上がるのではないかと思えるほどに、奇妙で神秘的な光景だった。

自分の部屋でニコラと取っ組み合いのケンカなんてしたことがなかったし、窓に物をおつけたことさえ一度もない。そもそも、ちよつとした衝撃で割れるような素材ではなかったはずだ。あの分厚い保護ガラスの向こうには、こんな珍しい新素材が詰まっていたなんて。

ニコラもさぞテレビディスプレイの液晶材料の素性が気になっていだろう……と思ひながら彼女を見やると、青い光に照らされた顔がみるみる強ばっていくのが分かった。

「すごくきれい……これが、外の光なの……？」

「……やっぱり、マズい！ ライラ、急いで離れて！」

アキラちゃんも！」

そう叫んだニコラは私たちの答えを待たずに、廊下を走って最寄りの階段を駆け落ちるように降りていく。走っている間も「早く！」「急いで！」と叫んでいるあたり、よほどの緊急事態なのが分かる。私はアキラの顔を見て頷くと、彼女は「分かったわ！」と言って私の手を

握った。

廊下が青白くて冷たい光に包まれていくのを背中で感じる。このスライムの正体は分からないけど、どうやら安全な物質ではないらしい。アキラがこの光に触れないように、手の中で脈打つ熱を奪われないように、私は一心不乱にアキラの手を引いて前に進んだ。

ニコラに遅れて十秒ほど。エントランスを飛び出した私たちの後ろを指差すニコラに合わせて振り向くと、住宅全体がアキラの部屋で見た青白いスライムに包まれている。空間を切り裂くような鋭い光はだんだん強くなり、ついに視認できないほどの光量になったかと思うと、ドカンッと大きな音を立てて弾け飛んだ。

「ラ、ライラ……私のおうち、どこへいったの？」

アキラはどうか不安を抑えようと、胸に抱えた大事なクッションを強く抱きしめていた。走っている間もどうか手放さずに済んだらしい。まるで火事から逃げたような状況だけど、目の前にはもはや残骸の欠片さえ残っていないかった。

「分からないわ。でも、私たちは何も……ね、ねえ、ニ

コラ。何がどうなってるの？」

「最悪。あのゴースト、全部引っかけ回して消滅しちゃった」

そうして円環集合住宅は、「パパ」もろとも跡形もなく姿を消した。

＊

私たちは、激しい音と光のせいで衆目を集めつつあった事故現場からとにかく離れるために、できるだけ目立たない山道ルートで車を進めた。途中で何台か峠越える車とすれ違ったけど、助手席で対向車に集中する私でさえ、もうどんな車種が走っていたかほとんど思い出せない。きつと向こうもそうだろうと祈る。

ニコラの計画によれば、「パパ」に見つかってしまったときのプランB、そして住宅が爆発に巻き込まれたときのプランCの準備があり、今は運悪くプランCを元に逃走ルートを確認しているらしい。爆発、というのは正体不明のスライムが建物を飲み込んで弾け飛んだあの現象を指しているのだろう。

すると、ニコラは既にこの爆発について計画に組み込むレベルで把握していたということになる。しかし、いくら用意周到なニコラでも、これほどの威力を持つ爆弾を個人で用意できるとは思えない。それに、大量の光と音を放って建物を丸ごと消し去るなんて、隠密に進める作戦のバックアップとしては大ざっぱすぎるだろう。

もちろん、それは「パパ」自身にも同じことが言える。こんな大がかりな装置は準備できないだろうし、自身を犠牲にしてまで反撃する意味もない。つまり、これは誰の制御下にもなかった不運な事故だったというわけか。

やっこの思いで連れ出したアキラは、その小さな身体を後部座席の荷物の隙間に収めて静かに寝息を立てている。今警察に見つかったらどうやっても言い逃れできないだろう。出発直後は珍しそうに外を眺めて、たまに出てくるコンビニやファミレスの光を愛おしそうに見つめていたけど、暗い山道に入ってから退屈したのかいつの間にか眠っていた。

「まだ検問は張られてないみたい。報道の火消しを優先してるっばいね」

周囲の状況を確認しながら慎重に進むニコラ。どんなピンチでも落ち着き払って作戦を進める彼女の冷静さには、ここまでずっと助けられてきた。しかし、私たちにも馴染みのある円環集合住宅^{アニュラス}があんなに簡単に吹き飛ぶのを見て全く動揺しないのは、本当に彼女がただ冷静だったおかげなのだろうか？

「ちよっと、ニコラ」

「どうしたの？ 帰り道のナビはもう送ってあるよ」

「そうじゃなくて。あの爆発、いったいなんだったの？」

アキラを起こさないように小声でニコラを問い詰める。彼女は「えーとね……」と、煮え切らない様子でしばらく考え込んでいたけど、道路沿いに現れた展望台を兼ねた無料駐車場を見つけると、迷わず車を停めてエンジンを切った。そして、とうとうこちらに視線を向けて重い口を開く。

「……ライラ、円環集合住宅^{アニュラス}の家賃が安い理由、覚えてる？」

「急にどうしたのよ。壁が曲がってて、窓がない特殊な部屋だからじゃないの？」

「ライラ。壁や窓がちよっと変わっただけで、こんなに安くはならないでしょ」

私の言葉を聞いたニコラは、ここぞとばかりに大きなため息をつく。間取りが家賃には関係ない、ですって？

あの物件の紹介を受けたときは、特殊な間取りで人気がないから値引きしているんです、と確かに言っていたはずだ。その説明はニコラも聞いていたはずなのに。

「どういう意味よ？」

「円環集合住宅^{アニュラス}には根本的な欠陥があるの。知ってて選んだんじゃないの？」

「欠陥って？ 私、何も聞いてないわ」

「物件屋は嘘つきだからねえ。ライラも自分でちゃんと調べなきゃ」

それから、彼女は淡々と円環集合住宅^{アニュラス}の欠陥について話し始めた。

私たちが中庭と呼んでいた場所は、もともと地下に謎の超高エネルギー物質が滞留する特殊なエリアだったらしい。この物質は光を放つスライムのような姿で、放っておくとあらゆる物体を包んで爆発させてしまう危険性

があった。宅地開発を進める開発業者が運悪くその鉱脈を掘り当ててしまったことで、^ア環境集合住宅^ニ建築計画が立ち上がったという。

このエネルギー物質は、物体を完全に包まない限りは決して爆発しない性質があった。つまり、内壁がなめらかで十分に頑丈なタンクに閉じ込めておけば、投入する小球核の量で出力を制御しつつ、ほぼ無限にエネルギーを取り出せるらしい。

「金属のシールドに包んで、その外側にテレウインドウを貼り付けたら、エネルギー湧き放題で安心安全なタンクのできあがり。爆発と隣り合わせだから家賃は安いし、電気だって自給自足。まさに夢のクリーンハウスって感じ」

要するに、地価の高い住宅街のど真ん中を活用しないのは割に合わないから、住居と防火壁を兼ねた緩衝地帯を作って少しでも収入を得ようとしたわけだ。なんて悪魔のような発想だろう。そんな部屋に説明もなく私を……そして、アキラのような少女を住まわせるなんて。

もちろん、爆発と隣り合わせと言っても、これまで^ア環境集合住宅^ニの居住者を巻き込んだ大きな事故に繋がったことはなかった。テレウインドウは分厚い強化ガラスで覆われているし、弁償のリスクを負ってまで高価な大型ディスプレイを壊そうとする人もいない。そういう心理的效果でタンクから危険を遠ざけてきたのだろう。

「でも、テレウインドウを破って、シールドにほんの少しだけ傷を付ければ簡単にその夢は崩れちゃう」

テレウインドウを突き抜けるような衝撃を起こせば、圧力の均衡が崩れて飛び出したスライムがあらゆる物体を包んで大爆発してしまう。先ほど私たちが目の当たりにしたのは、防火壁——アキラの住居でもあった——がその役割を果たした瞬間というわけだ。

「ねえ、ライラ。と……ニコラ、さん」

と、ニコラの声で目を覚ましてしまったのか、アキラが眠そうな声で私たちの名前を呼んだ。車はまだ駐車場から動いていない。もう少しで山を越えて、隣町の中心地に差し掛かろうとしていた。もしかしたら、目の前でもわずかに光を放つ市街地の夜景に反応したのかもしれ

ない。明日からはこんな時間に起こさないようにしない
いと。

「どうしたの、アキラ？　ごめんね、うるさかった？」

「違うの。ライラは……ずっとこんな暗い場所に住んで
るの？　パパが、外はずっと真っ暗で怖い場所だつて
言ってたわ」

思わずニコラと顔を見合わせる。アキラはこれまで外
に出たことはおろか、太陽の光を見たこともないらし
い。彼女は这个世界に来る朝さえ知らずに、ずっとあの
小さな部屋に閉じ込められて生きてきたというのか。

頭によぎったのは、やはりずっと単なるゲームの設定
だと思っていた神官の依頼のことだ。アキラを救って外
に連れ出してほしい。光を見せてほしい。これはワール
ドにいたあの姫ではなく、小さな身体で大きな負担を受
け続けてきたアキラ自身のための言葉だったのだ。

「……ちゃんとこの世界にも朝が来るわ。本物の光を見
せてあげるから、待っててね」

「そうなのね！　うれしい……でも、それなら、イヴに
も見せてあげたかったわ」

「イヴって、アキラの家にいたお手伝いさん？」

「そうよ。とっても優秀なロボットだったの。さっきも
パパが乱暴しないように、押さえていたのよ」

イヴが、ロボット？　てつきり、「パパ」が雇った人間
のメイドか何かだと思っていた。しかし、イヴが自律し
て動くロボットだとしたら、大の男を制圧するほどの力
があるのも納得がいく。おそらく「パパ」の隙を突いて
アキラが外に抜け出さないよう昼夜問わず監視して、異
常を知らせるよう設定されていたのだろう。

しかし、なぜか誤動作を起こして「パパ」を拘束、バ
ランスを崩してテレウィンドウを……いや、あれは誤動
作なんかじゃない！　彼女は私と同じ気持ちだったん
だ。ずっと心を痛めていたに違いない。あの日、虐待を
受けるアキラを見て自分に任された仕事に疑問を持った
神官^{イヴ}が、彼女に「本物の光を見せてあげたい」と願って
自分の身体を私に預けてくれたんだ。

「ねえ、アキラちゃん。イヴなんだけど、AIのデータ
ならたぶんクラウドに——」

「でも、私、イヴがいなくなっても寂しくないわ。だっ

て、ライラが来てくれたんだもの！」

アキラが後部座席から身を乗り出して、ニコラを遮る大きな声で私たちの間に飛び込んだ。彼女はこちらをじっと見つめてから、ぐいと私の手を取る。アキラの手は小さくて、あたたかくて、すべすべだ。幼さを隠せない小さくて頼りない手なのに、今なら私をどこまでも引っ張っていつてくれそうな気がした。

「ライラってね、おててが柔らかくって、ひんやりしてるのよ。声もかわいくってすてき！」

「……ライラ、すごく愛されてるみたいだね。ルームシェアは今日でお願いします？」

「冗談やめてよ。私、あなたとの暮らしを結構気に入っているんだから」

「私も、ライラと過ごす時間がすごく楽しいよ。アキラちゃんも、きつとすぐ馴染むね」

それから、ニコラはそろそろ出発の時間だね、と言ってこの先の移動ルートを設定し始めた。初めての朝が待ち遠しいアキラは、朝日まで起きていられるだろうか。

彼女の小さな身体をやさしく包む太陽の光に、その熱

に、きつと彼女はびっくりするだろう。

車が走り出す。綺麗な星々を散りばめた夜空が、ずっと向こうの山際から瑠璃色に染まっていく。夜明けはもうすぐだった。

湯浴み

蚯蚓の紐

二〇二二年一〇月一五日（土）

「このたび蒲田すっぱん 鼈かめの湯は給湯設備の老朽化に伴い一〇月三〇日（日）をもって閉店とさせていただきます。利用者の皆様、長らくのご愛顧ありがとうございました。」
 薪浦桐子（マキウラキリコ）は先ほどから、この閉店のお知らせの貼り付け位置に大分苦労しているようだ。作業としてはガラス窓の内から外へ向けてペラ紙一枚を貼り付けるだけなのだが、この位置だと目立たないかもしれない、いやこの高さだと背の曲がった高ヘンリー・グー齢者の皆様の視界に入らないかもしれないなどと試行錯誤を繰り返して、ついに最適な位置を見つけ出したらしい。

「これでよし……と」

十月もぼちぼち冬に片足を踏み込み始めた季節だが、今日に限っては妙に日差しもぎらついて気温もすこぶる高い。桐子はポニーテールの結び目をぐいと引っ張り上げることで、汗ばんだ首元の風通しをよくした。ついでに、お行儀はよろしくないが、と心の中で言い訳をした上で、エプロン風の前掛けをたくし上げて、額と首元の

汗をゴシゴシと拭く。

「こりや、さすがにひとつ風呂浴びたくなるよなあ……」

しかし銭湯労働従事者にとって風呂は商売道具であり、それを享受するのは店じまいまでのお預けとなる。

これから開店の十四時から閉店の二十時まで、桐子にとってはしばらくは辛抱の時間が続くだろう。それから桐子は思い出したかのように自分のスマートフォンを取り出し、閉店告知の張り紙を正面から撮影した。これを鼈の湯公式のインスタへとアップロードし、宣伝活動に勤しむためだ。

《重要なお知らせ》鼈の湯の閉店日が決定しました……！ 皆様今までご愛顧いただきありがとうございます！ よければ閉店前に一度お越しください！

※蒲田 ※平成レトロ ※レトロ銭湯 ※閉店 ※まだ間に合う》

と、桐子はテキストボックスに入力したところで、いや、「閉店前に一度お越しください」は流石に下心丸出しだと思われないか、まで多分に思慮したらしく、最後の一文を消してから投稿した。

しばらくすると、リプライから閉店を惜しむ反応が届けられる。「えーうそ、閉店しちゃうのー？」は同級生の身内のコメントで、「こうしてまた銭湯が一つ失われていく。果たして日本の未来に何を残せるのか憂いてしまうな……」は勝手に憂いを抱くおじさんのコメントで、「でも支援金とかの制度もあったわけですね。経営努力で存続できなかったんですか？」は設備の老朽化という日本語が読めなかったおじさんのコメントだろう。それにしても内容が内容なだけに、いつもの投稿よりも反応は多いようだ。ひよっとすると閉店前にバズって一花咲かせるかも……などと皮算用を張り巡らせつつ、そういえば以前はどんな投稿がバズっただろうかと思ひ立ち、桐子は過去のインスタ投稿をいいね数が高い順に並べた。

「ん、なにこれ」

桐子が画面を一枚一枚スワイプしていくと、先週投稿されているものの、まるで身に覚えのない画像が読み込まれた。白黒写真をスマートフォンで撮影したブレブレの写真は素人感丸出しで、明らかに桐子の仕事ではな

い。写真はかつての鼈の湯かと思わしき洗い場で撮影されたらしく、サウナの前で母親らしき人物とその息子らしき青年がやや緊張した面持ちで起立している。

《押入れをせいりしていたら見つけた、さうなかんせいじの写真です。一九六四年の東京おりんぴつくちよくご、第一次さうなブームにあわせてつくられました。このさうなはもうないです（たてかえたので）。そしてこのせいねんが今の私です》

この変換に失敗し平仮名だらけで小学生の作文のような説明文は、間違いなく祖父の投稿だと桐子は確信した。桐子は以前祖父にスマートフォンの利用方法を通り説明し、ついでにインスタの投稿方法もレクチャーしたのだが、あの時に鼈の湯公式アカウントと紐付けてしまったのだろう。コメント欄には「貴重な写真ですね」

「昔のサウナも入りたかった」 「文体が赤ちゃんみたいでかわいと思う」 など好意的な意見が並んでいる。鼈の湯の日替わり湯情報や本日込み具合など、今までの真面目な情報を発信する投稿が馬鹿らしく思えてくるな……と桐子は肩を落とした。

それにしても、あの祖父が青年期だとも凛々しかったのか、と桐子は驚きを隠せずにいた。その隣の女性が祖父の母親だとすると、桐子が生まる以前に亡くなった桐子の大祖母にあたる人物だろう。桐子は以前、祖父からその名前を聞いたような、そうでないような気がする。

「あらまあ！」

考え込んでいたところ背後からいきなり声をかけられ、桐子は慌ててスマートフォンをしまった。

「とうとう今月末までになったのねえ。残念だわあ……」

「こんにちは、近江のばーちゃん」

彼女はよく一番風呂に来る常連のご婦人だ。先日生まれた初孫の写真を嬉しそうに見せてくれたのが記憶に新しい。

「まあ、その張り紙、桐子ちゃんが書いたの？」

「まさかあ。こんな達筆な字書けませんよ。爺ちゃんです」

「あらそうなの。それにしても今月までなのね……せめ

て年末までと思ってただけだねえ……」

「ですが、壊れかけのボイラーを交換する資金力もないし、爺ちゃんはやいましてしばらくお休みだし、毎月ガス代は高くなる一方で、しょーじきこれ以上の存続は厳しいです」

「ああ違うのよお、桐子ちゃんは何にも悪くなくてねえ、子どもの頃から通ってた銭湯が畳むのはちょっと堪えるわあ、ってだけなの」

「なるほど。それはそうですね」

「ごめんなさいねえ、しみりさせちゃって。もう入れるかしら？」

「えーっと、十四時の五分前ですが……多めに見ておきましょう。はい、大丈夫です」

「それじゃあ一番風呂を頂くわねえ、サウナ込で六百八十円？」

「残念、大田区銭湯の料金改定で七百円⁽⁵⁾になりまーす」

「あらー、だいぶお高くなったのねえ……」

「んもーそれこのまえ来た時も言ってたじゃないですか」

桐子はその場でお会計を受け取りご婦人を更衣室まで見送ると、足早に下駄箱へとスリッポンを収納し、木板の鍵を抜き取り、番台の座椅子にすんと着席する。さあて、開店の時間だ。桐子はレジの小銭の残量と、高く積み上げられたタオルを確認した。なお一般的に読者の皆様がいメージされる銭湯の設計と例えば、男湯が正面向かって右、女湯が正面向かって左、両者の中間で入り口すぐの位置に番台が位置する構図かもしれない。だがいくら番頭さんとはいえ異性に裸を見られるのは嫌だ、などの利用者の声に配慮し、鼈の湯では十年前のリニューアル時に更衣室の外側へ番台を移動している。そのため年頃の娘である桐子の視界には、男連中の裸体が決して映らないという説明を事前に配慮として付記しておく。

「あれっ、ココ店畳んじやうの!？」

「どーもトメさん。ぼちぼち潮時かと思ひまして」

「そういう親父さん最近見てないけどどうしたの？」

「だからヨシさん、爺ちゃんは今先々月から腰いましてお休み中ですってばー」

「キリコちゃんも大変よねえ、今年でいくつになったの？」

「はい、おかげさまでピチピチの十二歳です」

「ほんと大人びてるのに若くていいわねえ、アタシがキリコちゃんぐらいの歳の頃は……」

「思い出話はいいですから、ウメさんはいきいき高齢者入浴証見せてくださいねー」

「すみません、スタンプを……」

「あー銭湯スタンプラリーの方ですね。今押しますんで」

開店直後は特にやり取りにひと手間かかる爺婆連中の割合が高めなので、桐子をはてんてこ舞いの忙しさに苦勞させられる。ピークの時間帯を過ぎてから、桐子は風呂場手伝いの源さんをお願いし、一旦番台の席から離れると、休憩室の端っこで電話をかけた。

＊

(5) 大田区の銭湯は一律五百円。鼈の湯ではサウナ利用料として二百円を徴収している。

「もしもし、爺ちゃん？ なにあのインスタ投稿」

《インスタ……？ あーあれかア。昔の写真押し入れからひっぱり出して貼っつけてみたんだ。いい宣伝になったろ？》

「なるほど、それでは果たして宣伝効果は表れたのでしょうか。ここで先月分の決済をお聞きください」

「どんなもんよ」

「先月はトータルで……残念、二千三十一円の赤字！

燃料代の高騰から今月はさらに苦しい収益となる見込みですねー」

《……ハア、まあやっぱりそうだろうなア》

薪浦修（マキウラオサム）はハアと溜め息をこぼした。三ヶ月ほど前に修が腰の容態を悪化させてから入院して以来、桐子は月の半ばごろになると、先月の売上を祖父の修に電話で報告している。前に病室で電話していたらナースさんに怒られたので、今日は病院の待合室からこっそり電話をかけているらしい。

《張り紙は？》

「もう貼ってきた。これで閉店日は今月末の三十日で決

定ね。そういえば町内会長さんが閉店日に近所の公園でちよつとした閉店セレモニーをしてくれるってさ」

《……ふん、そうかい。どうせ商店街の同期でいち早く店を畳んじまった俺の銭湯を肴に、真っ昼間から呑みただけなんだろうよ。ハア余計なご苦労なこつた》

「んもー。爺ちゃんもぶーたれないでよー。毎月毎月赤字出し続ける銭湯が経営続けられるわけないなんて、小学生でも分かるじゃん」

《へっ、ひとたび俺の腰さえ治っちまえば、人件費不要の労働者を使って赤字経営だろうがなんだろうが……》

「その腰が治らないから、こうやってアタシが代理を努めてるんじゃないか？」

《おう……まあ、ハイ、そう……ですな……》

「そもそも、こういうのって普通立場が逆じゃない？

孫娘が現実を直視して諦めてるのに、爺ちゃんの方がまだ赤字経営続けたがってるなんて」

《ハア……そりゃキリちゃんの気持ちは分かるんだけどよオ、俺の人生は今まで銭湯一筋だったからよオ、俺の代で店エ畳むことになるってエのがどうしてもふがい

なくてよォ、天国の親父お袋にも申し訳が立たなくてよォ」

「爺ちゃんヨォヨォ言い訳が女々しいよ。えっと、たしか一九四〇年開業だから……八十二年？ 充分に続いた方だと思うけど」

「お、キリちゃんはそう思ってくれるか？」

「ま、父さんと母さんが引き継いでくれば、もうちょい長持ちしたけどね」

「ハァ、あの道楽息子め。まーた海外をほっついてんのかい」

「今朝からメキシコだってさ。まあ番頭みたいな一箇所に残まる仕事、あの二人に似合うとは到底思わないけどね」

「なあキリちゃんさ、俺はどこで息子の教育方針ってやつを間違えちゃったのかな……」

「そんなこと孫に聞かないでよ。ま、銭湯としては閉店するけど、鼈の湯自慢の『黒湯』は後続のスーパー銭湯にも引き継がれるわけだし、そんなに凹まないでよ。あれそこは結構サウナで有名なチェーン系列店だから、それ

こそお客さんでいっぱいになるんじゃない？」

「へっ、スーパー銭湯だかデパート銭湯だか知らねえが、ウチよりいい銭湯に仕上がるもんかい」

「爺ちゃんも退院したら一回スーパー銭湯に行ってみなよ。設備の豪華さにぶったまげるから。あれじゃウチは逆立ちしても勝てないって」

「ヘーそんなに凄いいもんかね」

「最近すごいんだよ。『縄文の湯』、『ヨコヤマ・ユランド鶴見』に『綱島温泉湯けむりの丘』と、特に鶴見のあたりはスーパー銭湯激戦区だね」

「桐子は詳しいなア」

「アタシ、スーパー銭湯大好きっ子ですから」

実のところ桐子は鼈の湯について、さっさとリニューアルするか新しいスーパー銭湯として生まれ直したいと前々から思っていたが、流石に修が悲しむため今まで直接的な言及は避けてきた。実は内心嬉しいのである。

「それじゃ、ぼちぼちセンスから声がかかりそうなんだから切るワ。キリちゃんも怪我しないよう気をつけてな」

「へいへい」

《あと……あれだ、錢湯に一人でいるときは神隠しに
は気をつけるんだぞ。昔おっかあが風呂に入ってたら
突然……》

「はいはい、神隠しにあうって話でしょ。それで二週間
姿を消してその間の記憶がなくなるんですよ。耳がタコ
になるほど聞かされてますから大丈夫だって。そもそも
神隠しなんて気をつけようがないじゃん」

《そ、それもそうだけだよオ……》

「とにかく！ 今アタシが神隠しにでもあったら、残
り少ない営業日数がさらに縮むことになるんだから、
爺ちゃんはやいところ腰を治して復帰してきて。分
かった？」

《お、おう……》

修はもうじき米寿に近い年頃だったが、未だに孫娘の
桐子には頭が上がらないのであった。

＊

桐子が通話を切る頃には、既に時計の短針が十七時を

回っていた。窓ガラスの隙間から差し込む光にも黒が滲
み始め、思いつきり息を吸うと室内でも鼻の奥が少しツ
ンとするような、早くも昼間の暖かさが恋しくなるよう
な冷え込みをしている。閉店する前に押入れの奥からス
トープを引っぱり出すか、お客様には若干の寒さを我慢
していただくか、実に悩ましい季節となってきた。桐子
は源さんと交代して番台に座り、休憩室にあるテレビの
チャンネルを無難なドラマに切り替えた。基本的には来
客があるまで暇だが、合間を縫って塾の宿題を消化する
という桐子にとっては大事な時間だ。中学受験までの残
り日数はそう多くない。

短縮営業のため二十時閉店まではあと三時間弱。鼈の
湯の完全閉店までは残り二週間と期日が迫っていた。正
直なところ、桐子は現時点の自分が肩透かしにすら近い
感情を抱いている、という事実に関心少し驚いていた。
閉店に際して、もっとこう「さびしい」だとか、「かなし
い」だとか、「よかった」だとか。そういった感情が道
徳の教科書的なエピソードのように思い出となって心の
奥から込み上げてくるのだらうと、ずっとそう思ってい

た。だが現状ではそんなによかった思い出がフラッシュバックすることもなく、強いて言うならば、毎日の家のお手伝いで結構稼いでいたお小遣いが減ってしまう程度の、利己的な心配しか桐子の脳裏には浮かんでこないのだ。

私には慈悲の心が欠けているのだろうか、と桐子は時折不安になる。桐子は昔から年上の人間と接する機会が多く、それ故におそらく周囲の同世代の子たちと比べて自分が聡いのだろうと薄々感じてはいた。しかしそれは子どもらしく愛嬌のあるような感情表現が乏しいからこそ、一見大人ぶって見えているだけなのかもしれない、という一歩引いた目線からも自分を客観視していた。彼女が閉店を惜しむお客さんを思いやるよりも先に閉店理由を述べてしまうのも、自身の祖父以上に大人びて諦めを許容できてしまうのも、自身の感情の乏しさと他人への共感力の低さが生み出す無自覚の産物だと薄々感づいてはいた。

《いやっ！ 私、別れたくない……お願いだから捨てないで……！》

テレビからは安直なサスペンスドラマの陳腐なワンシーンが流れている。演技とはいえこういった感情すら桐子にとっては羨ましくもあった。いつか訪れるであろう親しき人の死や別れの場面で、薄情者と思われず、偽善者と思われず、周囲からもちゃんと同情してもらえよう、自分は正しく涙を浮かべられるのだろうか、と考えると不安でしかない。桐子は十二歳という若さにして、誰にも相談した経験のない、ややピントのずれた、しかし真剣な悩み事を抱えていた。

「ん？」

テレビ画面を眺めていると、ふと視線の先で漂う奇妙な浮遊体に彼女は気がついた。シャボン玉だ。いや、シャボン玉そのものが特に奇妙というわけではない。ただ風呂場で発生した石鹸かシャンプーのシャボン玉が更衣室を抜け、暖簾をくぐり、ここまでやってきたのだとすれば、それは偶然で片付けるにはもったいないほどに珍しい現象だろう。シャボン玉は鮮やかな七色の色彩をその表面上に浮かべながら周囲をふよふよと漂っていたが、しばらくすると桐子の顔面めがけて吸い付くように

近づき始めた。

「ちよっ……」

桐子は思わず上体をやや後方へのけぞるが、シャボン玉はそのまま動きを止めず、とうとう彼女の目の前で突然パチン、と弾けた。桐子が目を閉じると、一瞬だけ脳が揺さぶられ、同時に世界が震える。まるでちぎれる直前まで両手で引っ張った平ゴムをいきなり手離したように、パチンと、大きな音がした。桐子はたまらず番台の椅子から転げ落ちていた。

「え、何今の……地震……？ それとも貧血……？」

桐子は慌てて冷蔵ショーケースからペットボトル水を取り出すと、中身を半分ほど一気に飲み干した。彼女の脳裏には、今の現象はなんだったのか、あのシャボン玉と関連するのか、などと様々な考察がぼんやり浮かぶ。カチ、カチ、と古時計の針の音だけがやけに大きく聞こえた。

それから五、六分もすると、桐子はだいぶ落ち着きを取り戻したようだ。ペットボトルの水で再度口を潤し、一度深呼吸をする。さて、それでは改めて勉強に向かおうとする。

うとする。

「き、キリコちゃん大変！」

女性脱衣所の暖簾の隙間から金切り声が多分に漏れ出した。

「どうしましたか？」

「ひ、人！ 女の子が洗い場で倒れてる！」

「わかりました！」

緊急事態発生だ。桐子は頬をべしりと叩いて気持ちを切り替えると、番台を抜け出し、女湯の洗い場へと飛び込む。鼈の湯において、お客様の湯あたりや転倒などのトラブルは日常茶飯事だったため、桐子はこういった事態の対処によく慣れていた。

周囲を見回し、誰が救護対象か桐子にはすぐ分かった。洗い場には桐子と同年代の少女があられもない姿で大の字に倒れており、周りの二、三人の客が心配そうに声をかけている。

「大丈夫ですかー、声は聞こえますかー？」

桐子はまず彼女の口元に耳を近づけ、呼吸音を確認した。

「呼吸よし。聞こえたら頷いてくださいー」

頷いたので意識もある。ということとは心停止ではなく、湯あたりか脱水症状によるめまいだろうか。

「は、箱……」

少女は口を開いた。

「箱？」

「あの大きくて珍妙な木箱が物珍しいもので、しばらく中で座していたのですが……」

「うん」

おそらくサウナを指しているのだろう。

「次第に身体が焼けるように火照ってしまい、慌てて外に出たのですが、頭がぼうつとしてしましまして……」

「なるほど、ただのサウナあたりですねー。はい、皆さんかいさーん」

周囲の客は大事じゃなくてよかったねえ、と口々に言いながら各々の洗い場へ戻っていく。

その後桐子とカズコおぼちゃんの二人がかりで担ぎながら、うら若きおなごの裸体を脱衣場までえっちらおっちら運び、全身を手ぬぐいで拭き、全裸もあんまりだか

ら在庫の東京都浴場組合公式の浴衣を着せてやり、そのまま休憩室のソファで横にしてやった。

「はい、牛乳。サービス」

起き上がった少女に、桐子はビン牛乳を一本差し出した。

「……ぎゅ、牛乳？ よろしいのですか？ 昨今だとかなにか手に入らない貴重品では……」

「貴重品……？ ああ、紙キャップビン牛乳のことね。確かに最近だと珍しいかも。でもまだうちには在庫あるから気にしないでいいよー」

「まあ、売り切れ前に在庫を確保しておいたのですね。

それでは貴女様、農家の皆様方、そして天皇陛下に感謝して頂きます」

「おっ、いただきますをちゃんとと言える女子だ。偉いねー」

上体を起こしてコクコクと牛乳を飲む彼女を眺めながら、少し古臭い顔立ちと雰囲気はあるけども綺麗な人だな、という感想が桐子の中で浮かんた。髪型はボブのようだが後ろを刈り上げているのはやや珍しい。ぷっくら

としたオデコと頬、つんと高い鼻、そして今どきあまり見かけない太めの眉が特徴的で視線を引きつける。すっぴんの仕上がりでこれなのだから、化粧をすれば相当映えるのだろう。実はインスタグラマーとか、美容系 YouTuber とか、その類の関係者なのかもしれない。桐子は訝しんだ。

「ごちそう様でした……どうか致しましたか？ 私の顔に何かついておりますの？」

「ああ、いや、ええっと、救急車は呼ばなくてもいいのかなーって」

「きゅうきゅう……？ ああ、救急自動車のことですか。不要です。お気遣いだけ頂きますわ」

「病院には行っておく？」

「病院……いえ、その必要はございません。おかげさまですっかり回復いたしましたので」

「うん、じゃあ体調には十分気をつけて帰ってねー」

「はい、お世話になりました。あの、つかぬことをお伺い致しますが……」

「はい、なんでしょ」

「この場所はなんという銭湯でしょうか？」

「鼈の湯だけど」

「なるほど。ほほ、ほほほ……」

謎の女は急に怪しげな高笑いを始め、思わず桐子もぎよっとする。

「でしたら何か勘違いされているかもしれませんが、ここが私の帰る家ですよ、お手伝いさん」

「お、お手伝いさん？ そりゃ今は爺ちゃんの手伝い要員だけど……」

「覚えておきなさい、私の名前はヨーコ。今日からこの鼈の湯の番頭を務める女よ」

「ば、番頭はアタシだってば……」

「ふっ、御冗談を。貴女、御年はおいくつ？」

「十二歳」

「ふっ、まだ丁稚奉公に毛の生えた程度の年齢じゃございませんの。私は十六歳だから年上ね。これからはヨーコさんとお呼びなさい」

「え、もう十六歳？」

「ええ、そう……ええ、まだ十二歳？」

桐子は背丈も顔立ちも大して自分と大差の無い目の前の少女が四つも年上である事実に驚き、ヨーコはこの發育の進んだ何なら自分より年上と言われても違和感のない目の前の少女が四つも年下であるという事実に愕然としていた。

「ご、ごほん。兎に角にも、貴女が何処の馬の骨かは私の存ずるところではございませんが、私は父上から一番風呂を賜った瞬間から番頭を任せられた身でございます」

「あー、なるほど。お父さんの紹介で来たのね」

父の名前が出てくると話は早い。桐子の両親は海外を転々とする仕事に就いているため、よく現地で金欠の日本人バックパッカーと意気投合し、日本に戻った際はぜひ私達の実家に寄るといい、無料でウチの銭湯に入れと言つて鼈の湯を推奨する悪い癖があった。そういう客はあんまりにもよく来るので、最近では「父もしくは母の紹介で」とのたまう小汚い客が現れたら、桐子はもはや両親に確認するでもなくハイハイいつものねという理解で入浴させてやっていた。別に小汚いわけではないが、

彼女もきつとその類なのだろう。ただ番頭を自称するほど図々しい人間は初めて見たが。

「何であろうと開店から閉店するその日まで、終始ここに骨を埋めるつもりですわ!」

「あ、そうなの。それならあと二週間ちょっとか」

「に、二週間?」

「あれ、番頭代理なのにまだ聞いてないの? この銭湯、あと二週間で閉店だよ」

「へい、てん……?」

謎の女はしばらく首をかしげていたが、桐子が入り口まで案内して張り紙を見せてやると、頭をうなだれながらも納得したらしい。

「そんな、これからだったのに……私が少しかり氣を失っている間にもう閉店だなんて……」

「ちよつとかわいそう」

「そ、そうだ! 父上と母上は? 父上と母上なら私が番頭だと認めてくださるはずですわ」

「両親? 出張で今メキシコの方だからしばらく帰ってこないけど……」

「メキシコ……墨国へ!? つい先刻までそこ居たはずですが、いつの間に……」

「出発したの先月なんだけどな……あの、こちらからもつかぬことをお聞きするけど、ヨーコさんは今晚何処に寝泊まりする予定?」

「もちろんこの家に決まっていますわ。私の家ですもの」

「入場する時お金払った?」

「私の家の風呂ですもの。必要ないに決まっておりますわ」

「そっか。ごめんね、けど無賃入浴となると……いよいよ警察の出番かな……」

「警察……まさか特高!?」

「え、特攻?」

「特高は! 特高だけではどうか、どうかご勘弁くださいませんか! 近所のアカの学生が連行されてからもうしばらく家に帰ってきていないのです、特高だけではどうかご勘弁を……」

「えーっと、事情はよくわからないけど警察は嫌な

のね……」

「……お手伝いさん、いや、お手伝い様。特高を呼ばないついでに、重ね重ねにはなりますがどうか一生のお願いがございます」

「嫌な予感しかしない……」

「きつと両親が戻ってくれば私がこの家の番頭であると証言して頂けますから、それまでどうか、どうかここに住み込みで働かせてはいただけないでしょうか。この季節、露頭に迷うのも、特高に突き出されるのもご勘弁願いたいのです」

「さっきまでえらく高飛車だったのに、急に低姿勢で懇願しはじめるじゃん……」

＊

人を泊めるとなると流石に桐子の一存では決められないので、まずは保護者から承認を得ることにした。祖父に電話して「自分は番頭だと自称する変なレトロ系女が、閉店の日まで住み込みで働きたいって言ってるんだけど受け入れてもいい?」という質問をだしぬけに聞

くと、

「キリちゃんは優しいけど、ソイツは大丈夫なヤツなのかア……？」

と訝しみながらも了承を得られた。

念のため父にも「貴方が勝手に番頭だと認めた女が来日して閉店まで住み込みで働きたいと申し上げているのですが、受け入れてもよろしいでしょうか？」とチャットで投げると、「うーん、覚えてないけどなんか認めた気がする。お金多めに振り込んでから二人で美味しいものでも食べなさい。ちなみに父さんたちは今メキシコに居てな、テキーラとメスカルの違いは……」という未成年にとって知らなくてもいい酒うんちくがべらべら始まったので、途中から未読にした。このような心配の差から、どちらが保護者としてふさわしいか桐子には一目瞭然だった。

「いいってさ。閉店まで二週間だけど、人手があるのはいつでもありがたいからね。それじゃあ今日からよろしくお願いします、ヨーコさん」

「大変有り難く感謝申し上げます。えっと……」

「アタシは桐子。桐筆筈の桐に子どもの子。今どき何子って名前もちよつと古くさいけどね」

「そんなことありませんわよ、桐子。私だってヨーコですもの。今時の名前に決まっておりますわ」

急に呼び捨てで距離を詰めてきたが、桐子は自分が年下であることを思い出してしぶしぶ受け入れる。

「じゃあまず仕事を教えていくけど、まずヨーコさんの服は……」

「たしか私のセーラー服が更衣室にございますわ」

「どのロッカーに閉まったの？ ロッカーキーは？」

「六花？」

二人で更衣室を探し回ったが、結局セーラー服は見つからなかった。ヨーコはたしか木の籠に着替えを格納したと主張しているが、そもそも木の籠なんて鼈の湯にはもう存在していないので、おそらく彼女の覚え違いだろう。

「ううっ、板の間稼ぎに根こそぎ持っていけるとは……このヨーコ、一生の不覚……」

「泥棒とはまた運が悪いねー。女学生のセーラー服だ

し、その手の特殊なマニアの犯行かなあ。どうする？

一応警察に被害届を出すことも……」

「すみません、警察はちよっと……」

「あ、はい……」

ヨーコは文字通り裸一貫以外の資産を失い、桐子の目から見ても明らかに疲れ果てていたが、とはいえ住み込みで働くためにも稼いでもらわねばならない。

「じゃあとりあえずはその浴衣を着てもらって……いや、胸元が結構大変なことになっているから後でサラシを巻いてもらうとして、とりあえず番頭の仕事を覚えてもらおうかな」

「はい、ご享受願います」

「まず入浴料が大人一人五百円で」

「はい、ごひやく……五百円!?」

「えっ、そこ驚く?」

「でっ、ですが五百円は一生とはいわずとも、家が立つほどの大金じゃございませんこと?」

「そっか……ヨーコさんのお家は相当お小遣い厳しいお家だったんだね」

「し、失敬な！ 確かに楽な暮らしはしておりませんが、流石に桁が違いますわ。そもそもお客様はそんな大金払ってくださいますの?」

「まあ実際銭湯の入浴料は年々値上がりしてるけどさ、いきいき高齢者入浴証とか、回数券とか安く入浴する手段はいろいろあるからね。あ、こんにちわ」

髪をボサボサに伸ばした中年の男性客が、頭をかきむしりながら暖簾をくぐってきた。

「大人一人、サウナ、ミニタオルレンタル、ビオレ、安いヒゲソリで」

「しめて八百七十円になりますー」

「じゃあペエペエで」

「スキャンお願いします……八、七、〇で、はい、ありがとうございます」

ヨーコは桐子の裾を軽く引っ張り、小声で訪ねた。

「……もし、桐子。間違っていたら申し訳ありませんが、今の方は無賃入浴ではなくって?」

「ん? ああ、銭湯では珍しいかもだけど、ウチはQRコード決済可能にしてるんだ」

「きゅ、旧アルコール決裁……?」

「そこから? えーっと、まず自分のスマホから専用のアプリを立ち上げて……」

「す、須磨砲……?」

「おお……ま、まだいたんだねスマホ知らない人って。あれでしょ、ガラケー世代ってやつ。ヨーコさん海外生活が長かったから、そもそも日本のガラパゴス化に気づかなかったのかなー?」

「が、柄系……?」

「まずい、ヨーコさんが無限質問ループに入ってしまった。一旦仕切り直して、とにかく中学生以上は五百円、小学生は二百円、未就学児は百円だけど大人一人につき二人まで無料、回数券は十枚綴りで四千七百円。あとこの辺の小物は値札が書いてあるから、それで計算してね」

「うーん、桁が大きすぎて何もわかりませんが、ここは大富豪が通う高級銭湯と思い込むことでひとまず承知致しましたわ!」

「うむ、元気があってよろしい」

「あの、桐子。一つ質問があるのですが」

「なんででしょうか」

「先程から来られるお客様が皆口元にマスクをつけてらっしゃるのですが、近頃は巷で流行性感冒⁽⁶⁾でも広まっておりますの?」

「マスク? そりゃ原則入場するにはマスク着用が義務だからねー」

「はあ、妙な規則ですわね」

「ここ数年じゃもう当たり前だよ。はい、マスク」

「ええ、私もつけるんですか……?」

「当たり前だよ、つけてないと怖いお客さんに怒られちゃうんだから」

「物騒ですわねえ」

＊

「桐子、これはなんですか?」

「マッサージ機。三十円入れるとそのレバーが上下に動

(6) スペイン風邪、インフルエンザのこと

く。背中をもみほぐして気持ちがいい」

「これは？」

「ドライヤー。三十円入れてスイッチをオンにするとその機器から熱風が出てくる」

「少々お花を摘んでまいりますわ」

「はいはい」

「桐子！便所が奇妙な形状をしているのですが……！」

「はいはい、洋式便所ね。え、そこ珍しいの……？」

ヨーコがよほど俗世から隔離された箱入りお嬢様なのか定かではないが、彼女はあまりにも現代日本において知らない代物が多すぎた。こんな塩梅で銭湯の設備について一通り説明していると、あつという間に二十時を過ぎ、気持ちは早いが閉店の時間を迎える。桐子は入り口の札を反転させて閉店に切り替え、いつまでも長湯に浸かっている客の尻を叩いて追い出し、下駄箱に残った下足がないかを確認した。

「今日は疲れたね……じゃ、ヨーコさんも一緒に残り湯を頂きましょうか」

「ご相伴に預かりますわ」

誰も居なくなつた更衣室に女二人が上がり込み、恥ずかしげもなく一瞬で服を脱ぎすてた。冷え込んだきたのでもう一刻も早く温まりたくてしようがないのだ。

「はいヨーコさん、これ」

桐子はサウナキーを渡した。

「これは……なんですか？ 引っかかりのある形状をした……子ども用の孫の手でございますか？」

「まあ一見すると分からないよね。後でのお楽しみ」

身体を洗って軽く浴槽に浸かった後、桐子はサウナキーを取り出した。

「ここのフック状になっているところをサウナの扉の溝に差し込むと、返しがあたつてうまく固定されるから……こうやって扉が開くってわけ」

「なるほど、よくできてますわね」

「サウナ料金を支払ったお客さんだけが、このサウナキーを使ってサウナに入れる仕組みね。さっきヨーコさんは勝手に入ってたみたいだけど、次からはちゃんとお金払ってから入ってね」

「……う、承りました」

室温八十七度、湿度二十パーセント、二段組の定員六名、遠赤外線サウナ、足組は木製で壁は石製、天井はジブトーン、おんぼろのスピーカーからは時代への逆張りを匂わせるような演歌や歌謡曲が流れてくる。

「先程うつかり入ってしまった時と思いました……この空間はちよいとばかり熱すぎませんか、桐子？」

「それを楽しむのがサウナだからねー。その砂時計に合わせて、だいたい六、七分ぐらいが目安かな。ヨーコさんも辛かったら、手ぬぐいを頭に巻くとだいぶ楽になるよ」

「なるほど。しかしこのサウナというやつは、何を楽しめばよろしいのでしょうか」

「別に？ 目を閉じてリラックスして、歌謡曲に耳をすませばいいんじゃないかな」

「はあ。しかしこの音楽も、ラジオなどと比べると音の聞こえ具合は大変よろしいですね」

「そう？ なかなかひどい音質だと思うけど」

「ただ不勉強なものでどれも聞いたことのない曲で

すが……」

「だよねー。今時サウナで歌謡曲だけってのもね。アタシ、本当はサウナでテレビ見るのが夢でさ」

「ああ、テレビジョン！ 聞いたことありますわ。なんでも東京でオリンピックが⁽⁷⁾予定されていて、競技をテレビジョンで中継するとか」

「そうそう。よかった、流石に東京オリンピックは通じるのね。二年ぐらい前、それに合わせてサウナにテレビつけてみない？ って爺ちゃんに以前提案したんだけど、サウナってのは目を閉じて熱さに集中するもんだって言われて断られたよ。じゃあ歌謡曲はいいんですかって話よ。そーゆーとこ頑固だよえ」

「どこの家庭も親御さんは厳しいですわね。ただサウナにテレビジョンとなりますと、想像もできませんが相当に費用がかかるのでは？」

「まあねー。最初から設置してるならまだしも、サウナ改修して、専用テレビ購入してってなるといくらかかる

(7) 一九四〇年に予定されていた東京オリンピックは中止された。

やら。そうこうしている間にお店は閉めることになっちゃったんだけど」

「はは……あ、そろそろ砂が切れましたわ」

「よし、じゃあついてきてね。まずは外に出て」

「外に出ます」

「手桶で水風呂の水をすくって」

「水をすくいます」

「頭からバシャーン！」

「頭から……え？　は？　冷た！　はい？　な、何をなさっているのです？」

「そんで汗を流したら、水風呂に一気に浸かる！」

「ヒイッ！　しょ、正気ですの？」

「正気も何も、サウナに入った後は必ず汗流してから水風呂に飛び込めって、爺ちゃんどころかフィンランド人も皆そう言ってるよ」

「つ、冷たくありませんの？」

「そりゃ冷たいよ。ウチはサウナ八十七度、バイブラ水風呂十七度で温度差七十度が売りだからね。でもこうして身体をキンキンに冷やして水風呂から上がって、身体

を拭いてから椅子に座ると」

「す、座ると……？」

「心臓の鼓動が大きく聞こえ始め、脳の奥がトロンと蕩けて、快樂物質がドパドパと出てくる」

「それ絶対心身にやばいやつですわよ……」

「まだ法律で禁止されていないから大丈夫だよ」

＊

「それじゃあおやすみ、ヨーコさん」

「ええ、おやすみ……あ、桐子。お願いがございます」

それは浴槽からお湯を抜き、風呂場の片付けを一通り終え、山盛りのご飯と鮭の切り身とインスタントのおみおつけで簡単に夕飯を済ませ（桐子からするとだいぶん手抜きだったものの、ヨーコにとっては相当なご馳走だったらしい）、布団を横に並べて敷き（寝具は修のものを借りシャツだけ新品に交換した）さてそろそろ寝ようかという頃合いにヨーコは切り出した。

「少し寝る前に何か歴史が分かる書物を読みたいのですが、この家に何かございますでしょうか？」

「歴史が分かる書物？ うーん……あ、社会科の歴史の教科書とかでいい？」

「教科書、結構です。読みとってください」

「はいこれ。どしたの、ヨーコさん急に小学生の勉強でもしたくなったの？」

「いえ、少々推測がありましてそれを確認したいな、と」

「ふーん、よくわかんないけど」

桐子が眠りこけている間、ヨーコは勉強机の卓上照明を頼りに歴史の教科書を読み耽った。

＊

「この書物は……なんと、こんなにも色鮮やかな印刷が可能なのですね。文字が全て左から右に記述されているのが読みづらいのですが、洋書と同様に左から右に捲ればよろしいですね。この頁は、震災大東関……？」

ああ、これは関東大震災でございますか。大正十二年に関東大震災、これは私が生まれた歳。鼈の湯の開業が昭和十五年で、翌年に太平洋戦争開戦、昭和二十年に敗戦。そうですか、我が国はこれから敗戦を経験するので

すね。このお写真はまさか、天皇陛下……！ 畏れ多くも人間宣言をされ、書物に陛下のお写真を収めても許されるとは……。それから戦争の無い平成の時代を過ぎ、今の元号は令和と言うのですか……ふむふむ」

ヨーコは本を閉じ、窓カーテンを少し開けて窓から網戸越しに月を眺めた。冷えた夜風が部屋に流れ込んで心地が良い。

「一介の銭湯屋の娘をこんなにも贅沢な時代に呼びつけて、ちゃんちゃらおかしいですね。神様仏様は一体どういった思いつきなのかしら」

二〇二三年一〇月二日（土）

それから一週間のヨーコの働きぶりは、桐子にとって大変に目を見張るものであった。

「さて、ぼちぼち開店だし掃除しないと……あれ、ヨーコさんもうやってくれたの？」

「はい。洗い場のブラシ磨きは完了、据え置きシャンプーとボディソープの残量確認完了、敷タオルセット済、中央風呂は四十二度、薬湯は四十度、サウナは温度

百度で湿度二十パーセント、水風呂の水温十七度でそれぞれキープしております。桐子、他に仕事はございませんか？」

「あ、だ、大丈夫……ヨーコさんも少し休んでいいよ。そういえばサウナの温度ちよっと上げたんだね」

「ええ、常連さんの雑談からサウナが少しぬるいと小耳に挟んだもので。私も今の温度の方が汗の出をよく感じますし、丁度よい塩梅かと」

「そっか、ヨーコさんすっかりサウナにハマってんだね……」

「そういえばサウナ関連で、最近常連さんから教えてもらってこういった技能を身に着けたんですの」

「技能？」

そう言うヨーコはレンタル用のミニタオルを取り出して、少し水で濡らし、その場で振り回し始めた。

「はっ！」

ただ振り回すだけでなく、時折脇の間にたたきつけてバチン、左方に叩きつけてバチン、腰に叩きつけてバチンと音を弾き出し、そのたびに水が弾け飛ぶ。

「……えーっと？ それとは？」

「おや、ご存知ないのですか桐子？ これはタオルヌンチャクですよ。身体のおちこち叩きつけることで血行の促進を高めると今サウナアの間で密かに話題でして」

「そうなんだ。うん、まあサウナの中で他のお客さんに迷惑かからないならいいんだけど、私達の服は絶賛びちゃびちゃになっちゃったし着替えようか……」

さらに通常業務に加えて、ヨーコは地元商店街組合員との交渉を巧みに進めることで、比較的低予算で氈の湯の改善を図っていた。

「ヨーコちゃん、売り物にならない柚子ここ置いてくから、柚子風呂にでもしてくれ」

「あらトメさん、ありがとうございます」

「ヨーコちゃん、はいこれ。頼まれてた十二分計修理しといたよ」

「まあヨシさん、感激ですわ」

「娘の通ってる水泳教室から、古くなったビート板もらってきたからねえ」

「こんなにたくさん……助かりますウメさん。これはサ

ウナマット代わりに使わせて頂きますね」

「町内会で使わなくなったプラ椅子持ってきたわあ。ちよっと汚れてるけど大丈夫かねえ?」

「あー近江さん。それは洗ってからとこの椅子にしますから大丈夫ですわよ」

「ええ……ヨーコさんが常連さんを次々と骨抜きにして鼈の湯改善のための糧にしている……」

「ちよっと、言い方に棘がありますわよ桐子」

このようにして銭湯の細やかな改善が行われた鼈の湯には、閉店間際という期間限定性も相混じり合うことで、連日入場待ちが発生するほどの人気ぶりを発揮していた。もともと平日の十四時から十八時まではヨーコが、十八時から二十時までは小学校から帰宅した桐子が店番を担当していたが、この盛況ぶりを反映し二十時まで営業時間を延長する方針に決まった。桐子からすると勉強に費やす時間が短くなるのでこのまま鼈の湯は素直に寂れていてほしかったのだが、どうせこの銭湯もあと一週間の命なので付き合ってやるかの老婆心がどうも芽生えたらしい。お手伝いの源さんも相変わず寡黙だ

が、ヨーコが来てからは若干後ろ姿が嬉しさを物語るようになった、ような気がする。

こうして休みの日になると、手持ち無沙汰なので基本二人とも番台で待つことになる。週末は銭湯サウナーらも多数来訪し、いつもにも増して人口密度は高まるが、そうでない時間帯は桐子とヨーコがただひたすらにくっちゃべっている。そんな土曜日の昼下がりにおける一幕。

「はい、じゃあこれで最後の納品になりますね。今までありがとうございましたー」

「あれ、桐子? 今の方は?」

「今までミニシャンプーとボディークリームを納入してもらった業者さん。これで最後の納入」

「そうでしたか」

「この後最後のビン牛乳が納品されてから、最後の使い捨てカミソリが納品される予定」

「いよいよ、と言いますか。物悲しいものですわね。せっかくサウナも私好みになってきてこれからだというのに……」

「そうだねえ、ヨーコさんが来てからはたくさんお客さん来てから、この売上の調子でずっと続けばいいんだろうけど、とはいえおじいちゃんとボイラーの老朽化の方はどうしようもないからねー……」

「桐子の中でお祖父様とボイラーは同列なんですね。

あ、お客様ですわ。いらっしやいませ」

「……おっ、エロ魔神じゃん！ 本当に銭湯やってんだな！」

ぞろぞろと五人の男子小学生が乗り込んできた。

「え、エロ魔神？ 桐子が？」

「うわっ……こいつら、ウチのクラスのバカ男子。アタシが銭湯の番頭やってるって話したら、男の裸を毎日見るとかエロ魔神じゃんって。んなわけないのに」

「ああ、なるほど。小学生特有の女子にちょっかいをかけるやつですね」

「いや、そんな優しいもんじゃなくて……あいつら図体もデカイしすぐ暴力振るおうとするから、正直ちょっと怖い……」

「じゃあ俺たち休憩室だけ借りるから」

バカ男子連中はそう言ってズカズカと休憩室に集まり始める。

「へ？ 風呂は……？」

「入んねーよ！ いつも遊んでる児童館が今日休みだからこちきてんの」

「俺コーラ！ 友達価格でおごりにしといて」

「あ、テレビあるしテレビ画面つないでスマブラしようぜー」

バカ男子はバカでかい声でギャハギャハ騒ぎつつ、休憩室にあるコの字型のソファを勝手に占拠しようとしていた。脱衣所から出てきた客も、聞き慣れぬ騒音に何事かと眉をひそめている。

「ちょ、ちょっと……あんたたち！」

「お客様」

ヨーコはゾツとするような暗く冷たい声で彼らを呼び止め、一瞬の沈黙が彼女への注目を引き立てる。

「ここは鼈の湯利用の方が休憩をする場所です。お風呂に入られないなら、お引取りを」

「な、なんだよ。俺たちは場所を借りるだけだって……」

「お引取りを」

「まあここはひとつ、同じクラスののよしみだと思つて……」

「お引取りを」

「ちっ……」

バカ男子連中はそろそろと下駄箱に戻り、下足を履いてつまらなそうに出ていった。

「すごい、ヨーコさん！ アイツら学校の先生でも手のつけられない問題児連中なのに」

「左様ですか。まあ私のほうがお姉さんですし、これぐらい朝飯前でございますよ。えっへん」

ヨーコは久々にお姉さん風を吹かせられて満足し、少し得意げな表情を浮かべた。

二〇二三年一〇月二九日（土）

「た、大変だあーっ！ 桐子ちゃん、あの子らが……」

「いま行きます！」

トメさんの悲痛な叫びを聞いて、たまらず桐子は番台から飛び出した。

今日は店じまいの前日で、そろそろ日が落ちようかという頃合い。つい五分ほど前に同じクラスのバカ男子連中五人組が訪れ、人数分の回数券を釣り銭トレーに投げ込み、ニヤニヤと下卑た笑みを浮かべながらズカズカと男湯の暖簾をくぐっていった。桐子は声をかけて止めようとしたが、金を支払っている以上は彼らも客である。迷惑行為をしたわけでもないので入店拒否はできない。

ヨーコは丁度夕飯の買い出しに出かけており、源さんはボイラー室にこもっている。よって現状店番は桐子一人で対応しなければならない。バカ男子連中も何故このタイミングでやってきたのかは分からないが、桐子の中で嫌な予感拭えず、そしてたった今、とうとう何かをしかけたらしい。桐子が男湯の洗い場に飛び込むと、そこではあるうことか、八十二年の歴史をもつ鼈の湯がバカ男子連中の遊び場として辱められていた。

「いきまーす！ 第一投！」

クソガキ一号の手から放たれたケロリン桶は石鹸でぬるぬるにされたタイルの上を滑り、その奥に整列された空のシャンプーボトルをなぎ倒す。ケロリン桶は勢いを

落とさず、そのままサウナの入り口のガラス窓に衝突した。ギシャ、という鈍い音が響く。ひよつとしたらヒビが入ったのかもしれない。

「ギャハハ！ スペア！」

彼らは桶でボウリングをしていたのだろう。周囲の爺連中はすっかり怯えて反対側の洗い場に避難している。

「じゃ、オレ水泳の練習しまーす！」

ジェットバス風呂の手すりに両手を掴んだクソガキ二号が突如バタ足の練習を始めた。バシャバシャと飛び跳ねる水しぶきが飛び散るたびに、爺連中は慄きながら一歩ずつ遠ざかる。何が面白いのか分からないが、バカ男子連中はひたすら爆笑していた。

このようにして彼らが醸し出す治安は最悪を極めている。あまりにも限界的な光景は桐子に絶句をもたらしただ。だが同年代男子が程度の低い遊びで他のお客様に迷惑をおかしているという事実には、番頭としては目をそむけられない。

「あ……あんなたち！ な、なにやってんの！」

「あ、エロ魔神。やっと来たか」

「器物損害で訴えるわよ！ もうアンタたち出禁よ
出禁」

「あーうつせえ。どうせこ明日で閉店なんだからいくら壊れてもいいじゃん」

「なんですつて……!?」

「それよりエロ魔神、俺らの全裸ガッツリ見てマジでうけるんですけど？」

「やっぱエロ魔神なんすねー」

「明日から学校で言いふらそうぜー」

「へーんたい！ へーんたい！」

「な、なに言ってるんのあんなたち……」

ここでは既に大人の倫理観が欠如し、ただエロい方だけが悪とされる小学生の倫理観が前提として持ち出されていた。もはや彼らとのまともな話し合いは困難であろう。桐子は見限った。

「け、警察呼ぶわよ……」

「いいよ？ 別に呼んでもらっても」

「その間に風呂から上がって俺たち帰るから」

「でも通報したのが小学生で、しかも相手が同級生な

ら、子どもの喧嘩に警察を呼び出すただのいたずらと思
われるかもね」

「ぐっ……」

このバカ男子どもは決して完全に阿呆というわけでは
なく、いかに一線を超えないラインで悪事をするかとい
う才能に長けていた。そうこうしている間にも彼らの行
為はエスカレートしていく。大声で歌い始め、水風呂に
飛び込んで素潜りしたり、サウナの入り口の鍵穴に指を
無理やり引っ掛けてサウナを無断利用したりと、やるこ
となすことはめちゃくちゃである。すっかり利用客は洗
い場から逃げるように上がってしまった。どれくらい時
間が経過しただろうか。桐子は途方にくれ、棒立ちにな
り、目にはうっすら涙を浮かべている。その時、早足で
桐子の脇をすり抜け、彼らに近づく女が一人いた。ヨー
コである。

「ヨーコさん？」

「はっ！」

ヨーコはクソガキ一号の局部めがけてタオルを放り投
げるように伸ばし、そこから高速で手首のスナップを効

かせるように引いた。パチン、という音が響く。

「いっ……！」

クソガキ一号が苦痛に顔を歪めながらその場で小さく
うずくまった。

「い、いきなり何しやがるこのクソババア！」

続けてクソガキ二号、三号がヨーコに掴みかかろうと
するが、それらもヨーコがタオル技で局部を懲らしめて
やると、彼らは強烈な痛みを耐え堪えぶかのように膝から
崩れ落ちた。

「うぐっ……うぐぐ……」

クソガキ四号、五号は彼らが味わったその痛みを想像
するだけで自分自身がギュッと縮こまり、思わず両手で
ナニを抑えた。

「日本男児ともあろうものが寄ってたかって一人のおな
ごをいたぶるとは……恥を知らない！」

「な、なにしがやる。そっちこそ傷害罪で訴えてやる！」
「ふぐりの痛みは強烈、されど一瞬。喉元を過ぎれば
外傷も残りませぬ。証拠もなしにナニを訴えるので
して？」

「ぐっ……」

「本来撮影禁止ですが番頭特権として、脱衣所からすまーとふおんを用いて貴方がたの顔写真と悪事は撮影しております。出禁とさせていただきますので、どうかお引取りを」

「くそ……撤収！」

苦痛に顔を歪めている男子達は、お互いの肩を借りながらとぼとぼと退出していった。

「凄い……映画のワンシーンみたいでカッコよかったよ！ ヨーコさん」

「ええ、日頃練習していたタオルヌンチャクがこんなところで生きるとは。ですが……」

「どしたの？」

「ですが、今の悪童の振る舞いで理解しました。日本国を背負うはずの若者が、あんな下劣な行為でおなごをいたぶるなどあつてはなりません。やはりここは、私がい

た日本ではないのですね……」

ヨーコの目線はどこか遠くを見つめているようで、桐子は少し物悲しさを感じた。

＊

その日の夜更け。カーテンの隙間から差し込む月明かりは妙に力強く、桐子も、ヨーコにとっても眠りへの誘いがどこか遠くへ妨げられるような夜だった。

「ヨーコさん、まだ起きてる？」

「ええ、起きてますよ。なかなか寝付けなくて」

「……ヨーコさん、私やつぱり怖い」

「どうしましたか、桐子？」

「銭湯なんて重労働で儲からないだけの仕事だと思っていたのに、昨日まで存在していたいつもの存在が、急にフツと居なくなるのは嫌だなんて。常連さんも最初は寂しがってるけど、段々と忘れていく。うまく言葉にできないんだけど、いるのが当たり前だったのに、いないのが当たり前になっていくのは……なんだか胸が締め付けられるように苦しい」

「うんうん」

「もー、ヨーコさん真面目に聞いている？」

「もちろんですよ。もう少しそっちに寄りましょうか」

ヨーコは桐子の布団に入り込み、左腕を曲げてくの字で頭を支えつつ、右手で桐子の頭を優しくなでた。

「桐子、大丈夫ですよ」

「なにが？」

「いいですか、確かに鼈の湯がなくなるのは悲しい事です。ですが桐子、明日からの貴女が昨日までの貴女に縛られる必要はないのです。明日までは鼈の湯が存在する日を、明後日からは鼈の湯が存在しない日を楽しめばいい。今まで我慢していたことも全部やれますよ。放課後に友達とモガな格好して遊びに行ってもいいんです」

「モガ……？」

「モダンなガールのことですよ」

「初めて聞いた。うん、でもそうだよね。私もやっと受験生らしく勉強に集中できるし……あれ、ヨーコさんは？」

「私？」

「働くのはもともと閉店までの予定だったよね」

「ああ、確かに……どうでしょうかしら」

「ヨーコさん、ウチにずっと居てくれる？」

「そんなの分かりませんわ。私はきっといつかなくなる存在ですもの」

「やだ。ヨーコさんがずっと居てくれないと私が駄々こねる。今日もこのまま夜ふかしするから」

「あらあら、困りましたわね。明日も朝早いのに」

桐子はしばらくの間ヨーコを可愛らしく睨みつけていたが、次第に瞼がうつらうつらとくつき始めた。

「それじゃあおやすみなさいね、桐子」

「ヨーコさん……離れないで……」

「ふふっ。本来こういうエスッぽいのは、私の役割じゃないのですが……」

そう言ってヨーコは桐子のおでこに軽くキスをした。

二〇二三年一〇月三〇日（日）

とうとう鼈の湯は最終営業日を迎えた。開店する少し前に二、三十の人々が近所の公園に集まってワイワイやり始めた。中には鼈の湯の常連さんも多い。町内会の会長さんが今までお疲れさまでしたも兼ね、小規模ながら閉店記念式典を開催すると話していた。普段夏祭りの時

だけ使われる折りたたみの長机が展開され、その上には水漬けプールから取り出されたビールやらチューハイやらがずらっと並んでいる。桐子はまだ酒の味を知らないが、こういう行事は真つ昼間から呑む罪悪感を薄める口実を作るためだと祖父から繰り返し聞かされていた。

「お、集まってんなア」

桐子の祖父である修も、この日のためにリハビリをしつかりこなし、今日は自分の足で病院からここまで歩いてきた。

「あ、爺ちゃん。腰は大丈夫？」

「おうよ、毎日べっぴんの看護師さんに按摩してもらってっからすつかりピンピンよオ」

「へえ、それはなにより。お酒は？」

「うん、ビールもらおうか」

「ほどほどにしておきなさいね。あ、町内会長さんなんか喋ってるよ」

「おや、丁度修さんもお越しくださいましたね。えー本日はご一杯のお運びありがたく御礼申し上げます……」

「おう泡が抜けちまうだろうよ挨拶なんざさつさとべち

まえ！」

「……などといった真摯なご意見が当の本人から上がっておりまですので、私からの挨拶は前略とさせて頂きます」

周囲からクスクスと笑いが漏れる。

「えー、手短に。本日鼈の湯は八十二年という長い歴史にピリオドを打つわけでございますが、番頭として支えて頂いた薪浦修サマのご尽力がなければここまで続くことはなかったでしょう」

周囲からパチパチと拍手の音が響いた。修は突然持ち上げられて居心地が悪そうに頭をボリボリと掻く。

「そしてその歴史には若い世代の力もありました。そのお孫さん、牧浦桐子サン！」

常連さん数名を中心にパチパチとやかましい拍手が響く。

「そしてここ半月の間ではありますが、町内会の人気をかつさらったダークホース、ヨーコサン！」

申し訳なさそうにヨーコが人混みから現れ、先程に負けないほどの拍手音に包まれた。

「あ、そうか。爺ちゃん紹介するね。こちらが二週間住み込みで働いてもらったヨークさん……」

「ヨーク……母ちゃん……?」

「えっ?」

ビール缶が修の右手から滑り落ち、地面にこぼれた液体のシュワシュワという音だけが響く。周囲の人間も彼のただならぬ雰囲気気圧され、拍手の音がピタリとやんだ。

「母ちゃん! 俺だよ……オラだよ! 修だよオ!」

修から言葉が、同時に涙が、堰を切ったように止めどなく次々と溢れ落ちる。

「オラ、母ちゃんがおっ死んでからも、ずっと、この鼈の湯だけは続けなくちゃなんねえって、ずっと、ずっと……と続けてきて、でも身体にもガタがキチまって、もう続けらんなくて……ごめん……ごめん、母ちゃん」

桐子は己の祖父が、それどころか人が、ここまで感情をむき出しにし、ボロボロと涙を流しながら膝をついて謝罪する様を初めて目にした。だが桐子含め周囲にいた

誰しもが、何故修がヨークに対し謝っているのかが分からない。

「あ……なるほど、合点がいましたわね」

ただ一人、ヨーク以外は。

「えーっと、修さん……でしたっけ? ここまで続いたんだから立派なもんじゃございませんか。よく頑張ってくださいました。貴方とは……そうですね、数年後にまた、貴方ではない貴方とお会いできるかと思えますので、どうかこの鼈の湯をこれからも大事になさってください」

「うん……よく分かんねえけど、分かったよ母ちゃん」

「あ、それから桐子」

「はい?」

ヨークは少し困ったような、でも決して桐子を悲しませないように、嬉しげな笑みを顔に浮かべた。

「修さんを……おじいちゃんをこれから大事にしてあげて頂戴。貴女とはここでお別れになるけど、この二週間、本当に色んなものを学べたし、心の底から楽しめましたわ。いつか時代が迫いついてから、絶対に鼈の湯に

サウナを設置するから。その日まで待っていて頂戴」

「そんな、待つて、ヨーコさん、いきなりどうして……」

「それではまた、ごきげんよう」

その時、どこからともなくシャボン玉がゆらゆらと漂ってきた。いつか見たそれは、風に揺られたそれは避ける暇すら与えず、桐子の目の前でパチンと弾ける。ただちに世界が揺れて、視界が歪む。

「……あれ？」

「……ん？」

「爺ちゃん、いきなり地面に突っ伏しちやってどうしたの？」

「ん？ わかんねえな……腰が抜けちゃったのか。なんでエ、両目に涙浮かべてやがら」

「なんだ、そーんなに鼈の湯が閉まるの悲しかったんだ」

「ば、馬鹿言うんじゃねエ」

「おや、何かございましたかね？ えーそれでは改めて……鼈の湯を支えてくださった薪浦修サマ、牧浦桐子サンの両名に大きな拍手を！」

今度こそ大盛況の拍手が鳴り響いた。

＊

最終日ということもあり、鼈の湯は大盛況だった。ほぼ休みなしでお客さんを捌いて捌いて捌き倒し、いつもの閉店時間を一時間ほど過ぎてようやく店じまいが終わり、最後の風呂に入った。

「どうだ？ 久々に爺ちゃんと背中流し合いでもすっか？」

「大田区公衆浴場の設置場所の配置及び衛生措置等の基準に関する条例の改正に伴い、七歳以上の混浴は禁じられていますのでお断りします」

「キリちゃん、だんだんそういう冗談が通じない大人になってきたよなア」

「馬鹿言ってないで風呂もらいましょ。今日は疲れたわ……」

洗い場で身体を流し、サウナで汗を流す。桐子にとつていつものルーチンだが、今日はどこか寂しく感じる。いや、いつもどおり一人でいるはずなのだが、一人でいるのはこんなにも久々だっただろうか。最終日だからい

つもよりも感情が極まっているだけなのだろうか。

改めて経験してみると、手前味噌ながら当店のサウナは大手にも引けを取らない、いいサウナだと桐子は実感した。温度は百度で湿度は四十パーセント、サウナマットとして近所の水泳教室で使わなくなったビート板を再利用している。水風呂はサウナ外徒歩五秒に位置し、身体がこわばり過ぎない十七度を常にキープ、ネットに包んだ備長炭を浮かべていて水が柔らかい。水風呂後はプー椅子にすわってじっくりととのえる。そんな最小限で理想的なサウナ環境がここにはある。

……しかし何故だろう。この場所ですのとっているところなんにも気持ちいいのに、どうしてだか桐子の涙腺からは涙が止まらなかった。思わず鼻を吸う音が隣まで届いてしまう。

「お、どうした？ キリちゃんも泣いてんのか？」

「爺ちゃんうっさい」

なんだ。自覚はなかったけど自分も結構感情のある方じゃないか、と桐子は密やかに安心感を覚えた。

＊

「薪浦修です。重ね重ねの通知になりますが、このたび蒲田 鼈の湯は給湯設備の老朽化に伴い一〇月三〇日（日）をもって閉店致しました。利用者の皆様、長らくのご愛顧ありがとうございました（代筆：薪浦桐子）」

「また改めて押入れを整理していたところ、私の母、薪浦洋子（マキウラヨウコ）が作製した箱型蒸し風呂（サウナ）の試作品に関する写真を発見したので、これを共有させて頂きます」

「この写真は戦後間もない一九五〇年代に撮影したと推測され、いわゆる第一次サウナブームとされている一九六四年以前に日本でもサウナの設置を試みようとしていたという、我が国のサウナ史においても大変貴重な一枚かと推察されます」

「この貴重な写真の投稿を以て本アカウントは基本的な運用を終了とさせて頂きます。今までのご愛顧ありがとうございました」

桜紅葉と強化外骨格少女

有坂

ブローグ

「調子はどう？」

俺がそう声をかけると、病室の外を眺めていた美幸さんがこちらを向いて目を細めた。むき出しのコンクリートに囲まれた部屋はしんとしていて、彼女が身を動かしただけすら僅かに聞こえる。斜めに持ち上がったベッドに患者衣で横たわる彼女を、窓から差し込む陽光が薄橙色に染めていた。

「快調。このまま行けばすぐ治るんじゃないかってくらい」

だからこそ、対照的に青白くなっていく美幸さんの姿を見るのが辛くて、最近日は日が落ちてから訪れることが多かった。だが、それも昨日までのこと。今日からはそんな些、細なことに悩む必要はない。

「よかった。なら、これからの生活も大丈夫そうだ。そういえば昨日、久々に煙草が納入されてたけど——」

「もちろん、もらってきたんでしょ？」

「当然。ほら、ここに」

カバンから紙でできた小包を取り出して見せると、美幸さんは嬉しそうに笑った。こういう些細なことでも喜んでくれるから、毎回何かを持ってきたくなってしまう。食べ物、本、小物……でも、彼女が一番喜んでくれるのは、こういう病人向きじゃないモノだ。

「天才。じゃ、ここで吸っちゃおうかな」

「あーまだダメ、家につくまで我慢して」

「冗談だって。そうそう、新しい家はこういう場所なの？」

「いい場所だよ。山に囲まれた大きなアパートでね、隣の倉庫も借りられた。こっちから餞別としてマシンも何台か持ってきてるし」

「やるね、着くのが楽しみ。袖もそっちに？」

「車で待ってる。病室にも来たがったけど……」

そこまで話したところで、唐突に病室の扉が開く。振り返ると、診察カバンを持った白衣の医者——紺色の工場作業着に身を包んだ、忌々しい^{アイツ}准がいた。ドクン、と心臓が大きく脈打つ。

「英生さん、考え直してただけませんか？」

偉そうにそう問いかけてきた准の言葉を聞いて、思わず舌打ちが出てしまった。クソ、美幸さんの前でこういう姿を見せたくないのに。

「……お前はとりあえず病室の外に出ろ。先生と美幸さんも、また後で」

「はいはい」

気の抜けた返事をした美幸さんを背後に、俺は准を睨みつける。医者は荷物を抱えて気まずそうに脇を通っていった。黙って廊下に戻っていくアイツを追うようにして、俺も病室を出る。そして、

「てめえ、今更どの面下げてきやがった——！」

扉を閉めたことを確認してから、俺はアイツに掴みかかる。薄汚れた作業着の襟首を引きちぎるくらいに引っ張ってやるが、准は微動だにせず、俺をまっすぐ見据え続けた。そう、コイツはいつもこうだ。人間らしさを感じない、冷酷で冷酷なロボットみたいなやつ。俺は最初からコイツが嫌いだった。そして今は、殺してもいいくらいには嫌いだ。

「美幸さんのことは申し訳ないと思っています。ともに

生きていた仲間ですから、英生さんが憤る気持ちもよく分かる。私だって、できるなら何とかしてあげたい」

白々しくそう言い切る准に、俺の口調はさらに荒々しくなる。

「そうかよ、分かっただつたら——」

「ですが、これは全員で決めたことです。このままだと我々は共倒れで、待つのは飢餓と殺し合いです。もちろん、美幸さんだって守れない」

「だが、彼女は入院患者だぞ！」

「分かっています。だから滞在期限の延長もしてきましたし、今後も支援は続けるつもりです。とはいえ、このまま例外にし続けるわけにはいきません。『不公平』として不満の矛先が向いてしまったら、本人にも危険が及びかねない」

「だから追い出すのかよ」

「……心苦しいですが、それが最善かと」

「クソが！」

突き飛ばすようにして、俺は准から手を離す。准は数歩だけ下がると、澄ました顔で襟を整えてみせた。一挙

手一投足、エリート仕草がつくづく鼻につく。

「しかし、これはあくまで一時的な措置です。現在練っている戦略では、近い将来、モミジを元に戻すことができる見込みが十分にある。鍵になるのは、英生さんが主導する強化外骨格です」

准はやはり落ち着きはらった口調で、淡々と主張を述べ続ける。

「英生さんのスーツにはモミジ全員を救うだけの力がある。設計を手伝った私には分かります。ご協力いただければ、さほど時間をかけずにモミジを立て直せる。逆に英生さんがいなければ、かなりの遠回りが強いられるのは確実です」

「……」

「だからお願いします、どうかモミジに残ってください。美幸さんと、柚さんのためにも」

演説が終わってしばらく、俺は何も言わなかった。もちろん、返す言葉は決まっている。悩んでいるわけではない。だが、この言葉は軽い気持ちで言うものでもなかった。美幸と柚、そしてこちら側全員に影響がある決

定になるから。だからこそ俺は責任を噛みしめるように、じつくりと言葉を咀嚼する。そして、俺たちの総意、渾身の力を込めた最後の抗議として——ようやく、言い放つ。

「お断りだ。俺らはもう、お前らの道具じゃない」

「……残念ですよ、本当に」

准は右手で目元に手を当てて、わざとらしくため息をつきながら言った。

「一旦お別れですね。近いうちに会えることを、心から祈っています」

「あばよ、クソ野郎」

俺の暴言も意に介さず、准は踵を返してその場を去っていった。静謐な廊下に、アイツの足音だけが反響する。それも段々と小さくなって、やがて聞こえなくなつた。ほどなくして医者に支えられながら、私服に着替えた美幸が出てきた。「すみませんが、杖を」と医者に急かされ、俺は慌てて病室から松葉杖を一本持つてくる。

「しかし、お二人とも本当に……こんな別れになってしまつて、なんて言えばいいか」

美幸さんが杖をついて数歩歩いてみたところで、医者がそうぽつりと漏らす。小さくうなだれた彼に対して、俺はかぶりを振って答える。

「先生のせいじゃないですよ、悪いのはアイツです」

「……………」

「お世話になりました」

「いままでありがとうございます、先生」

「……どうか、お元気で」

医者にそう挨拶をして、俺と美幸さんは歩き始める。杖をつきながら、一歩ずつ、ゆっくりと。病院の出入口を出たところで、離れた場所に出迎えの小型車両が停まっているのが見えた。俺が車に手を振ると、我慢できなかったのか、ドアを勢いよく開けて袖が降りてくる。その小さな姿は途中で転びそうになりながらも、一生懸命にこちらへ走ってきていた。

「ねえ、ヒデちゃん」

「うん？」

「私、今、幸せだよ」

杖によりかかりながら、美幸さんが俺の手を握ってく

る。だから俺も、それを強く握り返して答えた。

＊

美幸さんが息を引き取ったのは、それから百十二日が経った朝だ。「お悔やみ申し上げます」と一文だけ書かれた手紙が届いたのは、さらに二日経った日の夕方だった。俺は手紙を受け取ってすぐにアパートを飛び出し、近くの湖へと走った。息を切らしながら湖畔に辿り着いて、落陽する湖の向こう岸——『モミジ』にいるであろう准を睨みつけながら、こう誓ったのだ。

「このまま無事でいられると思うなよ、准。そして、モミジの裏切り者ども——」

＊

——それから、十年の歳月が過ぎて——

第一章

「ねーねー父さん」

「なんだ？」

「人間ってさ、なんでこんなあつちいで働かなくちゃいけないの？ もう二十一世紀半ばだよ？ 昔の人からしたらSFの世界だよ？ それがこんな未来だなんて、あんまりなあ……」

リビングに置かれた二人がけの古びたソファで干物のように倒れ込んでいる柚が、怠惰と疲れを凝縮したような声でそんなことを言っている。彼女のボサツとした長い髪の毛もあって、角度次第ではまるで死体に見えるようだ。ソファの向こうではベランダに続く掃き出し窓が網戸を残して全開にされているが、肝心の風が吹いていない。せっかく吊るした年代物の風鈴も、こうなればただの飾りだ。ソファの隣では木製の食卓兼作業机にノートパソコンと小型の機械を並べて、柚と同様だらしなく伸びた髪の毛の英生さんがパチパチとキーボードを叩いている。作業の邪魔なのかヘアピンで前髪を止めている姿か

らはやはり『無精』の二文字が感じられて、親子というのはここまで似るものなのだなあと感心してしまう。小さい頃から親がいない私にとっては、何度見ても新鮮というか不思議な光景だ。

「分かるぞ。柚。俺も柚くらいの歳……あーっと十七だったか、その頃はそんなことを思ってたもんだ」

「だよー、人間仕事なんかやめちまえよホント。夏の昼は涼しい場所で寝て、夜も肉だけ食って寝るのが一番——」

「けどな、大学生になってアルバイトをするようになって、初めて先輩から感謝された瞬間に気がついたんだよ。『ああ、人類ってのは、仕事をするために生きるんだ』って——」

「は？」

「柚はまだ家に引きこもってるから分からないだろう。でもな、仕事して褒められる瞬間っていうのが人間一番嬉しいんだぞ。だから父さんは大学も中退して、ずっと技術職一筋でやってきたんだ。朝六時から夜二十時まで馬車馬のように働いてな。そうそう、中でも一

「番大変だったのは三十の頃にあったデスマーチで……」

「その話聞くのもう一万回目くらいだよ。つかサラッと私馬鹿にされてない？ いやでも父さんにこの話を振った私は確かに馬鹿だったか」

「さあ袖も寝っ転がってないで働け！ 俺だって得意じゃないプログラム書いてんだから！ いいか、俺が若い頃はな……」

「うるせーよジジイ、プログラムなら午前中に私が大体書いてあげたじゃん。なんで残りが書けないんだよ、あーまったく父さんはこれだから困る」

「ブツブツと文句を言いながらのっそりと袖が起き上がったところで、台所でグラスを盆に載せ終えた私は二人の元へと向かう。」

「はい、コーヒーです。冷たいやつ」

「いつも悪いな。そんな気を遣わなくてもいいのに」

机の上にグラスを置いた私に小さく頭を下げて、英生さんが申し訳なさそうに言った。

「これくらいはさせてください。私は居候の身ですから」

「違う、俺たちは対等だ。それに朝は畑を見に行ってたんだろ？ 袖をどかしてソファで休んでろって」

「これくらい、慣れてるので大丈夫です」

「それは理由になってねえ。ほら、休んだ休んだ」

笑いながら私が言った言葉を、英生さんはきっぱりと否定した。私としては本心だったし、こんな大変な時代に匿ってくれる二人には感謝しかない。というか、このコミュニケーションだと私にはこういう仕事しかできないから、むしろやらせてほしいまであるけど。

「そうだよ芽衣、そんなダメ親父放っておいて一緒に寝よ」

「袖は今日の分の仕事が残ってるだろ。つか家事当番、本当は今日お前なんだぞ。結局朝は俺がやったが」

「めんどくさい。プログラム書いてあげたんだからいいでしょ」

「まったく、俺もお前を甘やかすすぎたよな……」

「そーそー、教育が悪いんだから親の責任だよね」

「んだと」

ため息まじりに頭をかいた英生さんを袖が煽って、若

干険悪そうな雰囲気になる。一見喧嘩みたいに見えるこの光景に最初は戸惑ったのを思い出した。これが二人なりのコミュニケーションなんだということが徐々に分かってきたのは、一緒に生活を始めて半年くらいが経った頃のこと。共同生活歴三年になった現在では、こういうときの二人に一番効く返し方もバツチリ会得している。たとえばこんな具合に。

「じゃあ、今日の残りの家事は私がやります。ご飯とか作りますから、二人はゆっくりしててください」

「えっ、いいの？」

「いいよ。朝から農作業で疲れてますが、でも私は立場が弱いし？ 当番を守らない人がいても、所詮よそ者の私は馬車馬のように働くしかないよ。きつと私みたいな女は死ぬまでこんな感じなんだろうな」

「あー、分かったってば！ 嘘！ 冗談だから！ 芽衣はこれ以上働いちやだめ！」「でも——」

「すいません私が悪かったです当番守ります頼むから休んでくださいお願いします芽衣様」

「うん、じゃあお願い」

「……はああ」

「やっぱり疲れてるみたいなら——」

「いやいや元氣いっぱい！ よく寝た！ さあ仕事しよやかな仕事！ というわけで父さんはそこいて他の仕事やって」

「ウス、じゃあこっちは頼んだ。俺は本業をやるよ」

途端にパタパタと機敏になった袖がラップトップの前に座り、英生さんはその隣にある小型の機械の前に移動する。英生さんは私の方に顔を向けると、右手で小さく親指を突き立てた。私は愛想笑いを返しておく。無事に回り始めたことを確認して、私は自分の分のグラスを取るとソファに座った。これ以上あれこれ動くとややこしくなる。

アイスコーヒーを口に含んで、グラスを揺らす。冷たい感覚と氷同士の軽い音が混じって、夏の暑さが幾分か和らいだ気がした。とはいえ、私たちが住んでいるのは山の中……いわゆる田舎だから、平地に比べたらずっと涼しい。以前に住んでいた場所では、もっと凄まじい暑さだったのを覚えている。そういえば、あれも夏の日

だったつけ。バタバタと倒れていく老人たち。食料不足で殴り合いになる隣近所。割れたアスファルトに燃える陽炎の中、血を流しながら倒れている一家――

「……やめやめ」

左右に首を振って、ぐいと口元のグラスを傾ける。冷たい氷とコーヒ―を、脳裏に浮かび上がってきた嫌な記憶と胃へと流し込んだ。「終わったことは振り返らない」は、この厳しい時代を生き抜く知恵の一つだ。そして、今回のコーヒ―は少し薄かったかも。

首を回して、二人の様子を伺う。柚も英生さんも、さつきと打って変わって黙々と作業に集中していた。柚はキーボードを叩いてはじつと考えるのを何度も繰り返して、英生さんは手先で器用に小さな機械の配線を組み替えているようだ。私がじつと見つめていても、二人ともこちらに気づく素振りはない。お互いに文句を言い合うことはあってもやっぱり似たもの同士とか、根っからの技術者なんだなあと感じる。そう考えると、なんだか二人がより可愛らしく思えてきて、口元が少しほころんだ。

この人たちはいい人だ。私みたいな人を受け入れてくれて、仕事にも一生懸命で。もし世界が少しだけ違っていたらきっと、英生さんたちの家族は何不自由なく幸せに暮らせていたんだろう。

でも本当に、神様っていうのは意地悪だから、

「……皮肉な話だよ。一生懸命書いたこのドローンの制御用プログラムもさ、私たちは使えないんですよ」

「言うな。クソ、モミジが、俺たちにドローンなんて高級なもんをよこしてくれると思うか？」

「だよ。あー、モミジなんてみんな死ぬばいのに」

「今は我慢だ。モミジをぶち倒すまでの仕事だと割り切れ」

「分かってる。けど、さ」

隣のコミュンへの呪詛を吐く二人の姿を見る度、私は二人が遠くに行ってしまったように感じて、ちよつと悲しい。

*

「二〇四二年。第三次世界大戦の勃発と化学兵器と核爆

弾により、世界は崩壊してしまいました」

学校の教室の席に座っている私は、先生が話しているのを聞いていた。今日の先生役で来た女の人は淡々としすぎていてハズレだ。というか見覚えがある顔な気がするんだけど、誰だっけ。微妙に思い出しきれず、うーんと悩んだまま窓の外を眺める。青空の下、グラウンドには仮設テントがいくつか建てられている。大人たちはテントの中に色々な荷物や機材を置いて何やら作業しているようだ。窓辺にはモンシロチョウが飛んでいるのも見えた。かわいい。

「芽衣ちゃん、よそ見しない」

外を見てボーッとしていた私は、先生に注意されてしまった。「『ごめんなさい』と言って、私は机の上に広げてあった紙に目を通す。紙には文字と絵が鉛筆で手書きされていて、字は少し読みづらかった。少しでも顔を動かして、こっそり周りの席を見してみる。今日の出席者は八人ほどで、みんなうつらうつらとしているようだ。うーん、やっぱり今日はハズレっぽい。

「戦争の影響で、数十億人だった世界人口は一億人にま

で減少したといえます。欧州秩序は完全に崩壊し、アメリカでは大規模な内戦が発生したそうです。ただ、核戦争による破壊とインターネットの遮断により、海外の詳細は伝わっていません……」

「……日本では、東京を中心にいくつもの核爆弾が投下され、各地の主要な基地には化学兵器などが用いられました。結果、多くの街が破壊され、総人口は八百万人ほどまで減少しました。そして日本という国……というように、世界中の国家という仕組みがごとく崩壊し、代わりに人々は無数の共同体、いわば大きめの村社会に籠もって生きるようになりました。これを、私たちはコミュニケーションと呼んでいます。それぞれのコミュニケーションには名前がついていて、例えば私たちは『ヒマワリ』ですね……」

「……………生き残った人々は戦争の悲惨さを反省し、コミュニケーションの争いは『決闘』という代表同士の戦いに限定することになりました。他にもいくつかの統一ルールが決められていて、これらを破ったコミュニケーションは、他のコミュニケーションから取引や交易を拒否されます。今はコ

ミューン同士の取引がないと生きていけないので、一度破れば……………」

先生の濃淡のない話し口調に乗せられて、周りと同じく私もうとうとし始めた。視界がもやもやとし始める。春のうららかな温もり、穏やかな時間。授業の話は、さながら子守唄のようで……

ああ、そうだ、やつと思ひ出した。確か、この人は

ハッと顔を上げる。もう教室はなくなっていて、私はひび割れたアスファルトに立ち尽くしていた。周囲の家の窓ガラスはことごとく叩き割られ、軽自動車が家の塀に突っ込んだまま放置されている。先の脇道にリュックサックと衣類が散乱しているのが見えたので、恐る恐る様子を確認しに行くと、

灰色のブロック塀に挟まれた狭い道を塞ぐように、大人と子どもの死体が横たわっていた。ハエが狂ったように飛び回る下で、地面には大きな赤黒い染みができていく。大人の死体の顔には見覚えがあった。だって、さっきまで黒板の前で話していた人だったから。

「芽衣ちゃん」

死体の口元がゆっくりと動いて私の名前を呼ぶ。生氣のない顔なのに、声は不思議と優しく聞こえた。

「ごめんなさい、最後まで名前を覚えてあげられなくて」
私は女の人……先生にそう告げて、ゆっくりと目を閉じる。夢、記憶の狭間から抜け出すために、大きく深呼吸をして。私は、いつもと同じように目覚めの呪文を唱える。

「終わったことは、振り返らない」

＊

気がつくと、既に日が落ちかけていた。風に揺られてリンと風鈴が鳴る。夕方の風鈴はどうしても寂しげに聞こえるんだろう。

ふと手元を見ると、いつの間にかガラスはなくなっていた。代わりに私の隣に柚が座っていて、こちらの肩に頭を預けながら気持ち良さそうに寝息をたてている。柚からちよっただけ汗の匂いがして、一瞬ドキリとした。

「ごめんな、起こしちゃったか」

食卓の方から声がする。首を回すと、英生さんが机の上から端末や機械を片付けているところだった。声と動作から若干の疲労感が伺える。今日の分の仕事がよくやく終わったということなのだろう。

「いえ、私は大丈夫です。そうだ、そろそろご飯……柚も寝ちゃってるので」

「いいよ、作つとくから。どうせ朝も俺がやったんだ、柚の当番は明日にずらしとけばいいし。それより風呂が始まるだろうし、先にそっち行つてきな。今日は燃料の都合で閉めるの早いつて連絡来てたろ」

「そういえばそうでした。柚は？」

「起きそうなら連れてつてもらえるか？ 汗かいてるだろうし。まあ夏は水でいいとか言うかもしれんが」

「りょーかいです」

英生さんが荷物を持って部屋を出ていくのを横目で眺めながら、柚を小突く。「うーん」という声を上げて、柚が目を開けた。とろんとした寝起きの目をしている。

「あー芽衣い。おはよ」

「寝ぼけてないで、もうお風呂の時間だよ。それに、約

束したのに英生さんに家事やらせるなんて……」

「……え？」

私が時間を告げると、柚は一瞬間まってから慌てて立ち上がる。飛び起きた犬みたいに俊敏な動作だった。普段はグータラしていても、柚の運動神経はかなりいいことを私は知っている。昔近くのおじさんに習ったとかで、なんとか拳法とかいうのもそこそこできるらしい。

「うそ、ちよつとだけ昼寝のつもりだったのに……！ ごめん芽衣い、約束は破っても、私のこと嫌いにならないでえ」

「破つたのは柚だけどね……。じゃあ、代わりに明日はちゃんとできる？」

「やる！ やります！ やるから！」

「なら、嫌いにならないであげる」

「さすが芽衣様、芽衣お嬢様、ありがとうございます！ 一生ついていきます！」

私の手をとってブンブンと上下に揺らしながら、寝起きの謎テンションで柚が喜ぶ。リンと風鈴が鳴って、彼女のぼさついた長い髪とベージュのシャツがはためく。

もう十七だつていうのに、柚は随分と子供っぽい面がある。私と一歳しか変わらないというのが驚き……と言つたら失礼かな。

風の吹き込む窓を開けてベランダに出る。山麓を背景にして、物干し竿からハンガーで吊るされたタオルと衣類がひらひらと揺れていた。弱まった日差しを右手で遮りながら、二人分のタオルを外して手に取ってみる。軽く揉んでみたが、夏の爽やかな天候のおかげでしっかりと乾ききっているようだった。部屋にいる柚にそれを手渡して、手早く残りの洗濯物も取り込む。山の天気は変わりやすいので、忘れていると洗濯し直しになりかねない。

「芽衣ー、まだー?」

「文句言う前に手伝うことを覚えなよ、っと」

最後の洗濯物を部屋に放つて中へと戻る。念の為窓を閉めてから振り返ると、柚が私のタオルと畳んだ寝間着を差し出してくれた。

「えらい」

そう言って子供みたいに褒めると、やっぱり、柚はま

んざらでもないという風に笑ってくれた。

＊

アパートの二階から降りて、柚と一緒に細長くて古いアスファルトの道を歩いて進む。左右に広がる空き地には青々とした背の高い草が生い茂り、時折現れる一軒家にはよく伸びた蔦が絡みついていた。このあたりはコミュニティの中心部から少し離れていることもあって、住人数に対してのメンテナンス効率が悪い一軒家は割と放棄されている。一部が備蓄倉庫に転用されているとはいえ、そもそも今は資源が不足しがちということもあって、やはり捨てられている建物の方が圧倒的に多い。昔は『憧れのマイホーム』という言葉が流行っていたそうだけど、今となつては死語だった。

数分ほどで草木まみれだった視界がようやく開けて、夕日の残滓を浴びて小刻みに揺れながら光る湖が眼の前に広がる。それを囲むように山麓のちょうど正面には、一際大きな山がそびえ立っていた。この風景は何度見ても飽きないけど、個人的には日中の青空の方が好きだっ

たりする。湖畔は風が少し強くて、前を歩く柚の髪がパラパラと宙を舞っていた。左に曲がってしばらく行くと、右手に黄色い木製の手漕ぎ船が数隻揚げられた浜辺、左手に荒れた芝に覆われた五十メートル四方くらいの広場があって、さらに奥に二つの大きな移動式仮設テントが見える。経年劣化で薄汚れた白色の外観、分厚いタープの端がパタパタと音を立てるこのテントこそが目的地——このコミュニケーションの名前を冠した唯一の公衆浴場『サクラ風呂』だ。

「毎回思うけどさ、サクラの人ってネーミングセンスないよね」

見慣れたテントを指指して歩いていると、柚が唐突にそう話を切り出してきた。話すネタがないからだろうけど、いきなり自己批判なんて珍しい。何かあったのかな。

「うーん？ まあ、柚の命名ってちょっと変なときもあるよね。機械にギリシャ神話の神様の名前をつけたりとか」

「え、あ、そりゃ私は生粋のサクラ人だけど……じゃな

くて！ 風呂の名前のことを言ってるの！」

ムツとした表情で迫ってきた柚に「ごめんごめん」と謝る。なるほどそっちのことだったかと、今になって話の流れが腑に落ちた。柚は話の前提を端折ることが多いので、こういう齟齬がしばしば起きるのがちよつとした問題だ。かくもコミュニケーションは難しい。

『サクラ風呂』のこと？ いいじゃん、分かりやすいし」

「いやダサイでしょ。コミュニケーションの名前そのまんまだし、末尾に風呂って付けてるだけなのもひねりがないし」

「そんなこと言ったら、私たちが住んでるアパートの名前だってダサイことになるけど」

「げ、ウチの『サクラコーポⅡ』なんて問題外すぎて記憶から消えてたよ……最後のⅡなんて聞いただけで全身から蕁麻疹が出るくらいにはどう考えても余計でしょ……でもまあ確かにあれと比べたら『サクラ風呂』は相対的にカッコよくみえなくもないような気がしなくもないような……？ Ⅱも入ってないし」

「私は入った方が好きだけだな」

「……今日の私、聞く相手を間違えまくってる気がする」

「えー」

ふくれっ面でばやく袖をどうなだめようか考えてみるが、あんまりいい案が浮かんでこない。そうこうしているうちに、サクラ風呂のままでやってきていた。なんだから、時間潰しとしてはいいネタだったかも。

「やあ、お二人。今日も仲がいいじゃないか」

二つのテントのうち右側、女風呂入口の横で折りたたみ式のキャンプ椅子に座る長髪の女の人……番頭である涼子さんが、落ち着いた声で私たちを呼ぶ。番頭をずっと務めている割に一年中長袖と長いジーンズの格好で、いつも物憂げな表情をしている変わった人だ。五十歳近い年齢にも関わらず、腰まで伸びる長い髪には白髪一つなく、一本一本が流れるようにさらさらとしている。常に冷静沈着なところといい、古い言い方なら『淑女』と表すのがしっくりくる佇まいだ。初対面時に挨拶したときには何やら苦悩するような表情をしていて、粗相でもしたかなと慌てた私に「この人はいつもこんな感じだ

よ」と袖が教えてくれたつけ。前に理由を尋ねたときは、番頭は暇だから、読んでいる本の内容に表情が左右されるんだと説明していた。本当かどうかは結局分かってない。

「こんばんは。今日の涼子さんはまた一段と憂いてますね」

「ん、この顔のことかい。君たちに心配されるなんて、私もまだまだだな」

私が冗談半分にそう言うと、涼子さんは右手を目元に当てて小さくため息をつく。細長い指が整った顔に沿って伸びて、儂さを帯びた眼差しも相まって、夕闇の中で独特の存在感を放っている。絵に描いたらすごく綺麗だろうな、と感じずにはいられない。そんな涼子さんの膝の上には日に焼けた装丁の文庫本が置いてあった。これが悩みのタネだとしたら、内容が気になる。

「夏目漱石の作品集だよ。さっきまで読んでいたのは、そのうちの『文鳥』だね。籠の中に閉じ込められた小鳥を、好きだった女に重ね合わせて描く作品さ」

私の目線で察したのだろう、私が心で思っていた疑問

を涼子さんが答えてくれた。

「読んだことないですけど、そんなに悲しい作品なんですね」

「いや、内容自体は特にそうでもない。言うなれば……そう、漱石が人を小鳥に重ねたように、私も重ねてしまったんだろうな」

「えっと、何をですか？」

「このコミュニケーション……サクラを、小鳥にね。まあ、何にでも現実と結びつけてしまう私の悪い癖でしかないけれど」

「はあ」

「混乱させてしまったかな。でも大丈夫、若い君たちにはまだ時間と未来が——」

ぼーっと涼子さんの話を聞いていると、突然ぐいと袖に右腕を引かれた。見ると、彼女は苦笑いを浮かべながら、私をテントの入口へ半ば強引に引っ張っていきこうとする、

「りよ、涼子さん！ 今日って、確かお風呂閉まるの早いでしたよね」

「そうだよ。ボイラー用の燃料が厳しくてね、今日は短縮営業——」

「それは大変だ、私たちも早く入らなくちゃ！ というわけでほら、行くよ芽衣」

「分かったから袖、痛いってば」

芋を引っかくかような力強さで引かれた私は慌てて涼子さんに会釈をすると、袖に続いてテントへと入った。中に入っただけで靴を脱ぎ、すのこの足場へと上がる。まだ早いせいか、脱衣所は人もまばらだった。テントの上から下げられた高光度LEDから少し離れた棚で、私たちはてきばきと着替えを済ませる。この場所にした理由は単純で、全体を照らせる強さのLED電灯は明るすぎて眩しいからだ。あと、近くだと直で照らされている感じがしてちょっと恥ずかしい。今どき羞恥心なんてほとんどないようなものとはいええ。

「袖、さっきのは流石に失礼だよ。私も腕痛かったし」

服を脱いだところで、見えるように右腕の付け根をさすって圧力をかけると、袖は露骨にパツが悪そうな顔をした。実際、引きこもりとは思えない力の強さを袖が

持っているせいで、肩に若干の違和感が残っている。

「ごめんって。でもさ、私はシンブルにあの人苦手だつてずつと言ってるでしょ。勿体ぶった話し方とか衛学的なところとかやな感じじゃん。でも存外ああいいうのに男はコロッと騙されちゃうんだよね、知的だの何だの褒めそやすから増長するんだよケツくたばればカチンコ共」

「後半はただの妄想になってない？」

「いーや絶対褒めてる、私はサクラのオッサンらには詳しいんだ。なにせ、もう十年来の付き合いになるからサ……」

「柚は『英生さんとこの子』で可愛がられてただけでしょ」

「う、うっさい」

図星だったのか、柚は顔を赤らめてぷいと顔をそむけると、浴槽の方へと歩いていった。サクラ風呂には、戦時中に製造された巨大な移動式の簡易浴槽が二つ置いてある。湖から組み上げた水がボーラーで温められて、定期的に浴槽へと流し込まれる仕組みだ。濃い青色の厚いシートに覆われているこの浴槽は製造後十数年が経つ年

代物らしいけど、一つあたり同時に十人くらいはゆったり入れるくらいのサイズ感なので伸び伸びできるのがとてもいい。特に今回は時間的にほとんど人がいないので、開放感もひとしおだった。浴槽の手前には鉄むき出しの無骨なシャワーが設置されていて、湯船に浸かる前に体を洗うのがルールになっている。床に置いてある『一回だけ押す』と書かれた容器を軽くプッシュして、出てきたシャンプーを髪の毛に混ぜてしゃしゃこと掻き回す。洗うのが簡単なのも私のようなショートヘアの利点の一つだ。容器の横にある皿から石鹸を取ると、タオルで泡立てて手早く体を洗っていく。ほのかに甘い香りを感じながら、最後にシャワーで全身から泡を流しきった。タオルを絞って折りたたんだところで、柚も体を洗い終えて隣へと戻ってくる。ボサついてた彼女の長い髪の毛は、湯を吸い込んで背中半ばまで艶やかに伸びてきっていた。浴槽は意外と深いので、足場に乗って浴槽の仕切りを乗り越える。柚と一緒に浴槽へ入ると、二人ともほぼ同時にリラクセスした声が出た。

「アア〜、極楽極楽。このご時世、仕事終わりの風呂

だけが万人向けの娯楽だよ」

「お風呂はいいよね。一日の終わりに浸かると、すぐに疲れも吹き飛ばし」

「今はなき日本が残した、最高の文化的な置き土産つてやつですなあ。まあ娯楽という観点で言えば、恋人がいる人間は夜にベッドの上で楽しく――」

「こら、ここでそういう話題はだめ」

「ぐあつ」

下の話を持ち出そうとする柚の頭を軽く叩く。調子に乗るとすぐこういう話題を出そうとするのが柚の悪いクセだ。ぐるりと見渡すと、隣の浴槽に浸かりながら苦笑いする女の人と目が合う。恥ずかしくなって私は小さく頭を下げた。ああ、もう。

「なんだよ、冗談なんだから叩かなくてもいいじゃん！ あーほら今叩かれたせいで体の分子構造が壊れて疲れと一緒に私も溶け出しはじめちゃいました、私が最終的に液体になっても骨だけは拾ってお墓に埋めといてね……できれば父さんも同じ墓に……」

「想像したらホラーな光景だからちゃんと生きて、そし

て顔を沈めない」

ずるずると浴槽の奥に体を滑らせて、口元が湯船につきそうになった柚の両脇を慌てて抱えた。それを待つてから、柚は狙い通りと言わんばかりの満足気な表情でゆつくりとこちらに振り返る。上気した彼女の頬は妙にあざとく感じられて、言葉に詰まった私は、咄嗟にさっきまで話していた内容を掘り返す。

「そういえば、さっき柚も言ってたけど、サクラができてからもう十年なんだっけ。コミュニケーションがなくなってる民してきた私からすれば、ずっと残ってるのは羨ましいな」

「……」

言つてすぐ、これは意地が悪い言葉だったかなと思いつつも既に遅い。柚は悩んでいるのか数秒ほど黙りこんでから、最終的に困ったような笑みを浮かべて答えた。

「芽衣の境遇についてはどう反応していいか分かんないけどさ……やっぱり前のコミュニケーションの方が良かったとか、あるの？」

「……なんだかんだ八年いた場所だし、思うところはあ

るよ。でも、今の私にとってサクラは大事な居場所。だから羨ましいって感じるのと同時に、誇らしくもあるかな。三年しかない身だけだね」

「そっか……うん。でも大丈夫、芽衣もサクラの立派な一員だって！ さあ同志よ、この美しいコミュニケーションを今後も共に発展させていくのではないかつ」

私の返答に安心してか、柚の表情と声色がすぐに元の明るいものへ戻る。変に心配させてしまっただけで申し訳ないことをしたな、と私は心の中で反省した。一方勢いを取り戻した柚は、やや重めの話題を別の角度で切り出してくる。

「にしても、日本や世界が完全崩壊したのが十一年前、サクラができたのが十年前、芽衣が来たのが三年前と考えると、怒濤の勢いだと思わない？」

「それもそうだし、完全崩壊っていうのも改めて考えると凄まじいというか。私たちは子供の頃からそういう世界だったけど、英生さんとかの話を聞くといろいろあったみたいだし」

「『第三次世界大戦、核爆弾に化学兵器の使用、大量殺戮

に国家と世界秩序の崩壊……文字通り世界が終わった後に俺たちは生きてるんだぞ、ロマンあるだろ』って昔は父さんが子守唄代わりによく聞かせてくれてたような」

「それは教育としてどうなんだろう」

「おかげで今の私がいるんだから大成功でしょ」

「さすが、自己肯定力がすごい」

上機嫌の英生さんが適当にアレコレ話す隣で、布団に寝転がった幼い柚が楽しそうにそれを聞いている光景が脳裏に浮かぶ。今とさほど変わらない親子仲を想像して一人で笑う私を、柚は若干怪訝な目つきで眺めていた。

「フッ、ごめん。でも『東京』とかは一度でいいから行ってみたかったな。もうなくなっちゃったらしいけど」

前のコミュニケーションで教わった東京という場所を思い出して、ぼんやりと呟く。戦時中に攻撃を受けて焦土になったという話だけど、戦前は建物が立ち並び人がひしめくすごい場所だったらしい。東京出身のおじいさんが寂しそうにそう話してくれたのが印象的で、ずっと記憶に残っていた。

「東京ねえ……人と人の繋がり薄い場所だったって父さんは言ってたけどさ。サクラ暮らしが長すぎて、そう言われても全然想像できないんだよね」

「東京だけで一千万人以上いたらしいから、お互いのことなんか気にしてられなかったんじゃない？　そこまで人が多いと薄情になっちゃうのも分かる」

「サクラが千人くらいだから、みんな優しいのも当然っちゃ当然か」

「会えбаだいたい顔見知りというか、半ば家族みたいな感じだしね」

「ホント、こんな身内感漂う場所で薄情な接し方したら次の日怖くて出歩けなくなるっての」

「ということとは、もしかして柚が引きこもりがちなのって——」

「いや私はただ面倒がつてるだけだから。それに私はまだ一応子供だし、周りの目もそんなに厳しくないっていうか。決して怖い人がいるとかそういうわけでは」

微妙に心当たりがあるのか、柚は自己弁護混じりの煮えきらない返事をする。調子者のことだから、きつと誰

かに叱られたとかそんなところだろうか。彼女にとって怖い人は誰なのか気になる。

「あー、でも今の私たちにとって薄情といえぱ」

そうやってあれこれ柚のことを想像していると、彼女は唐突に、

「東京なんかより、真っ先にモミジが頭に浮かぶな」

「……」

忌々しげな表情で、モミジのことをそう吐き捨てる。

雰囲気が一気に変質して、温かいはずの湯船が一気に冷え切ったようにすら感じられた。離れてしまった心理的な距離をもう一度縮めようと、相槌がてら柚の会話に乗ってみることにした。

「追い出されたんだよね、サクラの人たち」

「そうだよ……っていうか芽衣にも何度か話してるでしょ？　サクラの人間が、非効率って言われてモミジから追い出された話」

「あ、うん」

怪訝な顔をした柚に私はやや慌てて頷き返す。ただの相槌のつもりが変に刺さってしまったらしい。もちろん

ん、サクラの歴史はサクラに来てから何度も教えてもらっていた。

大まかな流れは、確かこうだ。秘密裏に新型兵器を開発する目的で、戦前の政府が工学の研究者や技術者をこの地域へ集めた。しかし、設備を整え、開発が開始されてまもなく大戦が始まってしまふ。それから数年で核弾頭により東京や主要都市が消滅し政府も崩壊。その後、残っていた人たちが立ち上げたのがモミジだった。最初は平和だったものの、物資の貯蓄が底をつき生活が厳しくなると、扱いづらく、情報系の人間との対立が勃発。結局、情報系の人らは『資源不足な状態でも一定の能力を発揮できる他系と違って、電力を食うマシンやシステムがなければ意味のない非効率なやつらだ』と烙印を押され、追い出されてしまふ。その方針を推し進めたのが、モミジのエンジニア中最年少で機械系を牽引していた天才設計者——現モミジ代表の准という人らしい。

「ひどい話だと思う。それでも、モミジはその時からインフラとか物資の提供をし続けてくれてるのは驚くべきだ」

「あくまで最低限だよ。それを盾に、モミジが作ってる機械類のプログラムとか手伝わされてる。私や父さんもそれが仕事で忙しいし、土地も人も農業に適してるわけじゃないから自給自足も難しい」

「……」

「もちろん、向こうだってその点は同じで農業とかが得意なわけじゃない。でも、向こうには引き継いだ軍用施設があるし、そこで機械を製造、輸出することで食料や資源の獲得がかなりできてるって話だよ。そのくせ、その製品の中身を書かせたこっちは資源を渋ってる」

「ズルい」

「そう、今のモミジはまさしくズルの塊！ サクラがみんないい人なのになんでモミジがクソ野郎だらけなのかは今世紀最大の謎でさあ。まあサクラにも涼子さんみたいな変わり者はいるけど別に悪い人じゃないし、情報系にいい人が多すぎたのかも。ただ、父さんは……もともと情報系ではないけど」

柚は途中でまくしたてるように話してから、英生さんのところになって急に尻すばみになる。一家の過去に

ついで触れそうになると、いつも柚はこんな感じに言い淀んでいた。三年間過ごしても未だに細かいことが聞けていないのが、私がこの話題で疎外感を感じる要因の一つであることは間違いない。そう考えると、この話の流れはチャンスかもしれない。今なら、ようやく聞き出せるかも。

「結局、英生さんには何があったの？ サクラとモミジの関係は知ってるけど、二人にはまた別の事情があるんだよね。三年間知らないままだな、私」

「う……」

柚の目が泳いでいる。立ち上る湯気越しに、彼女が必死に思考を巡らせているのがありありと伝わってきた。これは押せばいけそう。そうだ、こういうときに効く言葉は……

「芽衣、自分で言い出しといて何だけどさ……辛気臭い話は終わりにしない？ モミジは単に裏切り者の悪いやつで、サクラの天敵。それでオシマイ……ってことで、ね」

私が切り出すよりも先に、柚がにへらとした表情で私

へそう告げる。その柚の目を見たとき、

ああ、私は人として最低なことをしたんだと悟った。

「ごめん。聞いちゃいけないことだった」

「うう、芽衣を除け者にしたいわけじゃないってことだけは全力で伝わって欲しいんですが……！ でも、でもね、この話は……あんまりしたくないんだよ。やっぱり、思い出すだけでも辛いからさ」

「……」

「だから、私や父さんも芽衣の過去のことを詳しく聞くつもりはないよ。芽衣はヒマワリってコミューンが潰れたからこっちにやってきて、私たちと気が合った。私はそれだけ知ってれば十分。何せ、こんな世の中だもんね」

私は柚から顔をそらすように俯いて、湯船に映る歪んだ自分を眺める。その通りだった。私だって過去を全部話せているわけではないのに、こっちだけ過去を知りたいなんて……なんておこがましいんだろう。

そう理性が反省する一方で、でもやっぱり、柚を深く知りたいという思いも捨てきれない。私は頬を両手で叩

いて、勢いよく湯船から立ち上がる。

「のぼせちゃった。袖も上がらない?」

「うん、出よっかな」

「じゃあ今日だけは、特別に体を拭いてあげます」

「私は五歳児かよ……でもまあ、苦しいうない」

自分の醜態な部分をごまかすように、わざと明るく振る舞う。自覚はある。しっかりした子、優等生、母親みたい。昔からそう言われがちだった私の中にはきつと、誰にも見せられないほど酷く濁りきった何かが詰まっている。私はそれがどうしようもなく嫌いだから……偽物の優しさで、自分を包み隠して生きているのだと思う。

＊

「袖は髪を乾かした方がいいよ。ほったらかしにするからボサボサになるんじゃないの」

「やだよめんどくさいし、誰に見せるわけでもないんだからさ。それに私にとっては、サクラ全体が家みたいなもののさ……」

「だったらここらへん裸で歩き回れる?」

「なんで私が裸族の設定なんだよ」

着替え終えて外に出ると、日がすっかり落ちきっていた。テントの入口や道路のところどころに配置されたLED照明が、暗闇の中で燃えるように明るく光っている。

「あれ、涼子さんがいない。私的にはラッキーだけど、あの人がサボるなんて珍しいこともあるもんだねえ」

そう袖が言ったのを聞いて、テント横の椅子を見る。確かに、少し前までそこにいたはずの彼女の姿が消えていた。風呂はまだ営業を続けているはずだから、勝手にどこかに行くなんてことはなさそうなのに……

「待って。なんか騒がしくない?」

「……ホントだ。つか、今誰か叫んだよね」

袖の返事とほぼ同時に、男が何かを叫んだような声が聞こえた。耳を澄ますと、確かに複数人の話し声がする。しかも数人とかではなく、これはもっと人数が多いような……

「近くで人が集まるって言ったら……方角的にも、広場しかない。行こう芽衣、多分これ普通の騒ぎじゃな

いよ」

表情を強張らせた柚に頷いて返すと、私は彼女の手を取って広場へと走る。暗がりの中、ポツポツと光るLEDを頼りに広場へと向かった。近づくにつれて段々と声が大きくなってくる。あと十数メートルまで近づいたところで、状況がはっきりと分かった。広場には移動式のLED照明がいくつか持ち込まれて設置されており、それらが照らす先、空間の中心に人だかりができている。人数は男女合わせて三十人くらいはいそうだ。彼らは相当興奮しているようで、大きな声で罵るような言葉を次々に口にしていった。

「クソッ、クソがつ、ふっざけんじゃねえ!!」

「モミジのゴミ共ッ! こっちが下手に出てりゃあ、俺たちをとことんコケにしやがつて——」

モミジ、という言葉聞いて肌が粟立つ。サクラ風呂での柚との会話を思い出し、一度深呼吸をする。同じ間違いはすまいと心の中で決意して再度辺りを見渡すと、集団から少し離れた場所に涼子さんが佇んでいるのが見えた。

「涼子さん! これは一体どういうことですか?」

「なんだ、君たちまで来たのか」

私が声をかけると、涼子さんは目を大きくして驚いた顔で私たちを見る。

「見ての通り、楽しい集まりでないのは自明だろう。それに、芽衣にはあまり馴染みのない話かもしれない」

「……モミジとサクラの話なんですよね」

「ああ。だが今回は……一言で言えば、十年前の話の掘り返しみたいなものでな」

「十年前っていうと、サクラが出来たときの話ですか」

涼子さんは黙って頷くと、何やら呆れたように小さくため息をついた。私はますます混乱する。確かにサクラの人たちはモミジをよく思っていないだろうけど、そんな昔のことではいきなりこんな騒ぎになるとは思えない。結局、何があったんだろう。

「まあ、細かい話は私から話すよりも……ほら、噂をすれば適任がやってきたようだ」

涼子さんが広場の端を指さす。その先を追うと、広場にいる人よりも一回り若そうな二人組の男女が小走りで

集団へと近づいていくのが見えた。男の人はボブヘアでベージュのTシャツに黒の短パン、女の人は坊主に近い短髪で全身グレーのパジャマみたいな薄着を着ていた。サクラにおいて、この対照的な二人組といえば誰もが知っている。そう、この二人こそ——このコミュニティの代表、梓さんと和葉さんだからだ。梓さんが比較的冷静なのに対し、和葉さんは場を乱すのが好きな性格で、髪型や服装にもそれらが表れている。二人がコミュニケーションになった理由は正直分かっていないけれど、ただ、肝心なときに息がピッタリ合うペアだということは周知の事実だった。

「何事だ！ おい、落ち着け」

「ああ、待ってましたよ！ みんな、やっと二人が来たぞ！」

男の方が集団に割り込んでいくと、集団から歓声が上がるのが聞こえる。涼子さんはそれを遠目に眺めながら、珍しく面白そうに笑っていた。

「我らがサクラの長のお出ました。騒ぎも落ち着くだろうし、私は仕事に戻ろうかな。サボりで目をつけられた

りしたら大変だ」

私たちに背を向けて風呂のテントの方へと戻っていいとする。が、途中でふと立ち止まると、

「二人もあそこに混じって話を聞いてくるといい。カリスマがいれば暴動は絶対に起こらないし、特に柚は、事情を聞きたくてたまらないようだからね」

「うっ、なぜバレた……」

「フッフ。それじゃ二人とも、いい夜を」

最後にキザなセリフだけを言い残して、涼子さんは今度こそ夜の暗がりへと消えていった。私と柚はお互いに目を見合わせて、どうするかを小声で話しあう。結局すぐに結論は出て、二人で集団へと近づくことにした。涼子さんが言うように柚は話の内容にすごく興味がありそうだったし、私もサクラの一員として騒ぎの理由を知りたかったのだ。

「いいから落ち着いてくれ。おいそこ、どさくさに紛れて服を脱ごうとするな」

「ねえ、興奮していると脳卒中になるリスクも上がるらしいよ。もう歳なんだから、みんな静かにしてくれるか

な。あるいは、服を引き裂いてあげる」

「和葉も余計なことは言うな、ややこしくなるだろ」

「でもさ梓。人って、脅せば言うこと聞いてくれるんだよ……？」

「革命で殺される独裁者みたいなことを言うんじゃない」

梓さんと和葉さんの二人が、お互いにじゃれ合いながら騒いでいた集団をなだめにかかる。二人の独特な語り口もあるが、もとより周囲からの信頼がとても厚い。燃え上がっていた炎が水を注がれて鎮火するように、たちまち集団は落ち着きを取り戻していった。

「やれやれ……で、この騒ぎの原因は一体誰なんだ」

人々が静まったタイミングで、梓さんが呼びかける。

すると集団の中から、襟の付いた白いワイシャツに黒のストラックスを着た天然パーマの男の人が歩いて出てきた。今どき戦前の整った服装をする人間は珍しい。が、そう、い、う、役、職、なら話は別だ。

「そりゃ多分俺だな、兄、妹。実はコトが起きてからすぐ二人に伝えに行こうと思ったんだが、つい口を滑らせち

まってよ」

「……孝介、お前の渉外力が高いのは助かってるが、脇が甘いのは外交担当者として致命的だぞ」

「わりいわりい、いやー、俺も歳かねえ」

サクラの顔——外交・渉外役の孝介さんがヘラヘラとごまかすように笑う。一見すると単なるお調子者のように見えるこの人は、その実すこぶるやり手の交渉人らしい。私もサクラへ正式に入るときに話したことがあるけれど、とても話がうまく段取り上手だったのを覚えている。私がサクラで不当な扱いを受けないよう、孝介さんが住人へ事前に根回しや共有をしてくれたというのも、入って数ヶ月後に涼子さんから聞いたんだっけ。単に最初から周りがみんな優しく接してくれていると思っただけに、影で調整に動いてくれていた人がいたと知ったときは、自分を恥じると同時に一生足を向けて寝られないと思うほどに嬉しかった。

そんな孝介さんがこの騒ぎを起こした原因ということに、私は若干モヤモヤとする。説得が得意なこの人がこんな風に話を大事にするなんて……いや違う、逆にこれ

を狙ったのだとしたら。

「でもなあ、お二人さん。今回に限っては隠してもしょうがねえんだよ。むしろ、これはサクラ全員が知るべき重要なことなんだ。話さずにはいられねえって」

「つまり意図的か。俺と和葉が黙って事を進めないよう、ここまで騒ぎを大きくしたわけだ」

「何のことやら。俺は二人のこと信頼してんだぜ？ まあ、やや合理的すぎる面はあるけどな」

「……忠告は受け取っておく。改めてになるが、何があったか聞かせてくれ」

「よし」

やはり、この状況も孝介さんが思い描いていた通りのものだったらしい。よく分からないけど、サクラのトップ二人への牽制だったのかな。孝介さんは満足げに指をパチンと鳴らすと、表情を真剣なものに一転させて、ようやく真相を話し始めた。

「単刀直入に言おう。つい先程、モミジ側から直々に申し入れがあった。『サクラをモミジに再併合する準備ができた』だそうだ」

その言葉を聞いて、隣で柚が息を飲む音がした。固い表情で孝介さんが話を続ける。

「向こうの言い分としては『交易拡大と製品技術向上のため、緊密かつ対等な関係になりたい』ってことで、サクラの情報技術全体の買収が目的だろう。昔風に言うんならエムアンドエーってやつだな。待遇の改善について、交渉の場を設けているとまで言ってきた」

「……」

「ただ同時に、はっきり言われたことが一つ——『モミジは、十年前の約束を果たすためにここまでやってきた。断るなら、今後の関係については見直さざるを得ない』だそうだ」

「つまり？」

「現状のサクラが、必需品輸入のおよそ六割をモミジに頼らざるを得ない状況ということを踏まえれば……割と直接的な脅迫だな」

既に聞いていた話だからだろう、集団は静まりかえっている。梓と和葉の二人も腕を組んで話の整理と思考を巡らせているようだ。隣の柚は唇を引き結び、拳を握り

ながら小刻みに震えている。

「フッ、足元を見られているとみて間違いないのかなー、これは」

最初に沈黙を破ったのは和葉さんだった。不敵な笑みを浮かべながら、どこか楽しげにそう口火を切る。全身グレーという格好も相まって、まるで悪役みたいな存在感を放っていた。

「元はいえばあっちが始めたことじゃん。今も向こうの製品に載せる制御用プログラムの大半はこっちが書いてるのに、得られている資源は浅い」

「だが、モミジがなければサクラは生きていけない。こちらの人数、技能、設備に限りがあるのは事実だ」

「水道・燃料・電気……インフラさえモミジの設備や技師を借りなきゃ維持できない。そういう意味ではありがたい存在だけだ」

「だからこそ思惑通りに動かされているというのが正確だろう。俺たちは対価として労働力を差し出すよう仕向けられているわけだ」

好戦的な意見を和葉さんが述べると、対する梓さんが

厭戦的に半ば擁護のような意見を出す。その逆もしかり。これが続けて代表同士で意見を出し合い結論を導く――

ディベートのような意思決定をサクラが採用しているからこそ、代表が二人存在する必要があるんだと聞いたことがあった。こうして実際の場面を見るのは始めてだけど、二人には迫力が感じられる。カリスマ、と涼子さんが言った意味が少し分かった気がした。

「現状で人員・設備・資源供給を増やすのは困難。だから従うしかない……なんて、あまりに既定路線すぎるね」

「抵抗ゼロとなると今後に支障が出そうだ。いつそストライキでも起こせば、向こうの敷いたレールからは外れられるかもしれないが」

「でも、サクラの強みは情報系技術だよ。資源も少ない現状でストを起こしたところで、持続性は絶望的じゃないかな」

「同感だ。しかもその場合、住人にとっての最善手は……」

「あー、寝返る人が出るのも向こうの計算に入ってい

ると」

「^{あいつ}准なら当然、そのための案も練ってるだろう。そうして分裂が起きたら、最悪だ」

「くーっ、こりゃ参ったねえ」

頭を掻きながらぼやく和葉さんと腕を組みながら静かに策を練っている梓さん。二人に対して群衆の中から女の人が一人、手を挙げてこう尋ねた。

「併合によって資源へのアクセスが増えるなら、悪い話じゃないんじゃない？ 下手に突っかかるよりは併合を認めた方が得なんじゃ」

「そりゃ、今は、そうかもね」

彼女の質問に対し、和葉が小さく笑いながら回答する。

「でもさ、十年前に私たちが何をされたのかを思い出してみなよ」

「それは……」

「当時は情報系技術の価値がなかったから、私たちは切り捨てられた。今のモミジは製品の高度化のために情報系技術が欲しいから、私たちを併合しようとしている。

あっちからすれば人ではなく技術が問題だっていうの

は一貫してるわけさ。だからサクラと『緊密な関係』になった現モミジが望んでいた技術を手に入れてしまえば、私たちは用済みになりかねない。素直に信用できない相手だっていうのはみんな分かっているはずで、だからこそ、こちら側に有効な武器がないのが問題なんだ」

和葉に論破された女の人は、残念そうにうなだれて黙ってしまった。梓さんも特に反論がないのか、腕を組んだまま考え込んでいる。情報を整理すればするほど、見えてくるのは現在のサクラの窮状だ。十分な資源はなく、モミジに対する立場は弱い。別のコミュニケーションにパイプがあるわけでもない。しかしこのまま無抵抗に併合を認めてしまえば、有事に至る可能性も否定できない。情報技術が要のサクラから技術が抜かれたら、もはや滅ぶだけ。戦うにしても肝心の武器が見つからない。

私は怒りや焦り、諦めを浮かべる人々を眺めながら、三年前のこと——かつて私が住んでいたコミュニティの最期を思い出していた。追い詰められて最悪の手段を選んだ結果、人が死んで、どうしようもなくなって……最後に残ったのは、死んだ人の血と骨だけ。

あの時私は悟った。人と人が繋がり合う原始的な世界で、力のないコミュニケーションは遅かれ早かれ同じ道をたどる。優しさだけで生きていくことはできない。今の私たちに必要なのは、敵と戦うための、誰かを守るための、生き抜くための——力。

「ねえ、芽衣。私たちは、どんな形であれ戦うべき？ たとえ負ける可能性があったとしても」

だから、柚が小さな声で私にそう問いかけてきたとき、「サクラの政治とか未来とか、そういうことは分からない。でも、大事な居場所を失う悲しみ……何かを奪われる悔しさを、私は——これ以上、誰にも経験してほしくないって思う」

「……」

「そのためには……『勝つ』しかないよ」

「——その言葉を待ってた！」

はつきり答えを言い切った私に、柚は満足げに頷く。

そのまま背後を振り返り、勢いよく広場の入口の方へ走っていった、

「だってさ！　ねえ、どうせそこら辺で聞いてんで

しょ！」

彼女は、広場の外に向かって大声で叫ぶ。周囲の人は呆気にとられているが、柚は至って本気のようなのだ。

まるで、そこに誰かがいると確信しているかのように

「十年の結晶……今こそ、アレを使うときだよね!？」

「——ああ、そうなんだろうな」

柚の必死の呼びかけに、男の人の声が答える。外の暗闇から足音がしたかと思うと、誰かがゆっくりとこちらへ歩いてくるのが見えた。そのシルエットはそのまま広場に足を踏み入れ、中央へと歩みを進める。そして——

「……どうしたんです、英生さん」

人々がざわつく中に現れたのは、紺色の作業着姿で、凄みを感じるほどに真剣な表情をした英生さんだった。

「梓、なんだその目は。まるで俺の気が狂ったとも言いたげだな」

「あなたの過去と実力を知っているがゆえにね。今回の件で義憤に燃えて暴走するんじゃないかって、正直ヒヤヒヤしてるんですよ。モミジに対する英生さんは、まる

で鬼だ」

「言ってくれるじゃねえか、若造」

「恐縮ですが、事実でしょう」

英生さんが現れるや否や、梓さんと火花を散らすような睨み合いが始まった。見る限り、過去にひと悶着あったらしい。言葉遣いからして敵対しているわけではなさそうに聞こえるけど、良好というわけでもなさそうだった。ひとしきり二人がお互いに牽制し合ったところで、英生さんがわざとらしく息を吐き出す。

「まあいいさ、今日は喧嘩をしにきたわけじゃない。だが、甘く見てもらっちゃ困るな。俺とてこの十年、ただモミジを憎悪してきたわけじゃない。相手を冷静に評価して、ひたすらを刃を研いできたんだ。なあ、柚」

呼ばれた柚が英生さんの隣に立つ。父親の迫力に負けないくらい、柚も自信に満ちて凛とした表情をしている。

「父さん、ついにア、レを使うときが来たんだね」

「その通りだ、我が娘よ」

「ハハハハハッ」

「クククククッ」

「……この親子は相変わらず訳がわからないな」

親子で悪役みたいに噛み殺した笑い方を始めた二人を、やれやれと冷めた目で和葉さんが観察している。

「二人に確認しておくけど、結局物騒な話になってないよね？ 英生さんは機械系の優秀な技術者って知ってるからこそ怖いんだよ、『家でミサイル作ってました』とか言われたら洒落にならないから」

眉間に皺を寄せながら、和葉さんが英生さんに詰問する。態度が厳しいあたり、本気でその可能性を心配しているようだ。そしてもちろん、和葉さんがここまで武力について過敏になっているのには理由がある。

「コミュニケーション協定……ただでさえ人口が減った人類と、第三次大戦の文字通り破滅的な破壊から反省を得て、コミュニケーションに設けられた数少ないルール。そのうちの一つに『専守防衛を除くあらゆる戦争の禁止』が入ってる。少なくとも日本列島では有効だし、反したら即刻全コミュニケーションから制裁だよ。交易、移民全拒否となれば、全滅間違いない」

サクラやモミジなどのコミュニケーション同士は『コミュニケーション協定』というルールを介して複雑に絡み合っている。資源や技術などの力がなければやっていけない一方で、武力や暴力を行使すればたちまち制裁……他のコミュニケーションからあらゆる面で相手にされなくなる仕組みだ。これのおかげで、特定のコミュニケーションが一気に勢力を拡大することを防いでいる。逆に言えば、武力や技術以外を握っているコミュニケーションは、合法的に立場が強いということだ

「一応言っておくと、私たちが喧嘩を売ってはいけない相手は決してモミジじゃない。モミジは所詮取引先に過ぎないし、彼らだって資源の面では仲介者でしかないからね。だけど、資源を生産するコミュニケーションには絶対に喧嘩を売っちゃいけない。それはつまり、私たちの隣にあるもう一つのコミュニケーション……一次産業を握る巨大な帝国『ツバキ』だ」

ツバキといえば、この周辺地域で最も大きなコミュニケーションだ、モミジから渡ってくる資源の多くを輸出している大元で、生活苦から武装蜂起しようとした『ヒマワリ』

を制裁で潰したこともある。協定に逆らえば、息の根を止められるのは間違いない。

私は、ツバキのことならよく知っている。この時代において、資源を握るコミュニケーションがどれだけ強く、恐ろしいかを知っている。だって——生活苦から略奪を画策して制裁された愚かな『ヒマワリ』こそ、私の故郷だったから。

「んなこと知ってるさ。だからミサイルみたいな破壊兵器はありえんし、そもそも作るだけの資源もねえよ」

「だったら——」

やや苛立った口調で英生さんが反論したのに対して、ますます分からないという顔で和葉さんが更に問いただそうとする。英生さんは片手でそれを静止すると、一つ咳払いをして逆に問いかける。

「ここでヒントだ。今の協定……戦争禁止の話において、重要な例外がすっぱ抜けたのは気づいてるか？」

「……まさか、『決闘』するつもり？」

「そうだ」

驚いて訊き返した和葉さんに、英生さんが堂々と頷く。

「『両コミュニケーションから代表を一名のみ選出し、第三者監視のもとで事前合意した対決の実施については認める』って決まりがある。つまり戦争は禁止だが、一対一のタイマンなら合法だ。さらに、結果に対する合意内容の履行義務もある」

「いや、でも正気？ 仮にそれができるとして……モミジが乗るとは思えないよ。あっちの方が現状有利なんだ、わざわざ自分らが不利になるかもしれない決闘なんとするわけない」

「だから相手の得意分野で挑むのさ。こっちが負けたら相手の要求を追加で呑むって条件付きにすりゃ、高を括って乗ってくる可能性は十分ある。幸い、こっちには交渉のプロもいるしな」

そう言って英生さんが孝介さんに目配せすると、彼はまだ対応を考えあぐねているのか苦笑いでお茶を濁した。大胆すぎる発想に困惑している和葉さんの隣で、真剣な面持ちの梓さんが改めて問いかける。

「さて英生さん、改めてお訊かせ願えますか。具体的に……あなたは、一体何を作ったんだ？」

「クク、それはな」

英生さんはニヤリと笑みを浮かべると、一際大きな声ではっきりと答えた。

「戦時中に俺が国からこの地域に呼ばれた理由であり、旧モミジで開発主任をやっていた俺の専門分野。すなわち——強化^{バワードスーツ}外骨格だよ」

第二章

翌日の朝から、サクラ代表の梓さんと和葉さんが実際にバワードスーツの視察をすることになった。まだ未完成とはいえ完成の目星はほぼついているそうで、四人で開発の状況と装備などを確認の上、モミジに打診するかを代表が決めるらしい。英生さんと柚はアパート横にある倉庫……もとい、秘密研究所に昨日の夜から籠りっぱなしで、見学が終わるまではこっちに帰ってこないはず。倉庫は頑丈な作りで、入口には鍵がかかっているから勝手に見に行くこともできない。今日は風がよく吹いていて、窓辺の風鈴が涼しげな音を鳴り響かせている。ポジティブに考えるなら、私一人だけが風鈴の音色を独

占できるわけだ。なんて寂しい話だろう。一人分の洗い物を流し台に残したまま、冷蔵庫に入れてあったポットから昨日のアイスコーヒーの残りをグラスに入れて、私はリビングのソファに座った。冷えたコーヒーを口に含むと、ささくれだった心が少し落ち着くような気がする。

英生さんの演説を聞いたせいで、私は全く寝付けなかった。一緒に過ごしていても戦闘用のスーツなんて見たことがなかったし、英生さんも袖も、過去が絡むと本当に秘密主義者になってしまふんだなとショックだった。でも、それ以上に気になったのはスーツの装備で……もしかして刃物とか銃器が付いているんじゃないかと考えるだけで、心臓がバクバクとした。あればそりゃ強いだろうけど、それは明確に人を殺めるための武器だ。面白くて優しい英生さんにお調子者の袖が、裏でそれらを作っていたとしたら……私は、以前と同じように二人へ接せるだろうか。

「情報公開は製作に関わっていた俺と袖、そして代表二人に留めたい。どんな形であれ兵器だし、未完成の状態

で無闇に見せるわけにはいかない」

どうしても気になった私は、帰宅してすぐ倉庫へ向かうとした英生さんに、私にもスーツを見せてもらえないかを頼んでみた。でも返ってきたのはいつになくはつきりとした拒絶の言葉で、驚きと同時に怒りを感じた私は咄嗟に口答えしてしまった。

「それって、私を信用してないってことですか」

「違う。新型兵器の存在にモミジが気づいたとしたら、アイツらは情報入手のために何らかの工作を仕掛けてくるかもしれない。その時狙われるのは、当然兵器を詳しく知っている人間だろ。開発者の俺や袖を除いて、詳細を知るべきなのは決定権を持つ代表二人くらいだ。芽衣にまでリスクを広げたくはない」

「じゃあ、口頭でいいです。どういう装備なのかとか」
「」

「教えたら見せるのと変わらんだらう、勘弁してくれ」
「……一緒に暮らしてる仲ですよね。昨日だって、私のことを対等って言ってくれたじゃないですか」

「その気持ちは今でも変わってない。だけどよ……芽

衣、分かってくれ。これは決闘と名が付いた戦争であると同時に、俺と柚の、十年越しの復讐でもあるんだ。この戦いにはお前を巻き込めない。それに、芽衣が望むなら……別の部屋や家に移動できないか代表に掛け合ってもいい。それくらい危ない橋なんだ」

苦い顔と声でそう話す英生さんは嘘を言っているように見えなくて、私は「部屋の移動はしたくないです」としか言葉を返せなかった。柚も昨日の夜から私といくつか短い会話をしただけで、それ以外、二人はずっと倉庫で過ごしているらしい。柚は今までも倉庫に何度か行っていたけど、日常生活より優先することはなかった。でも今は、二人とも朝の当番や食事すら忘れて、自分たちのスーツにかかりきりのようだった。

ああ、また私だけが取り残されている。ヒマワリのとさもそうだった。

いっそ、英生さんが私にもっと敵対的だったらなと思う。そうすれば、怒りに任せて無理矢理にでも倉庫を襲撃、直訴してやろうという気が起きただろうに。でも、私の問いかけに答えた英生さんは……私のことを、

ちゃんと考えてくれているように思ってしまったのだ。

それに、私が言われたことは正しい。今までの悪行から察するに、モミジは多少強引な手を使ってくる可能性がある。流石に直接武力行使されることはないはずだけど、関係者が嫌がらせを受けるとかはあり得そうだった。だから私を部外者だとアピールするのは、私にとってもいいことのはずなのだ。だからといって、納得できるかと言われたら……納得できない。だからモヤモヤとイライラが混じって、おそらく人間として一番不快な心理状態になっている。気分も安定しないし、まさに最悪の気分だ。ふと時計を見ると、時間はいつの間にか昼過ぎになっていた。梓さんたちはともかく、二人とも夜から籠りっぱなしで大丈夫だろうか。お腹は絶対に空かせていそうだし、食べやすいご飯とか作っておかないと……

「……やつぱり、別の部屋へ移った方が良かったかな」

なんだかんだ二人が帰ってくるのを心待ちにしている自分に対して、若干の嫌悪感を覚える。ちゃんと拗ねないとますます舐められると意識する一方で、疲れて帰っ

てきた柚や英生さんが笑ってくれるところを見たいという気持ちもあって、ドロドロの感情が固まらないまま胸のあたりで渦巻き続けていた。私も柚みたいにはつきりした性格だったら苦労しないんだろうな。

でも結局、私は勢い良く立ち上がって台所に向き合った。流しに放置していた洗い物を片付けて、冷蔵庫の中身を確認して、作れそうな献立を考えはじめる。このまま座っていても死にたくなるだけだし、とにかく手を動かしていたかった……というのはきつと建前だし、私の甘さの表れだって分かっていても。それでもやっぱり、私は二人が好きだから。そう改めて思い直して、私はまな板を掴んだ。

包丁がまな板と触れる音に、風鈴が鳴る音。アパートの別の部屋から微かに聞こえる、穏やかな女の人の声。足りない二つの音もそのうち戻ってくると考えれば、たったそれだけのことじゃないかと思えてきた。

それから二時間ほど経って空が橙に染まり始めた頃、紺の作業着を着た二人がようやく帰ってきた。梓さんと和葉さんを説得するためにかなり無理をしたのだろう、

予想以上にひどく消耗した様子の二人に、思わず私はため息をつく。柚の髪はいつにも増してボサボサな上に、疲れた目元には仮眠でできたらしい目やにが付いたままだ。英生さんはいかにもウンザリという顔と疲労困憊のオーラを出していて、代表と実現可能性について何時間も激論を交わしたんだろうということが如実に伝わってきていた。玄関から部屋に上がってきた二人の前に私は立ちふさがると、まずは温和に問いかける。

「私、今とっても怒ってるんですよ。どうしてか分かります？ はい柚、答えて」

「あゝ芽衣ごめんよう……私が、私を当番をすっぱかしたからだよね」

「違う！」

「エッ」

柚が猫背になって目をこすりながら答えたのに対し、私は鋭く否定した。シャウトに驚いて、柚の背筋が一気にピンと縦に戻る。英生さんもその隣でビクリと震えていた。

「今日の当番のことはいいの。非常事態で、大事な議論

をしないといけなかったのは分かってるから」

「いつの間にか許されてた」

「ちなみに許してない、あくまで延期。明日やらなかったら二度と口をきかないからね」

「ですよー」

「とにかく、私が今怒ってるのはそこじゃない。柚の……というか、二人のだらしない格好と生活！」

私は二人の皺だらけの作業着をビシッと指差してそう言い切った。正直、疲れ果てた二人を見た時点で怒りはなくなっていたものの、ここばかりは心を鬼にしなければいけないという義務感だけで何とか乗り切る。

「いくらサクラのためだからって、そんな風に無理しても意味ないでしょ。ご飯もろくに食わず、睡眠もどうせとってないだろうし。体調を悪化させて回らない頭で代表を説得しようとするから、英生さんも死にかけてカエルみたいな姿になるんですよ」

「珍しい例えだな、『蛇に睨まれたカエル』なら諺として存在するが——」

「口答えは禁止です」

「はい……」

「一万歩くらい譲って、私を疎外してスーツの開発や決闘の話を進めるのは許します。私のことを考えてくれているのは分かるので。でも」

柚と英生さんがしゅんとしたところで、少しだけ口調を緩めて続ける。

「でも、そのせいで二人がこんな風にめちゃくちゃな生活になるのは許しません。まだスーツも完成してないのに、無理して体調壊して続行不可能になったらどうするんですか？ 二人だけじゃない、サクラ全員を巻き込むんですよ」

「……おっしゃるとおりで」

「だから、モミジとの対決云々の前にまず私と約束してください。決闘があろうがなかろうが、今後無理せず規則正しい生活すること。食事と睡眠は欠かさないこと。そして——」

私は一旦言葉を切ると、ようやく表情を緩めて、最後の一言を呟くように言った。

「私をこうやってずっと放置するのは、これで最後にす

ること。せめて食事くらいは三人で食べましょう。いいですか？」

それを聞いた二人は、徐々に表情へ明るさを取り戻して、

「……芽衣、ごめんね」

「悪かった」

最後にはきちんと、私が求めていた謝罪をしてくれた。それだけで満たされてしまった私は、やっぱり、二人に甘すぎる。

＊

食卓には、体にいいものを並べられるように努めた。

残っていたそこそこ貴重な豚肉と、緑黄色野菜をふんだんに使ったサラダを真ん中の大皿に。畑で採れた大根を使ったしめじのスープと、賞味期限ギリギリのサバ缶のみぞれ煮、炊きたての白米はそれぞれ一つずつ。本当はアジとかアユみたいな魚料理にもしたかったけど、不漁という話で最近はめっきりみかけないのが残念だった。

「うー、どれも美味しそうだし、全部の料理から健康を

考えてくれていている芽衣の優しさが感じられる……！私、芽衣の子でよかったよう」

「違うでしょ」

「いやいやそんなことないって、私だったらご飯なんか作ろうと思わない上に家事全部バックレる状況だから。くーっ、尊い。尊すぎるのでこれからは芽衣ママと呼ばせてください！」

「……少なくとも外では絶対呼ばないですよ」

「まさかの手応えありだこれ……!？」

並んだ料理に柚が感涙しそうになっているのを見て、ああ、作って良かったなとホッとする。柚は反応が分かりやすいので嬉しい。ママ呼びだけはやめてほしいけど。

「じゃあ芽衣、俺も——」

「あ？ どう考えてもダメに決まってるだろうぶっ殺すぞクソ親父」

「普通の冗談だろ、大げさに騒ぐな」

「これだから男は……これからモミジへの復讐だつてのに『ママ』を軽んじやがって」

「それを言うならお前が最初に『ママ』を軽んじたろ」
「うるせーよ！」

英生さんのジョークが柚にクリティカルヒットしたらしく、食事そっちのけで大喧嘩が始まる。梓さんたちとやり合って二人は疲れてるだろうに、どこからこの元気が出るのが不思議だった。

「どうでもいいので早く座って食べてください。それと、話し合いの結果はどうだったんですか？ それくらい、私でも聞く権利はありますよね」

「ん、あーまだ言っただけだったか」

犬と猿のように英生さんと睨み合っていた柚が、頭を掻きながらこちらを向く。彼女はあつけらんとした顔で、

「やるよ、決闘。明日モミジに申し入れをして、うまくいけば来週あたり首脳会談ができるってさ」

「……そっか」

「そ。じゃ、いただきます。……あ、これ味が染みててうまい」

私の隣に座った柚が、何事もないように大根を頬張

る。分かっていたことではあったけど、もしかしたら全部なかったことになるかもという希望が消えてしまった。平和な時代はいよいよ終わってしまったようだ。とはいえ、平和だと思っていたのは私だけだったのかもしれない。英生さんと柚は常に苦しみや怒りを抱えながら生きていて、ようやくそれを晴らせる場が来た……そう考えれば、むしろ歓迎すべきことなのかも。

「むぐ……まあ、肝心のスーツがまだ完成しきっていないから、実際の決闘はまだまだ先になると思うけど。父さん、ホントにあっちは戦闘用スーツアサルトを持ってないんだよね？」

「ん、ああ。戦時中、俺が戦闘用の設計を終える前に政府がボシヤってな。もう不要ってことで、それをベースに農作業や工事を補助する作業用スーツワーキングの開発に切り替えたんだ。俺がモミジを抜けたときは、その試作機『壺型』が組み上がる直前だった」

向かいの席の英生さんはいつの間にかサラダに手を付けていて、切ったトマトを箸でつまみながらそう答えた。ちなみに英生さんはいつも最初に野菜から食べ始

めて最後にお米を食べるけど、順序で絶対に損をしている。

「あれから十年で、元部下らがスーツを進化させてるのは間違いない。一昨年だったか、二世代目っぽいスーツの制御用プログラムと一部の設計を作る依頼が来てただろ？」

「そういえばあったね。父さんと半々でコード書いた覚えがあるけど、あれも作業用だったはず」

「な。だが、設計を主導してた俺がいなけりや向こうの進化速度は遅いはずだ。それに、こっちにはあいつの残した切り札がある。ハハ、スーツ技術における父さんの貢献はすごいんだぞ」

そう言い切る英生さんは相当の自信があるようだ。実際、十年かかったとはいえ、ほぼ一人で戦闘用スーツを製造してしまうような人だ。それだけ自身の能力と実績に裏打ちがあるのだろう。あいつというのが誰なのかが唯一分からなかったが、昨日の柚の件もあるし、モミジの過去に絡む人のようなので触れないでいた。

「それ聞いたら安心した。でも、仮に決闘が成立したとしてさ、いつくらいまでにあっちは戦闘用を製造できるんだろ」

「モミジには軍사용ラボがある上、交易で得た資源や人手も多い。製造に時間はかからんだろうから、問題は設計とファームウェアになる。設計は何とかなるとして――」

「パワードスーツなんて複雑なものを効率よく制御しようと思ったら、サクラのエース級プログラマがいないと難しいよ。例えば、私とか」

「お前がエースかはともかく、専門じゃないモミジには難易度が高いのは間違いない。とはいえ半年もあれば動くものは仕上げてくるだろうし、逆に向こうからすりゃ、俺がいるにも関わらず一着製造に十年かかる時点で負けるわけないと思うだろうな」

誇らしげな英生さんが、続いてサバの入った皿に手を延ばす。柚はサラダの大皿から器用に豚肉だけを選んで取り皿へ運ぼうとしていたので、代わりに野菜をそこへ足してあげる。柚は小さく唸ったものの、じろりと睨む

とおとなしくなった。これも本人の健康のためだ。

「……父さん、決闘についての会談って私たちも参加するんだっけ？」

取り皿に入った薄切りのタマネギを嫌そうに見つめながら、柚が英生さんにそう尋ねる。

「梓たちが帰り際にチラッとやってたやつか。向こうが良いつて言うなら行くつもりだが、なんでそれを訊く？」
「いや、会談に出るってなったらどうせ半日くらい潰れちゃうでしょ？ そうなったら、また芽衣を放置することになっちゃうなって」

「確かに……なら、会談場所まで是一緒に行くのはどうだ？ 参加は無理だとしても、前後で食事くらいは一緒に取れるだろう。芽衣とスーツとの距離感をモミジに示せる意味でも悪くないかもな。芽衣はどうしたい？」

そう言うのと英生さんは箸を置いて、私の答えを待ってくれる。数秒だけ考えてから、私は率直に気持ちを答えた。

「行きたいです」

「なら、決まりだ」

英生さんは嬉しそうに頷いて、やっと白米に箸をつけた。

＊

それから三日後の昼に和葉さんが部屋へやってきて、「決闘についての会談」が次週水曜日の夕方に開催されることになったと教えてくれた。会談にはモミジとサクラの代表に加え、第三者の監督として、一帯の一次産業を握るツバキの代表も来るという。また、モミジの意向でスーツ技術の代表——サクラの場合は英生さんと柚だ——の参加も認められたようだ。

「会談の場所は湖畔をぐるっと回った先、サクラとモミジの緩衝地帯にある会議所に決まったよ。距離はあるけど公式の会談ってことで車を使うから移動時間は気にしなくていい。ただ、失敗できない会談だからサクラの他の関係者も呼んで事前打ち合わせをしたいかな。交渉については孝介も意見をくれそうだし」

食卓を挟んで私たちの向かいに座った和葉さんがそう話す。丸刈りかつ黒のタンクトップ一枚というスーパ

ラフな格好は独特のオーラを放っていて、性格の奔放っぷりを感じる。一方で飲み物を尋ねたら「熱い話には熱いお茶が付きものだよ」と言うあたり、変なところでこだわりがあるらしい。両手で湯呑みを傾ける和葉さんの表情を伺うも、特に問題はなさそうで一安心だった。なにせ我が家はみんなコーヒー派なので、滅多にお茶を淹れることがない。茶葉も古くなっていたし、変な味しないか少し心配だったのだ。

「つまりさ、昼までにはサクラの集会所に来てほしいわけ。そこから夜まで家を空けるのは確定なんだけど、大丈夫そう？」

「ああ、俺と柚は問題ない」

英生さんがそう返事をする、和葉さんは小さく首肯した。

「りょーかい。それで、英生さんから聞いている通り、芽衣さんも来るってことでいいんだよね？ 打ち合わせ中は機密保持のために別の部屋で待ってもらうことになるけど、ご飯は一緒に食べられるよ」

「はい、それで構いません」

「うんうん。じゃあ、その後の会談はどうする？ こっちは警備上の都合で芽衣さんは中に入れないし、進行によつては夜遅くまでかかるかもしれない。おすすめはないけど」

「それも行きます。大丈夫です」

「うーん、思ったより強情だなあ。そんなに二人と離れたくないのかい？ それか、別にお目当てがいるとか」

「……別に、ないですよ」

「そっか」

私を見る和葉さんの目がやや鋭くなったのを感じて、思わず視線をそらす。内心考えていた点を言い当てられてドキリとした。そう、会談になればモミジとサクラだけではなく……ヒマワリを潰した、ツバキの代表もやってくる。過去のこととはいえ、前の居場所を潰した人間の顔を見られるかもしれない……と、下心が僅かにあったのは事実だけだ。

「まあ、私としてはどうでもいいんだけどね。芽衣さんなら何も、しなさそうだし……とにかく、理解したよ」

言い終わるなり、湯呑みをぐいと飲み干して、

「それじゃ今日はこのくらいで。お茶もどうも。古い、割には、そこそこ美味しかったかな」

和葉さんは悪戯っぽく笑うと、席を立てて玄関へと向かう。見送ろうと立ち上がる英生さんを、彼女はひらひらと腕を振って制した。

そうして時間が過ぎていき、日常生活の傍らで英生さんと柚がスーツの完成を進めつつ——あつという間に、会談当日が訪れる。

＊

「目標、予定通り北東よりこちらへ接近！ 会議所前にてエンゲージ、残り時間推定数秒。まもなくだ、柚。構えろ！」

「イエッサー！」

「……よし、車両の停止を確認。目標出現までカウント開始、三、二、一……ゼロ、ゼロ、ゼロッ！」

「もらったあああああ!!」

夕方。会議所の玄関前に停車した小型の元軍用車両から男が降りてきたタイミングで、玄関前の柚と英生さん

がカメラをすかさず連写する。ミラーレス一眼とコンパクトデジカメのフラッシュが何度も激しく明滅し、向かいの男——灰色のスーツを着た茶髪、モミジ代表の准さんが、右手で目元を覆いながら心底嫌そうに顔をしかめた。敵とはいえ、この仕打ちは素直に面白いそうだと。

「……これがサクラ流のお出迎えというわけです、か。状況次第では攻撃とみなされうる危険なことだというのに、あまつさえ自分の子供にやらせるとは——」

「おいおい勘違いするなよ、准。俺たちは久々の再開が嬉しすぎて、思わずカメラを連写しただけだ。ちなみに、写真を撮っていいかは確認済みだから抗議も無駄だぞ」

「そーだそーだ！ 准サンおひさ〜、昔過ぎて記憶にないけど。あ、その嫌そうな顔も激写しちゃう」

「ぐっ」

文句を言ったそばから点滅が再開したのを嫌がって、准さんが正面から顔をそらす。その結果、眺めていた私の目線と視線がマッチして、目と目が合ってしまった。想像していたよりもずっと整った顔立ちだ。が、その表

情に苛立ちが浮かんでいるのがはっきりと見えて、部外者にも関わらず私は反射的に頭を下げる。

「私はやめようって言ったんですよ……私は悪くない……」

相手がサクラの敵とはいえ、二人の恥ずかしきの方が圧倒的に勝っている。見ていられなくて、私は下を向きながらぶつぶつと自分を正当化する呪文を唱え続けた。

露骨なため息が聞こえて、准さんの足音が去っていくのを確認してから頭を上げる。彼は玄関前で物々しく立つ戦闘服の警備員に短く挨拶をして、そのまま建物の中へと消えていった。それを後ろから二人がニヤニヤしながら見つめているあたり、もうどちらが悪役か分からない。私は玄関から目を離して、建物の外観全体を見渡す。鉄筋コンクリート二階建てのこじんまりとした会議所は戦前の自治体で使われていたものだったらしいけれど、今ではコミュニケーションの会談の場所として利用されている。二階には採光用の大きな窓があつて、落ちてきた陽を反射して茜色に光っていた。戦前の建物の中でも比較的新しいし、モミジとサクラの狭間という立地はお互

い都合が良いに違いない。

「ねえ芽衣、さっきの見たた!? あ顔傑作だったよ。」

写真もバッチリだし現像して家中に飾ろうかな」

「ああ、うん。見たた」

柚が私に声をかけてきたので視線を元に戻す。彼女は心底満足げな表情をしていて、まるでモミジを倒してやったと言わんばかりだ。まだ決闘すら正式に決まっていないというのに。

「ん、なんか元気ないな」

「別にそうでもないよ。それより、柚の方は緊張とかしてないの？」

「私はまあ……そりゃしてるけど。でも、さっきのでもいい楽になったかな。巨悪も所詮はただの人、枯れ尾花。だから、後は自信持って話せばいいやつて」

柚はそう言って軽く笑う。なるほど、さっきの過剰なまでの悪戯は緊張をごまかすためのものだったのか。そう理解すると、二人の行動が途端に納得感あるものに見える。恥ずかしかつたことに変わりはないけど。

「なら良かった。柚たちはもう中に入る？ 梓さんと和

葉さんはもう中なんだよね」

「うん、すぐ入るよ。外で待ってたのは^{ヤツ}准を煽るためだけだったし。芽衣はこの後どうするの？ このあたり、何もないでしょ」

柚が言う通り、会議所の立地は政治的な意味以外でよくない。いや、最悪と言って良かった。建物は山と湖の間にある細長い陸地の山際に建てられているせいで、片方には山で進めず、反対側に進んでも道路を超えてすぐに浜と湖に突き当たってしまう。周囲にある建物といえは民宿の廃屋があるくらいだ。事前に予想していた何倍もの虚無な空間に、覚悟していたとはいえ、意思が若干弱っているのを感じる。だって、ここから会議が終わるまでの間、時間を潰せる場所が湖畔くらいしかないわけ……

「と、とりあえず……湖畔でもブラブラしようかな」

「……やっぱりアパートに戻ってた方が良かったんじゃないの？」

ジトツとした目で柚がそんな正論をぶつけてきて、弱った精神にいくらかダメージが入る。今なら帰るとし

ても間に合うかな……なんて考えが脳裏をよぎったけど、頭を横に振って追い出した。そんなことをしたら、ますます柚と英生さんに気を遣わせて距離が開いてしまう。それに……まだ到着していないツバキの長の顔を見る機会は、やっぱり貴重だった。

「いいの、自分で決めたことだから」

「まあ、こういうときの芽衣って何言っても聞かないよね。そこは素直に偉いよ、多分」

私の返事に柚は半ば感心するような声でそう答えたが、その実、私は後ろ髪を引かれる思いだった。が、そうとは口が裂けても言えない。ええい、我慢だ我慢。

「とにかく、湖で体冷やしすぎて風邪とか引かないように。夏だから大丈夫だろうけどさ……っと、父さんが呼んでる。じゃ、行ってくるね」

「うん、行つてらっしゃい」

手を振る英生さんに向かって小走りで走っていく柚を見送る。二人は合流してすぐに会議所の中へと消えていった。要人や関係者が既にほとんど建物に入ったためか、外にいる人は大分減っていた。まだ残っているのは

警備の人と、時折荷物を持って出入りをする設営担当らしき人くらいだ。

「……さて」

私は会議所の壁際、玄関から少し離れた位置に陣取って、唯一姿を現していない要人を待つ。私たちが到着してからずっと見ているが、要人……ツバキの長はまだやってきていなかった。とはいえ、私がなんでツバキをここまで気にしているのかは自分でも分かっていない。やっぱり三年前に終わったことが理由なんだろうか。でも、それは私の主義に反している。「過去は振り返らない」から自分が生き延びられたのだと思うし、そこを譲るわけにはいかない。だからこれは……近隣で最も大きなコミュニケーションのトップがどんな人間なのかを見たいだけの、純粋な好奇心。きっとそれだけだ。

「あのう」

会議所の前に伸びる道路を眺めながら考え事をしていると、ふいに隣から声がする。見ると、畑に出るときに着る灰色の作業着に身を包んだ初老の女の人が立っていた。彼女の顔には年齢を感じさせる皺が浮かんでいて、

こちらの顔色を伺うように上目遣いで不安げだ。作業着には土の汚れが残っているし、髪の毛も目にかからない程度に短い。ひょっとして農家の方だろうか。相手を怖がらせないよう、私は慌てて笑顔を作った。

「どうしました？」

「大変お恥ずかしい話なのですが、散歩がてら湖沿い之道を歩いてきたら……迷ってしまいました」

「えっ、このあたりって一本道ですよ」

「そうなんですが……湖が綺麗だなと浜辺を歩いていたら、見失ってしまったんです」

「何をですか」

「言うなれば、冷静さ……理性と呼ぶべきでしょうか」

ふふ、人間というのは欲深い生き物ですね」

「はあ？」

言っている意味が全く理解できない。新手の冗談かと思っただけの、声色からして嘘ではなさそうだし。このあたりは湖と山に挟まれた一本道しかないわけで、歩いて来る限りは迷いそうにもないはず……いや、浜辺だけをずっと歩いていたら感覚を失うのかも。相当な方向音

痴というか、天然さがないと場所を見落とすことはなさそうだけど。でも理性云々は本当に見当がつかない。

「まあいいです。それで、目的地はどこなんですか？」

「サクラとモミジの『共同会議所』という場所です。」

「ご存知ですか？」

「えっ？」

彼女の口から飛び出した目的地の名前を聞いて、思わず変な声が出てしまう。思考が一瞬止まってから、改めてゆっくりと回り出した。いや、でも、よく考えてみればありえない話ではないはず。普段の会議所は一般の会議にも利用されているらしいし、今日が貸し切りなんだと知らずに来てしまったのかもしれない。サクラでは見かけない顔だからモミジの人かな。事前に周知はされていたと思うけど、わざわざ来たのだとしたらちょっと気の毒だ……

「……ここが会議所です。でも今日は大事な会議があった、関係者以外入れませんよ」

「あら、ここだったんですね。ご親切にどうも」

女の人はいくつと品よくお辞儀をして、私の注意を聞

かずに玄関へと向かっていく。私は理解が追いつかずに混乱した。どういうことだろう、今日は関係者以外絶対に通ることはできないはず——とそこまで考えて、ようやくその正体に気がついたのは、彼女が玄関前で警備員とにこやかに会話した瞬間だった。脳に凄まじい衝撃が走ると同時に心臓が大きく跳ねて、脈が一気に加速する。まさか。豪華な車でも、整った格好でもない。農業を仕事にするだけの普通な人みたいな人が？

「——すみません！」

「はい？」

我慢できず、大きな声で女の人を呼び止める。ガラス扉を押して中に入ろうとしたその人は、目を丸くしてこちらへ顔を向けた。

「あなたの名前、教えてもらえませんか」

「ああ、これはとんだ失礼を」

私が名前を尋ねると、彼女は申し訳なさそうに頭を下げて、

「申し遅れました。私は、ツバキ代表の艺^{イー}涵^{ハン}と申します。以後お見知りおきいただけますと」

まるで本当に農家の人が自己紹介をするかのように謙虚な態度で、あまりにも大きすぎる肩書を述べた。私は頭の芯がピリピリと痺れているのを感じながら、その言葉を咀嚼する。間違いない。いかにも普通そうなこの人こそ、一大コミュニティであるツバキのトップ——艺涵さんなのだ。

「差し支えなければ、私からお名前をお伺いしていますか？」

「……芽衣といいます。三年前に、ヒマワリからサクラへ移り住みました」

「ヒマワリ……ああ、なるほど」

私がぼんやりとしたまま名前を名乗り返す。それを聞いた艺涵さんは背景を察したのか、穏やかな表情を浮かべて答えた。

「芽衣さん、お元気そうで何よりです。過去の決定はともかく、これは今の私の本心ですよ」

*

浜辺に座り込んでいると、思ったよりも時間が過ぎる

のは早かった。浜には枯れかけた葦が散乱していて、その上に座れば砂で汚れることもない。私は近くに生えていた葦を一つ引っこ抜いて、茶色く染まったそれを手元でグリグリといじる。潮騒と風の音を聞きながら、日が徐々に沈み、輝きを失っていく湖をただ眺め続けた。

「二人はうまくやってるかな」

艺涵さんを見送ってから、あつという間に数十分が経っている。時間的に会議が始まってしばらく経ったころだ。顔合わせ等々が終わって、いよいよ本題を切り出す頃合いだろうか。本題——つまり決闘の申し入れがうまくいくかは、サクラ代表の二人……そして、柚と英生さんの説得にかかっている。代表は冷静だろうけど、正直柚たちの落ち着きの無さは気がかりだった。揺さぶりをかけられてもちゃんといなせるかな。失敗したらサクラ全体に影響が及んでしまう……なんて考えてしまった、二人にかかる重圧の大きさをまざまざと実感する。自分だったら絶対に出席したくない会だ。

手で弄んでいた葦を、湖に向かって思いっきりぶん投

げる。全力で投げたのに、ふにやふにやとした輩はたちまち失速して手前の砂浜に落ちてしまった。はあ、と思わずため息が漏れる。まったく、最近は気がかりなことばかりだ。

ふと、芝涵さんの言葉を思い出す。「過去の決定はともかく」と「今の私の本心」か。含みのあるこれらの言葉に、私は不愉快さを感じてしまう。モヤモヤよりもイライラに近いような不快感。ああ、彼女との接触はただの好奇心のほずだったのに、こんな感情になるくらいなら会わなければ良かった。見なければ、意識しなければ何も考えなくて済むのに。過去は振り返らない、振り返ってはいけない。昔の苦境を思い出しても怒りや憎悪が残るだけ。そんな感情に突き動かされて、失敗して、全てが壊れたのがヒマワリ。私はそれが分かっている。分かっているから……

……分かっているから、サクラとも距離を感じるんだろうか。サクラの過去があるからモミジとの決闘にまで発展してるわけで、英生さんや柚……サクラの人たちの怒りや恐れは間違っていない。それは理解できるけど、の

めり込むのにはどうしても抵抗がある。

みんなと一緒にいたい、身近で過ごしたいなんて思いながら、熱を持ちすぎたくない、人と安全な距離を置いておきたいとも思う。

サクラの闘いを応援したいし、除け者にされたくないなんて思いながら、周りには変わらないうてほしいし、私に寄り添って欲しいとも思う。

どこまでも中途半端で自分勝手な私。そんな自分は嫌だけど……手放すだけの勇氣、そう、勇氣が私にはない。「あーもう、本当に、何もかもが面倒くさい!」

考えるのが億劫になって、私は湖に向かってそう叫ぶ。いつその世から心がなくなればいいのに。全員が事実だけを受け入れて淡々と過ごす世界なら、戦争なんて起きないだろうし。そんな非現実的な妄想を浮かべながら、草をブチブチと引き抜いては投げ飛ばす。でも、どんなに勢い良く飛び出したところで水面に届かない。所詮は草。それでも私は引っこ抜き続ける。届かなくてもバカバカしくても、ブチブチ、ブチブチ、ブチブチと

「それ、俺にも一つ貸してくれない？」

急に背後から男の人の声がして、慌てて振り向く。瞬間、掴んでいた葦が抜けてバランスを崩してしまう。背中から倒れ込んだせいで視界が上を向いて、炭火みたいな色の空が一面に広がった。そこにおずおずと入ってきたのは、私と同年代くらいの男の人の顔。くせ毛なのか髪型は波打っていて、うねった髪が目元まで伸びている。上下共に紺色の作業着を着ていたが、この服装は英生さんがよく着ているものに似ていた。おそらく、現モミジの人なのだろう。困惑した顔で、倒れた私の顔を覗き込んでいる。私は起き上がって背中を払うと、平静を装ってこう尋ねた。

「……もしかして、ずっと見てたんですか？」

「まさか。叫びが聞こえたから見に来てみたら……あー、ほら、草を投げまわってるのが見えたから」

「ヴッ」

まあ自明だったとはいえ、心に事実がぐざりと刺さる。めっちゃめっちゃ見られたくないところを見られているし聞かれてたし、なんか言葉も選ばれてたよね絶対。恥

ずかしさで死にそうだし、そもそも近くの人に聞かれるんじゃないかという懸念がすっかり抜けていた。湖の開放感が何もかも悪い。

「ハハ、誰にだって嫌なときはあるっしょ。てか、君を見てたら俺も同じことやりたくなってきた。その草貸してよ」

「この葦のこと？」

「そうそう、草でも葦でも何でもいいから」

自分でそこら辺から抜けばいいのにと思いつつ、私は握っていた葦を手渡す。彼はそれを手に取ると、両手でぐちゃぐちゃと丸め始めた。

「遠くまで飛ばすコツはとにかく固めること。まあ見てなよ、できる限り抵抗を小さくして、砲弾みたいにこうすれば——ッ！」

彼は葦の塊をぐっと片手で握りしめて、そのまま思いつきり斜め上に放り投げた。それはおそらく最適な角度で射出され、私の投げていた葦よりも遠くへと飛んできき——

「あ」

……案の定、湖の手前に落ちた。私よりも遠くには届いたけど、水にはまだまだ遠い。

「クソッ、軽すぎて飛距離が出ねーっ」

「全然ダメじゃん」

意気込みとは全く異なる結果に対し、智明が悔しそうに唸る。私が半笑いで煽ると、彼は口を尖らせて言い返してきた。

「これはハード的な制約だししゃーない。泥混ぜてたら絶対うまくいった」

「レギュレーション違反」

「じゃあ一生無理だよこんなの」

そう言って、彼は拗ねた表情でそっぽを向く。最初は多少大人びているように見えたけど、中身は子供っぽいのかも。煽りに弱いところとかは柚に似ててかわい。

「ねえ、名前教えてよ。あと歳も」

結構話しやすい相手っぽいので、そう話を切り出してみる。話し相手もいなかったし、暇を潰すにはちょうどいい。彼は再度こちらに向いて、そっけなく答えた。

「俺は智明で、十八。そっちは？」

「私は芽衣。やつぱり同い年か」

「ふーん」

「……その反応はくない？」

「いや、こういうときにどう反応すればいいのか分からんだろ」

逆に私が口を尖らせてみると、彼……もとい智明は思った通りの困り方をしてくれた。よし、こういうタイプなら安心して会話できそう。

「ごめん。ところで、智明はモミジの人だね。今日はなんでここに来たの？」

「俺はまあ、付き添いみたいなもんな。そっちこそ、こんな浜辺で何やってたんだよ」

「暇つぶし」

「はあ？」

「私も代表たちに着いてきただけだから、実質付き添い。一応部外者だから、ここで待ってるの」

「じゃあ俺らは付き添い仲間か」

「だね」

お互いに共通点を見出して親近感が湧く。サクラでこ

う難に話せる人はいなかったから、かなり新鮮な気分だ。ヒマワリで過ごしていた頃は、同級生とこんな風に会話してたっけ……なんて過去を懐かしんでいると、

「でもサクラってことは、やっぱり芽衣はプログラムに強いんだろ？ いいよな、専門分野があるのはさ」

「私は別に。というか、そう言うとき専門には専門分野がないみたいじゃん」

何気ない智明のぼやきに違和感を感じて、返事がたら確認してみる。

「ホントにないんだよ、去年に移住してきた身だから」

「……」

「身体能力には自信あるけどさ、機械や回路には詳しくないから困ってたんだよな。工場勤務はいいけど、このままじゃずっとレーン作業だ」

私は、智明の回答を聞いて硬直してしまった。なにせ、自分と同じ外様の人間に会うのは、サクラに来て以来初めてのことであったから。もちろん頭では存在している当たり前と分かっていたけど、こんな場所で巡り合うなんて思ってもみなかった。

「おい、なんか俺悪いこと言ったか？ 急に黙られると困るんだけど」

「……私も難民だからさ、まさか同じような人に会えるって思ってた」

「え、マジか。元々はどこに？」

「ヒマワリ」

「あー、なるほど……もしかして艺涵にも会った？」

ヒマワリという名前を聞いてピンと来たのか、智明は些か同情的な声色と表情でそう尋ねてきた。嫌味な印象は一切感じられないから、純粹に私へ共感してくれているらしい。私が黙って頷くと、彼は意味深にため息をついた。

「艺涵、表だと優しいけど裏はコスいからな。前いたコミュニティでも、ツバキとの交易で艺涵にしてやられたことが何度かあったしさ。それに、ヒマワリの話は……俺だったら耐えられん。サクラにまで行った上で正気を保ってる芽衣は、マジですごいよ」

智明の言葉に、胸のあたりがキュッとした。私は恥ずかしいというかむず痒くなつて、普段なら絶対言わない

ような意地悪なことを言ってしまう。

「そういう言い方されると、割と腹立つなあって」

「げ、悪い！ 今のは失言だった……かも」

「え？ あ、いや嘘、嘘。褒めてもらえて普通に嬉しいよ」

冗談を真に受けて謝ってきた智明に対して、なぜか私の方がよっぽど狼狽していた。慌てて煽りを訂正撤回すると、智明は露骨に大きく息を漏らして、

「……こういう話題での冗談は洒落にならんから勘弁してくれ」

「ごめん」

安心半分怒り半分の温度感で私はこつてり絞られた。

やれやれ、慣れないことはするもんじゃないな。

「ってか、立場的には外様、同士なんだから、お互い気を使うのも変な話だよな。俺も芽衣の気持ちは多少分かると思うし」

「さすがにそれは言い過ぎ。私はそこまで単純じゃないよ」

「へえ、そうか？ じゃあ例えばさ……芽衣は、サクラ

に心から馴染みきれてるか？」

「づっ……」

「いや思いつきり図星じゃん。イキってたくせに弱すぎるだろ」

悩んでいたことをズバリ言い当てられて何も言い返せない。あまりのスピート陥落ぶりに自分自身が心配になる。智明は呆れたようにわざとらしく咳払いをしてから、論すような口調で続きを話し始めた。

「まあ分かるよ、俺だってそうだから。前いたコミュニケーションは資源も少ない上に年寄りばっかで生活が苦しくて、ちようど人を集めてたモミジに家族で逃げてきたんだ。でも、移住してハイ仲良くなりました、とはならない。周りの目はやっぱ気になるし……もらった仕事も、工場での淡々とした単純作業だ。職人や技師が別の部屋でガンガン成果上げてるのを見ると、やっぱ思うところはあるよな」

「……」

「生活は確かにマシにはなったけど、俺みたいな人間はいつ切られるか分かんないし。一方で、重宝されるよう

な専門技能なんて早々身につかない。何よりうぜーのはさ……周り、というかみんな俺に優しいんだよ。配慮されてる感が伝わってくるから文句も言えない。いっそ突き放してくれりゃ、俺だって他人のことなんか考えずに……」

智明はそう言って自嘲気味に笑いながら、足元の葦を何本か引っこ抜く。ひとしきり葦を手にとると、さっきと同様に手元でぐしやぐしやと丸め始めた。

「でも、そんな俺にも千載一遇のチャンスが巡ってきてさ。うまくやれば、今後はあんまり心配せずに過ごせるようになるんだ。そしたら親と一緒に穏やかに暮らせる上に、誰かと結婚だってできるかもしれない。だから――」

彼は大きく振りかぶって、再度葦の塊を湖へと投げつけた。角度も勢いも完璧に見えたそれは……やっぱ手前に落ちてしまう。どんなに努力しても、葦では湖に届かない。智明は肩をすくめてから、一転してさっぱりした笑みで私に向き直った。

「芽衣も、変に悩む必要なんかないって。今は違っ

も、その時が来たら自然とうまくいくよ。もちろんチャンスさえ逃さなければ、って但し書きはつくだろうけどな」

「そうかな」

「そうだよ。過去もあるだろうけどさ、俺たちは今を生きてんだ。移民、同土、絶対幸せになってやろうぜ。じゃなきゃ、世の中バカバカしくてやってられんだろう」

智明が「バカバカしい」を強調してそう言った。バカバカしい……そうだ、確かにバカバカしい。過去に囚われて周りとの距離に悩むなんて、本当に間抜けだ。

「うん。幸せになるよ、私」

「よしよし、その意気だ。だって俺たちは――」

そこで急に、彼の体から大きな電子音が鳴り響いた。

彼は慌てた様子でズボンのポケットから小さな機械を取り出して、

「悪い、呼び出し食らっちゃった。じゃ、お互い頑張ろうな！」

智明は走って会議所の方へと戻っていく。私は彼が完全に見えなくなるまで、その後ろ姿をずっと見つめて

いた。

「……」

手持ち無沙汰になって、シャツの胸元をギュッと掴む。とくとくと拍を刻む心臓の鼓動が早くなっているのは……ただの気のせいだ、きっと。

＊

智明が呼ばれてから十五分くらいが経って、湖畔はすっかり夜闇に包まれている。私はさっきまでの会話を思い出しながら、相変わらず湖畔に座り続けていた。静かな夜、聞こえるのはほんの僅かなさざ波の音だけ……。それなのに、不思議ともう寂しさは感じない。

そこでふと、そもそもどうして彼が呼び出されたんだろうなと考えて……ハツとする。そうだよ、私は何をポーッとしていたんだ。「付き添い」で来た智明が呼ばれたということは、会議に進展があったのかもしれない。

「思ってたよりもかなり早いけど、可能性としてくはないよね」

急いで立ち上がると、彼の後を追うように私も会議所へと突っ走る。会議所の前まで来たところで案の定、建物から人が出てきているのが目に入った。いつの間にかモミジ側は撤収が完了したのか、准さんが乗ってきたのと同じ車両が会議所を発っていく様子すら伺える。会議は長引くどころじゃない、想定よりも随分と早い速度で結論が出たらしい。時間的に、智明が向かってすぐに終わったのだろう。思っていた展開と現実が違いすぎて、胸騒ぎが収まらない。

玄関前に到着したところで、中から出てきた艺涵さんと鉢合わせになる。目を逸らそうとした私に、艺涵さんはすかさず声をかけてきた。

「あら、芽衣さん」

「……どうも」

私は内心毒づきながらも小さく挨拶を返す。艺涵さんは私の様子を見て勘付いたらしく、建物の中を指差して言った。

「サクラの人ならまだ中にいらっしやいますよ。なにせ、モミジの方にして、やられたみたいでしたからね」

「えっ——」

「お迎えに行かれては？　もう人もいませんから」

悪い予感的中して一気に脈が上がる。私は艺涵さんに小さく礼をすると、勧められるがままに建物の中へと駆け込んだ。既に会議所内はがらんとしていて、目的の会議室がどこかが分からない。直感的に二階へ駆け上がったところで、大会議室らしい両開きの扉を見つけた。『サクラ・モミジ・ツバキ 合同会議』と印刷された紙が貼られているのを見て、ここだと確信する。

「みなさん！」

扉を跳ね飛ばすように開ける。電灯に照らされた会議室の真ん中には大きな机があり、それを囲むように背もたれのある椅子がいくつか置かれていた。肝心の四人は、右側の席に座っていて――

「……………」

私は、四人の光景に愕然とした。和葉さんは腕を組みながら天井を見上げ、柚はうなだれたまま微動だにせず、英生さんは青ざめた顔で口元を抑えながら肩で大きく息をしている。口元からは底い切れなかった吐瀉物が

漏れ落ちていて、梓さんがその背中をさすっていた。梓さんは私の方に顔を向けると、固い表情のまま小さく首を横に振る。

——最悪の形で決着したんだと。
すぐに私は悟った。サクラの命運を分ける会議は

間章

——少し前、コミュニケーション合同会議にて——

「ありえない」

眼の前の現実を、俺の脳が受け入れることを拒否している。なぜか？　当然だ。眼前にあるのは——かつて俺が設計を進めていた、幻の強化外骨格パワー・ドスーツなのだから。

紫を基調とした合金の装甲が、入口に立つ装着者の全身を覆っている。装甲は電灯を受けて鈍く光っていて、顔もフルフェイスのマスクに隠されていた。中に入っているのがどんな人間なのかもまったく分からない。

——モミジが生まれる前に頓挫したはずの計画が、なぜ完遂されている？　設計すら完成せず、試作機も作ら

れていなかったというのに。これじゃ、まるで亡霊じゃないか。

「みなさんにご紹介します。これが、モミジの開発した最新の強化外骨格……量産型戦闘用の『参型』です」

部屋にスーツを招き入れた准が、澄ました顔で淡々と説明する。会議の頭から妙に落ち着いてやがると思っていたが、クソ野郎……

「量産型」ってことは、もう完成してるってことかな」

表情を平静に保ったまま、和葉さんが確認した。一方で表情とは裏腹に、普段よりも声が上ずっているように聞こえる。なにせ想定外の状況だ、焦らないほうが不自然だろう。

「ええ。レーンにはまだ乗せていませんが、月あたり数機は製造できる見込みです」

「ふーん。で、それを使って何をするつもりなのか？ ひょっとして、サクラを武力でねじ伏せるつもりとか」

「まさか。武力行使なんてしたら、そちらの女帝……」
 藝涵さんは迷わず我々を制裁するでしょう。土地柄、モ

ミジは食料や燃料をツバキからの輸入に頼らざるを得ない。つまり、コミュニケーション協定に背けば全て終わりです……さながら、数年前のヒマワリのように」

そう意味深な発言をして、准が部屋の奥に座る藝涵に鋭い視線を向けた。何を考えてるかまでは読めないが、彼女を相当警戒しているらしい。一方の藝涵は自身を睨みつける准を意に介さず、終始、穏やかな表情を崩さなかった。

「あら、そんな睨まないでください。モミジ——間接的にはサクラも——ツバキにとって大事な取引相手です。モミジの機械はツバキの産業にも大きく貢献していますし、資源を盾に脅すような真似はしませんよ。そんなことが露見したら、ツバキもタダでは済みません」

「ええ、我々もツバキが脅しをかけてくるとは思っていません。ただ……コミュニケーションが勝手に内紛を起こす分には、ツバキに何のリスクもない」

「……些か抽象的すぎますね。どうぞ、はっきり仰ってください」

「いいでしょう。端的に言えば——ヒマワリ崩壊直後、

土地と扇動者の両方がツバキに移ったと聞いています。あまりに都合が良すぎませんか」

「空いた土地を使うのも、難民の方を暖かく迎え入れるのも、コミュニケーションとして当然のことでは？」

「なるほど、さすがは大陸屈指の実業家だ。随分と寛大な心をお持ちのようですね」

「そんな昔話を持ち出すなんて……随分と品がいい、です
こと」

二人が互いにバチバチと火花を散らす。ヒマワリの事件について、准はツバキが糸を引いてると思ってるらしい。ああ、艺涵を警戒していたのはそういうことか。

イライラして頭を掻きむしる。ふざけんなよ、こっちは決闘についての会議をしに来てんだ。関係ねえことをツラツラ語ってんじゃねえよ。

「おい、くだらねえ喧嘩なら後にしろ！ 俺は決闘の申し入れのためにここへ来てんだよ」

そう怒鳴ると、准は鋭い目つきのままこちらに視線を戻した。まだ不満そうだが、ここで争うのはやめたらしい。艺涵は変わらず微笑を顔に張り付けたままだった。

俺は仕切り直してスーツの詳細を尋ねる。

「そのスーツ、どうやって作った？ 戦闘用は俺が途中まで設計したきりだったはずだ」

「……確かに、英生さんの設計は未完成でした。ですが、スーツに携わっていた技術者はあなたただではありません。私と他の技術者も数名、初期設計に関わっていたことは当然ご存知でしょう？」

「チッ——」

「結論、戦時中に英生さんが作っていた初期設計と作業用の壱型をベースに、我々が再設計して完成させたのがこの参型となります。この分野であなほど腕がいい技術者はいませんから、設計には二年半ほど要しました」

俺は無意識のうちに舌打ちしていた。話の通り、准が戦闘用の初期設計に関わっていたことを思い出したからだ。追加の設計完了に二年半は長いが、俺がいなければそれくらいかかるだろう。それでもきっちり完成させてくるあたり、腐っても天才設計者と言われるだけはある。モミジの製造設備が当時以上なら組み上げに半年も

かからないだろうし、ハードについては辻褄が合う。だが……モミジにとつての弱点はそこじゃない。

「制御プログラムはどうした？ 戦闘用スーツ向けのプログラムをサクラが請け負うなら、俺のところに話がないなんてありえねえよな。だが俺はそんな話を知らん。そして、お前らで内製できるほど単純な代物じゃないのも分かってる」

「もちろん内製はしていませんよ。仰る通り、我々だけで作れるものではないでしょう」

「だろうな」

「ですからファームウェアは、式型向けに発注したものを利用しました」

「……ふざけてんのか？」

「いいえ」

咄嗟に訊き返した俺を、准は首を横に振って否定した。式型？ 何を言ってる、あれは作業用だろう。

ファームウェアは俺と袖で書いたのを覚えてるが、戦闘用の挙動なんて一切サポートした覚えがない。あんなの使いまわせるわけが――

「納品された式型のファームウェアをモジュールごとに小分けし、新製品用のプログラム改修としてサクラの方々に発注し直しました。時間はかかりましたが……サクラの開発力は流石と言わざるを得ません」

耳を疑う。小分け？ 再発注？ 新製品用って、つまり嘘の説明をしてたってことか？

本当に、コイツの行動原理が全く理解できない。なあ、准、どうしてだよ？ なんで、そこまでして俺たちを追い詰めようとする？ そんなにもサクラが憎いのか？ そんなにもサクラを潰したいのか？

なあ、准。お前は、俺たちサクラの人間を……一体、何だと思っているんだ？

「……それってつまり、私の書いたコードが使われているってことですか？」

隣で袖がそう尋ねると、准は一言「はい」とだけ答えた。それを聞いた袖は、小刻みに震えながら、心底可笑しそうに笑い始める。部屋に彼女の笑い声だけが響いた。

「あ、あはは……そっか、私が父さんのために張り切っ

てコードを書いたせいで、参型こんなのが……」

「……」

「こんなバカバカしいことって、なかなかないよね？」

あははっ……ははっ……」

パチン。強がつて痛々しく笑う柚の声が、とうとう、俺の頭の中の何かを派手に断ち切った。俺は椅子を蹴り飛ばして立ち上がる。もう我慢の限界だ。ああそうだ、コイツにはこれ以上付き合ってられねえ——

「ぶっ殺す——」

「やめろ！ 二人とも落ち着くんだ！」

飛び出そうとした俺の腰に、梓が組み付いてくる。振りほどこうとするが、足元や腕も掴んできているせいでうまく力が入らない。なぜ邪魔をするんだ！ どけよ、どいてくれ！ 俺は内側から燃え上がる衝動に身を任せて叫ぶ。

「離せッ！ コイツは一線を超えた！ 俺だけじゃねえ、柚も利用して傷つけやがつて——」

「手を出せば協定違反、サクラは終わりだ！ そうなったら、英生さんの努力も全部無駄になる！」

「んなこと、言われなくなつて分かつてるよ！ だが、こんな……クソ、クソがつ……」

分かつている、分かつているんだ。艺涵の見ているこんな場所で准を襲えば、協定違反としてサクラが吊るし上げられかねない。参型だって完成してしまっている。仮にコイツを殺せたとしても既に遅い。何も得られるものはない。

梓に押さえつけられている体から、徐々に力が抜けていく。表情一つ変えない准を、俺は刺し殺せるくらいの強さで睨みつけた。

「なあ、なんでここまでする必要があるんだ？ 分かつてんだろ、こっちはただ幸せに生きたいだけだって……それが悪いのかよ」

俺はよたよたと移動して、蹴り飛ばした椅子に再び腰を下ろす。梓はそこでようやく俺の体から離れると、何度か咳き込んでから自分の席へと戻っていった。

「その質問に対する回答は二つあります」

准は声のトーンを維持したまま、こちらを睨み返して答える。

「まず一つ目。私は十年前に『近い将来、元に戻す』と宣言しました。約束を守るのが信条の身として、これはきちんと果たさせていただきたい」

「……」

「そして二つ目。現状、お互いにコミュニケーションが小規模過ぎます。このままでは、今後大きな敵が現れたときに太刀打ちできません。参型もそのために開発しましたが、完璧には遠い。この性能と完成度を高めるには、電気・機械系だけでなく、情報系の力が必要です」

「ハッ、ふざけんなよ。元はといえば、全部お前らが――」

「切り離しは苦渋の決断だったと、あのときも言ったはずですが」

俺が話している途中で、准が食い気味に割り込んできた。思わぬ態度に言葉が詰まる。准も過熱の自覚があったのか、こめかみに手を当てると何回か大きく呼吸をした。

「……十年かけて、モミジは最悪の状況から立て直しました。製品輸出で安定した資源の獲得に成功し、サクラ

を受け入れてもやっていけるだけの体力が戻った」

そう言葉を続ける准からの話し方からは、既に過熱した印象が感じられない。数度の呼吸で落ち着くあたり、相変わらず機械みたいなやつだ。

「併合後、サクラ側の待遇改善も約束します。私たちはもう一度手を取り合うべきだ」

「チッ、クソが」

俺が苦し紛れにそう吐き捨てる隣で、話を聞いていた梓が大きく息を吐き出した。

「……和葉」

「うん。悔しいけど、この場合は仕方ないかな」

梓と和葉がお互いに頷きあう。それからすぐに、梓がこう切り出した。

「准さん。紹介いただいた参型の件も含め、我々は一度持ち帰って検討しなおしたい」

「もちろんです。実のところ、こちらも最初からそのつもりでした」

「なら、決闘を申し入れた段階で情報共有いただくのが筋だったのでは。そうすれば、ここまで混乱することも

なかった」

「モミジとして、サクラ側の反応を直接確認したかったものですから。配慮に欠けた点があったことは、深くお詫びします」

「……」

恭しく頭を下げた准を、俺たちは全員冷めた目で見つめていた。ハナから詫びるつもりなんかなかったのは一目瞭然だろう。コイツは会議を利用して、参型を誇示した上で俺らの意欲を削ぎ落とそうとしただけだ。

「一週間待ちます。その間、決闘するか改めてご検討ください。ただ、何事も早いほうがよろしいかと」

「それはこちらが決めることだ」

「失礼。では、いい返事をお待ちしています」

そう告げると准は立ち上がって、颯爽と部屋の入口へ向かって歩き出す。が、途中で何かを思い出したかのようになり立ち止まると、部屋の反対側で微笑み続けている芝涵へ振り返った。

「そうでした、艺涵さん。ここに来る途中でわざわざ下車したそうですが、もしご不快でなければ、その理由を

お伺いしたい」

思わせぶりな問いかけを聞いた芝涵は、クックツと小さく声を出して笑う。穏やかな顔とは裏腹に、その笑いは……はつきり言って、不気味だ。

「湖があまりに綺麗だったもので、風景を眺めながら向かおうと思ったんです。おかげで道に迷ってしまうくらいにのめり込んでしまつて……フフ、ツバキにも欲しいくらいですよ」

「……そうですか。ありがとうございます」

准は再び踵を返すと部屋の外へと去っていく。その後ろを、アクチュエーターの機械音を響かせながら参型が追いかけていった。

二人が出ていってまもなく、音もたてずに扉が閉まる。部屋にはシンとした静けさが戻った。俺は出ていった参型の姿と、作業部屋に残してきたスーツの両方を思い出す。脳内でその二つを比べようとしたところで、俺の胃から急激に、強い不快感がこみ上げてくるのを――

「うぷっ――」

咄嗟に口元を抑えようとした。だが、せり上がる液体

の速度に勝てず、防ぎ損ねたものが勢いよく外へと吹き出す。

「っ……………」

指の間を縫って、ぼたり、ぼたりと、粘ついた体液が滴り落ちる様を眺める。唾内にも広がったそれは、すえた苦味と――

――言葉では表しきれないほどに、屈辱的な味がした。

＊

あれから三日が経った。昼間だというのに、リビングには私以外誰もいない。普段なら誰かが仕事をしている時間帯けど、あの会議以降、我が家では誰一人として仕事をしていない。理由は、会議に現れたという参型だ。梓さんから聞いた話では、モミジは所詮作業用スーツの技術しか持っていないと甘く見ていたところに、量産体制になるまで仕上がった戦闘用^{アサルト}スーツなんて出されたいらしい。当事者からすれば、衝撃なんてレベルでは到底済まないんだろうと思う。日常生活に気を使う余裕がなくなるのも分かる。かくいう私もアイスコーヒーを

入れたグラスを片手に、リビングのソファに座って怠惰な時間を過ごしていた。弱い風が時折風鈴を揺らして、わずかに心地よい音が鳴る。

リン……リン……。世界の終末なんてものがあるのだとしたら、きっと、今日とさほど変わらないのだろうか、なんて思ったりして。

「おはよ……」

声が聞こえた方へ振り返ると、寝間着姿の柚が寝室からリビングへとやってきていた。髪が爆発したかのように乱れていて、目元も赤く腫れているように見える。服もずっと寝間着のままだし、英生さんと違って、ほとんど寝室に籠っているようだった。流石に体はシャワーで洗ってると思うけど……食事についても、二人は私が作り置きしたものをそれぞれ勝手に食べているだけだ。いっここへ来ているのかも分からない。団欒は一切なかった。

そんな柚は、ふらふらとした足取りでそのまま台所へと歩いていく。

「柚、大丈夫？」

「まあ、別に」

今の柚に何を尋ねても空返事しか返ってこない。昨日も一昨日も同じだったから驚きはないけど、思わずため息を漏らしてしまう程度にはつらい反応だった。今まで似たような状況になったことはあったものの、一晩経てば柚は元気になっていたし、英生さんが話し相手になってくれたりもした。でも、今はどちらもない。

これがずっと続くのだとしたら、本当に……

「……夢を見てたんだ」

気分が沈み込みそうになったところで、グラスに水を注いでいる柚がぼつりと呟く。驚いた私の胸が大きく脈打った。三日間の上の空ループが、ようやく断ち切られるかもしれない。

「っていつても、あの会議からずっと嫌な夢ばかりでさ。心臓がバクバク鳴ってる中、死にそんな感情だけ抱えて嫌々起きるわけ。生きる気力も失うレベルの最悪の目覚めでしょ？ だから寝たくなくなって、寝る時間が遅くなって——じゃーん、見事に昼夜暗転した美少女の完成」

柚は冗談めかして笑ったが、その声からは力が感じられない。柚は多少無理をしてでも、私に話しかけてきてくれているんだと思った。一言も聞き逃さないよう、彼女の声を精神を集中する。

「でもね、さっきまで見てたのは違ったんだよ。ホントにいい夢だった。決闘とか政治とか食料とか……面倒なものはぜえええええんぶ捨てて、みんなで山の中を走り回ったり、湖を泳いで……夕方になったら、芽衣と一緒に涼子さんを回避しつつお風呂に入って……でもなんだかんだ話す羽目になって……文句言いながら家に帰ったら、父さんがご飯を作って待ってくれて。一緒に机を囲んでご飯を食べて……芽衣が淹れてくれたコーヒーを飲みながら、今日あった話とか明日の予定とか話してさ」

「うん」

「晴れの日も、雨の日もずっと幸せで。ある日、遠出をしたらなぜか梓さんと和葉さんと会って、近くにいた孝介さんが意味ありげにニヤニヤしてたり。夜は野原にテントを立てて、脇で焚火をしながら……芽衣と一緒に寝

るんだ」

言葉が途切れる。柚は小刻みに体を震わせながら、「でもさ、どんなに綺麗で、楽しくて、そうあってほしい未来でも」

目元からきらりと、雫を落とした。

「結局、これは夢……ただの夢なんだよ、芽衣。父さんの技術は盗まれて、サクラは結局勝てなくて……大好きだった場所も人も、みんなバラバラになるんだ。モミジに吸収されたら、今のままじゃいられないから……」

そう言って、柚は鼻をすする。

柚。父親とそっくりのお調子者で、元気いっぱい、面白くて、かわいい妹みたいな存在。一方、強がりなくせに寂しがり屋で、面倒くさくて、毒舌家なくせに独り言でしか弱みを吐き出せない天邪鬼……そしてきっと、私のことを好きでいてくれる女の子。

そんな彼女が、私の前で泣いている。私たちの居場所——サクラが、奪われてしまうことを怖がっている。その気持ち、私には痛いほど分かる。

「夢じゃない、夢なんかじゃない」

「えっ？」

「柚——大事な場所を守っているのは、夢で終わらせちゃダメなんだよ。ヒマワリを見てきた私には分かる」

私だって、時折ヒマワリを夢に見る。でも、私の夢は既に終わってしまっているから。柚には、同じ思いをして欲しくない。

だから私は、言葉を紡ぐことにした。

「サクラを囲んでいる山の反対側にあった、人口三千人くらいの田舎のコミュン。戦時中に私が疎開してきたのが小さい頃だったから、親の記憶が正直ほとんどないんだよね」

そう、自分の親のことはよく覚えていない。不幸中の幸いなのかもしれないけど。親は東京で官公庁の仕事をしていたらしく、私を連れて東京を離れられなかったらしい。結果、私は小学生になる直前に、郊外の施設へ疎開させられた。それから間もなく、核弾頭によって東京は消滅してしまう。私は孤児になったものの、親との接点が薄すぎたせいで何の感情も抱かずに済んだ。私に

とつての本当の家族は、施設にいる大人や同じような境遇の同年代の友人たちだった。

「ボランティアの人が開いてる学校に通いながら、農業や仕事の手伝いをして。サクラみたいにとんと顔見知りだったし、なんだかんだ楽しい生活だったんだよ」

「……」

「とはいえ生活は苦しかったし、年齢が高い人たちから倒れていって、他のコミュニンに移る人も多くてね。年を経るごとに悪化するうち、私が見知っている人たちも荒んでいった。『別のコミュニンに移った裏切り者のせいで苦しい』『他のコミュニンがヒマワリを潰そうとしている』『こうなったらそいつらを武力で黙らせるしかない』って大人たちが言い始めて、実際に計画や準備が始まって……」

脳裏に浮かんだ凄惨な光景を、顔を左右に振って迫り出す。拳を握って、何度か深呼吸をする。よし、大丈夫。

「ツバキに、私たちのコミュニンの襲撃計画が漏れたのが運の尽きだった。誰が告発したのかは分からない。ツバキは大人たちの計画を全部把握していて……協定違反

として、ヒマワリを制裁。他のコミュニンもツバキには逆らえないから交易が全部止まって、完全な自給自足になった。未来のないヒマワリから逃げ出そうとする人が増える中、裏切り者の魔女狩りが始まって……見知らぬ人じゃない、見たこと話したことがある人同士で、殺し合ってね。おぞましくて、私も逃げ出した」

混乱の中、私たちの施設にも大人が飛び込んできた。包丁を持って何かを喚いているのが怖くて、私たち子供は散り散りに逃げた。もうヒマワリは安全じゃないし、私は追手から身を隠そうと山道へ走って。

その途中、戦前からある住宅地を突っ切ろうとしたところで、見た。

ブロック塀に挟まれた道に横たわる大人と子どもの死体。大きな赤黒い染みの周りを飛び回るハエ。知っている顔だった。学校でボランティアをしてくれていた、かつての先生。私がハズレと呼んでいた人。

その人の名前を、結局私は知らないまま……怖くなって、逃げて、逃げて、ただ逃げて。

「気が付いたら山道を登り切ってた。ヒマワリの方を見

下ろしたら、騒ぎの音と黒煙が立ち上ってて。一方で遠くには……ツバキの大きな畑と家々が見えた。ああ、『負ける』ってこういうことなんだって、そこで分かったよ。だから……」

私は手にしていたグラスを飲み干して、乾いてしまった唇をもう一度湿らせた。

「夢で終わらせるなんてダメだと思ふ。私も、もつといろんな人と仲良くなっていれば大人たちを止められたかもしれない。制裁を受けた後に大人たちを説得して、立て直しを進める道だってあったかもしれない。でも私は眺めるだけだったから、人もヒマワリも死んだ。幸せな未来を掴むためには、できることをやるしかない」

「……うん」

「だけど……だけどね」

私は先を続けようとして、自分の声が小刻みに震えてしまうことに気が付く。悲しみでも怒りが原因じゃない。大きく重たい不安と恐れが、私の中で渦巻いているせいだ。

「こうやって綺麗事を言ってる私が言うのも変だけど

さ、やっぱ怖いよ。できることをやるって言うのは簡単だけど、一歩間違えれば、ヒマワリの大人たちと同じことになる。正解を見誤って突き進んだら、サクラも取り返しがつかなくなるかもしれない。でも何も行動しなければ、過去を振り返らなければ、一気に事態が悪化することはないはず。もしかしたら勝手に良い方向へ向かうかもしれないし、悪くなるにしても徐々にゆっくりと進むだけだろうし……って、何言ってるんだろ私」

そこまで話して、私は自分の発言に呆れて目を伏せる。全く、何がしたいんだ。柚を元気づけたいならこんなことを言うべきじゃない。もつとやる気が出るような、背中を押してあげられるようなことを言ってあげた方がいい。

でも、私にはそれができない。大人たちのように暴走することも、すべてを諦めて受け入れることも。

——本当に中途半端だな、私は。

「芽衣」

床しか見えていない私の視界に柚の足が入ってくる。

そのまま、その足が私へと近づいてきて、

「——んっ」

頭を持ち上げられた私は、なめらかに唇を奪われた。

柚からは汗と、かすかに花の匂いがある。三日間風呂に入っていないのかと心配してたけど、やっぱりシャワーくらいは浴びていたらしい。私はホッと胸を撫でおろした。

「……匂った？」

唇が離れると、柚が頬を赤らめながらそう尋ねてくる。私は一瞬だけ迷ったけど、結局、素直に答えることにした。

「ちよっとだけ。でも、シャンブーの香りがして安心したよ」

「いやいや、さすがの私でも三日間体洗わないのはあり得ないから。シンプルに不潔でしょ」

「そうだったんだ」

「え、何その反応？　もしかして私マジで汚い女だと思われてない？　違うから！　疲れてたり面倒なとき雑になるだけだから！」

冗談めいたフリに反応した、元氣いっぱい返す。そ

う、これが私のよく知っている柚だ。沈みきっていた彼女が、やっと戻ってきたのを実感する。

「……ありがと、芽衣。良いことだけを押し付けるんじゃないでさ、悩みも迷いも含めて話してくれたから……本当に私のことを思ってくれてるんだって分かったよ」

「……」

「そんな風に、私以上に私のことを考えてくれる人がいるなら、もうちよっとだけ頑張ってみようかなって。だから——ただいま」

「うん、おかえり」

照れ隠しに柚が笑って、私もつられて笑顔になった。さっきまでの重苦しさはどこへやら。柚はその場で大きく伸びをすると、息を吐きながら腕を回して体操を始める。不思議に思っただけを眺めていると、彼女は息を吐き出しながら、

「はーっ、三日も寝てばっかだったせいで体がなまりまくってるよ。そんなわけで、私は一仕事してくる」

「え、今から？　でも、梓さんたちから仕事を請け負っ

てないんじゃない……」

仕事をしたいなんて言い出したことに驚いた私は、すぐに訊き返す。何せ柚は面倒くさがりの代表例だ。どういう風の吹き回しだろうと考えていると、柚はチツチツと舌を鳴らして、不敵な笑みと共に答えた。

「違う違う。ウチにはもう一人、現実に連れ戻さなきゃいけないバカがいるでしょ？ それをさ、今からし、ば、きにいくんだよ」

＊

柚が私に宣言してから十分ほど経ったところで、我が家ではようやく決着がついた。

「んん、んー！ んんんっ!!」

「……ねえ、英生さんの口を塞ぐ必要ってあった？」

「だってうるさいじゃん。ほら、捕まえただけでこんな騒いでるし」

目の前には、布団とロープで簀巻きにされた上に口をガムテープで塞がれた英生さんが転がっていた。ジタバタと体をうねらせて自由になろうとしているものの、布

団がガッチリと縛られているせいでうまくいきそうになり。私はため息をついた。柚が元気になったのはいいことだけど、どうしてこうも極端になるかな……

「へっへっ、精々、いい声で鳴いてくれや……」

「それ完全に悪役のセリフじゃん」

「人生で一回は言ってみたかったんだよねこれ。でもまあ、まさか実の父親に言う羽目になるとは思わなかったけど。芽衣も言ってみたら？」

「遠慮しとく」

私は苦笑いをしながら柚の誘いを断った。英生さんを見ると、眉間に皺を寄せながら、強い眼力で私に助けを訴えかけてきている。ガムテープを外したら即座に怒号が飛び出しそうな勢いだ。一方で目元にはクマができているし、髪も油でギトギトしている。柚と違って体のことは一切気にしなかったようだ。徹底的にスーツ開発に身を投じているあたりが、英生さんらしいというか。

「柚、英生さんも困ってるからテープだけ剥がすよ」

「えー、でも……」

「でも、じゃない。……英生さんも、ややこしくなるの

で叫ぶのはナシでお願いします。いいですね？」

「ンン」

こくこくと英生さんが首を縦に振ったので、柚の代わりに私がそちらに寄って、顔からガムテープを一思いに剥がした。小さく悲鳴が上がったが、ゆっくり剥がすよりダメージが少なく済む。とはいえ、剥がしたテープの裏にはヒゲがかなり張り付いていた。私のせいじゃないのに、ちょっとだけ申し訳ない気持ちになる。

「ありがとう芽衣、助かった。にしても、このクソガキ柚——」

「叫ぶのはナシですよ」

「わーってる。クソ、口元も痛えし……柚、てめえ覚悟できてんだろな」

そう文句を言いながら、英生さんは物凄い形相で柚を睨みつける。ここまでキレるのを見るのは年末の大喧嘩以来だ。

「その前に、父さん。まず言うことがあるんじゃないの？」

「んだと？」

「食事も勝手に食べて、当番も守らず、仕事もせず、作

業部屋に籠もりつきりで挨拶もない……この三日間、芽衣がどんな思いで過ごしてたか」

「ぐ、それは……」

正論で突かれ、英生さんが狼狽する。自覚はあったのだろう、数秒ほど目が泳いだ末……もう一度私と目が合った。

「芽衣、悪かったよ。言われた点に関しては、言い訳のしようがない」

その謝罪を私は素直に受け入れる。英生さんがそうなっていた理由は明白だ。スーツの完成を急いで、日夜徹夜で開発を進めていたのだから。

「焦る気持ちは分かりますけど、体を壊したら元も子もないですよ」

「当然だ。だが、モミジへの返答にまで時間がない。それに、梓と和葉がこの後視察に来る予定なんだよ。早く完成させなきゃ、俺たちは——」

「それも言い訳でしょう」

早口で逃げ口上を捲し立てる英生さんを、私はさえずって否定する。

「ちゃんと考えてください。スーツで決闘してまでサクラを守る理由はなんですか？ それは、サクラのみんなが幸せに生きるためでしょう？ 誰かに支配されることなく、自立して生きるためでしょう？」

「ああ」

「だったら、英生さんがそんなにボロボロになったら、私たちは幸せになりますか？ 私も、柚もなれないですよ。自立したって、スーツ開発で身も心も荒んでしまったら、それはモミジに支配されているようなものじゃないんですか？」

「……」

「英生さんも、柚も、きつと私も。みんな一人で抱え過ぎなんです。悩みも課題も、一緒に考えられるはずでしょう？ だって……」

一旦言葉を切って、会議の日のことを思い出す。あの日、智明は湖畔で「チャンス逃すな」と助言してくれた。「関係に悩む必要なんかない、その時が来れば自然と分かる」と教えてくれた。

私は本能的に悟る。そのチャンスは今だ。

「だって、私たちは家族です。でしょ、英生さん」

思い切って踏み込み、確認する。今までの疑似家族じゃない。ここで私が言っているのは、痛みも、悲しみも、怒りも、喜びも——全てを共有し過ぎていく、人生の単位としての家族。

それこそ、私が、本当に欲しかった繋がりのはずで。

「父さん。私も、芽衣の昔話を聞いたよ。ヒマワリで何があったのか……」

「……」

私の次に柚がそう告げると、英生さんの表情が陰しくなった。だが、彼女は臆せず続ける。

「だから、私たちも芽衣に話すべきだって思う」

「柚——」

「私は、芽衣の昔と今の悩みを聞いて救われたから。私たちの話を聞いて芽衣が楽になるかは分からないけど……話さないのは、フェアじゃない。私たちはもう、家族だよ」

柚がそう念押しすると、英生さんはぐつと苦悩するような顔つきになって——

「……ああ、そうだったな。俺たちは——家族だ」

根負けしたように、息を吐きながらそう言った。憑き物が落ちたかのように穏やかな英生さんの表情で……私はようやく、家族になれたんだと思った。

これで二人と完全な対等になった。もちろん、その責任も含めて。

「少し長い話になる」

それを証明するかのように、英生さんが徐ろに口を開く。今までは表面的な部分しか教えてもらえなかった二人の話に、私は耳をそばたてた。

「戦前、俺を含む大勢の工学系の研究者や技術者が政府肝入りの新兵器開発計画に抜擢されてな。開発施設に来た俺へのオーダーが戦闘用強化外骨格^{アドバンスドエクソスケルトン}だった。ただ、俺は機械の設計開発ならできるが、制御用のプログラムは得意じゃない。戦闘用スーツなんて複雑な代物には専門のプログラマーが必要ってんで、情報工学で博士号を持つてる秀才……美幸さんがやってきた。あの人はまさにウィザードだ。制御コードからツールまで、頼んだプログラムは何でもすぐに書き上げてくれたよ。俺の設計を

見ながら、どうすれば機械とプログラムにとって最適になるかとかを深夜まで話したりしてさ。それで……なんだかんだあって、結婚したんだ」

「補足。父さんは端折ってるけど、私は先にデキてます」

「……うるせえ」

真剣な話に柚が水を差して、英生さんがやや苛ついたように顔をしかめた。だけど、これは空気が重くなりすぎないようにするための柚の配慮だろうと思う。当の本人は怒られてもヘラヘラとしていた。

「とにかく、柚が生まれて……部品の設計と試作を繰り返しているうちに戦争が始まって、大卒の初期設計が終わった段階で……政府が潰れた。職と国を失った俺たちは混乱してたが、周囲の動向も踏まえてモミジを立ち上げたんだ。俺たちにサバイバルの知識はなかったが、幸いなことに政府が残した開発設備は兵器以外の製造に転用できると分かって、別のコミュニティに製造した機器を輸出すれば食料や物資を得られる算段だったんだが」

英生さんが深々とため息を吐き出す。その重みから、当時のモミジでの苦境が垣間見えた。

「まあ、そう簡単に事は運ばないわけだ。理論上でき
るっていつでも兵器以外の開発ノウハウは十分じゃな
かったし、最初の頃は電力とかインフラ供給も不安定で
な。コミュニケーション間の政治が固まってからインフラは安定
し始めたが……輸出できるものが少なくて、物資欠乏で
不満が高まった時期だったよ。その矛先は機械系や電気
系と違って、コンピュータ依存の能力を持つ元、エリート、
の情報系に向いた」

「でも、機械には情報系の人たちも関わってたんじゃない
そう尋ねると、英生さんはかぶりを振って否定した。

「ノウハウもインフラも安定しない状況じゃ、高度なも
のなんか作れやしないし需要もない。戦後初期は生活に
必要なローテクモノの需要がほとんどだった。情報系な
んぞ穀潰しとでも思われてたんだろうさ」

私は納得する。戦争でインフラすら危機的状態になっ
ている以上、先端機器が必要になるケースは少ない。ヒ
マワリにいた頃も、初期の頃はしばしば電気が止まって
いたのを思い出した。水道は使えていたけど、止まっ
たって言った人もいたっけ。そういう状態では扱いや

すくシンプルな機械の需要が高いのも分かる。英生さん
は続けた。

「そんなザマゆえ、旧モミジ末期は少ない食料や物資を
巡った喧嘩まみれで、情報系とその他の派閥は一触即発
だった。そこで今のモミジの連中……現トップの准を中
心とした奴らは、分裂を防ぐために住民投票をしてな。

結果、半分以上が情報系をモミジから切り離すことに賛
成した。例外はなし、情報系の間は全員モミジから退
去して近くの廃村に移れてよ。だがその頃、美幸さん
は病院で治療を受けてたんだ。戦時中に使われた化学兵
器によるものとか戦術核の影響とかで理由もはっきりせ
ず、とにかく対症療法しか分かってなかった。治療を続
けなきゃ危ないって医者に言われてたのに、准は例外は
ないの一点張りで……！ だから俺は袖を連れて、美幸
さんとモミジを抜けたんだ」

そこで言葉が止まる。しばらくの沈黙の後、英生さん
が寂しげに言った。

「それから半年もしないうちに、美幸さんは死んだよ。
いつかモミジに復讐してやろうって、俺と一緒にスーッ

の開発を進めながら……」

私は何も言えなくなる。英生さんの大事な人、柚のお母さんがいない理由は何となく察していたけど……話しながらなかった理由が、ようやく腹落ちした。同時に、軽々しく聞き出そうとした自分を改めて反省する。

「なあ芽衣。俺たちが作ってるスーツの強みが何か分かるか？」

私はそう尋ねられて、私はぐるぐると思考していたのを慌てて中断した。

「ええと、強みですか」

「ああ。分かっていると思うが、スーツ自体の機械的性能、素材の品質……これはモミジに絶対に勝てない。サクラはそもそも資源が足りてないし、機械系の技術者は俺くらいしかない」

それはそうだ。スーツへ潤沢に資源を投下できるほど、サクラは裕福なコミュニケーションじゃない。技術者も歴史的に情報系偏重なものその通り。だとすると……そうだが、前に同じような話を二人はしていたはず。

「前に二人から聞いたときは、確か制御プログラムが

鍵、って言ってませんでしたっけ」

「その通り。つまりは情報系の縄張りであり、この分野で美幸さんの右に出る人はいない」

私の回答を聞いて英生さんは大きく頷く。その反応に私は安堵した。

「美幸さんが死ぬ直前まで作っていたのは、サクラのスーツ専用的高性能 オスレーティングシステム OS だ。汎用ファームウェアと比較して三割以上性能が高く堅牢で、俊敏に動けるんだ」って、臨終間際だつつのに自慢げに語ったのを覚えている」

「……三割以上も？」

「理屈上はそうらしい。だよな、柚？」

話を振られた柚は「もちろん」と誇らしげに答えた。

「一通りコードを読んだけど、これはすごいよ。父さんの設計に最適化して無駄をなくした上で、専用OSにして処理を統合してる。処理も速いし、各種制御フローも完璧。これを短期間で作るなんて、マジで母さん。コードを読むだけで、この人の娘で良かったって感謝の念が湧いてくるくらい」

「……だよ。俺には半分くらいしか分からんがな」

恍惚とした顔でOSについて語る柚を横目に、英生さんも満更ではなさそうだ。しかし、すぐにその顔は陰って、口からため息が漏れ出たのが見えた。

「だが、デカイ問題が一つある。十年前から俺が設計を変更した部分が多々あって、OSがその部分を吸収しきれてない。ハードウェア自体はもうすぐ完成するが……OSばかりは、俺じゃどうにもならん」

トーンダウンした英生さんにつられてか、柚も幾分か沈んだ口ぶりで続ける。

「私も母さんのOSの修正は試みてる。でも土台が高度過ぎるし、仕様の変更量が結構あるから、全部終わるまで結構かかりそうでさ。決闘するって一度決めたら、既にスーツが完成してるモミジは大して待っててくれないだろうから……ぶっちゃけ、もう諦めかけてた」

「あ？　なんだと柚、てめえ——」

「だって！　そもそも、父さんがあんなに設計へ手を加えるから対応できてないんだよ？　せつかく母さんが天才的に麗しいコードを書いてくれたっていうのに、それ

を邪魔してんのはどっちだよっていう」

「あーはいはい、そうですか！　おい、今度こそ俺はキレたからな。表出ろや、スーツ完成の前に体で決着つけたらあ！」

「出られるもんなら出てみる簀巻き雑魚マゾ豚野郎！」

売り言葉に買い言葉で、二人がある意味いつも通り喧嘩をおっぱじめる。お互い思いつめていた部分があって、それが一気に弾けたという感じだろうか。見る限り、悪い方向には転ばなさそうだけど。

ただ、今の話を聞いた上で、私は一つ確認したいことがあった。

「はい、両方ともストップ！」

「ぐっ」

私が鋭く掛け声をかけると、布団に馬乗りしようとしていた柚が手を止めた。荒ぶっていた英生さんも一旦おとなしくなる。二人の鼻息が落ち着くのを待ってから、私は優しい声で質問した。

「一つ訊かせてください。二人が手詰まりと思って焦ったり諦めたりしてたのって、もしかしてそのOSのせい

だったんですか？」

私の問いかけを聞いて、二人は不安そうに顔を見合わせる。そして、やや困惑した表情で、

「まあ、俺はハードの完成もあつたが……半分はそこで焦つてた」

「私は完全にそこで詰まってきました」

そう答えたのを聞いて、私は——この家に来て初めて、二人に激怒した。

「ああ——本当にどうして、英生さんも柚も、できないのに全部抱え込むんですか!? 間違ひなく前世は馬鹿ですよ!? 心底呆れます、呆れ果ててこの私ですらキレました! 勝つ気あるとは思えませんよ!!」

初めて見るであろう私の激昂に、二人の顔は一瞬で蒼白になった。夜道で鬼に遭遇したかの如く、恐怖と焦りが全身から噴出しているのが分かる。それに構わず、怒髪天を衝く私は二人を詰問する。

「英生さん! このコミュニケーションの得意分野は!?」

「はい、じよ、情報工学です」

「柚! そのうち、制御系が得意なプログラマはどれだ

けいるの!?」

「ヒィッ! かかか、数えたことはな、ないけど……兵器開発やってたくらいだから、ほとんど、みんな得意なはず、だよ、です」

「うん、よろしい」

腕を組んで仁王立ちになり、二人を見下ろす。わなわなと震える迷える子羊たちに、私は一転、笑顔でこう問いかけた。

「さて。私が言いたいこと、分かりますよね?」

慌てふためく二人を眺めながら、ようやく家族の一員になれたんだなと実感する。表面き激怒しているように見せかけているけど、内心、私は嬉しくて泣きそうだった。

最終章

それからまもなくして、英生さんを探して部屋を尋ねてきた。二人はボサボサかつヨレヨレな姿の英生さんを見て心配そうにしていたが、「簀巻きを解いていた最中に訪問されたので、大慌てて布団から引つ張り出したら

こうなりました」とは言えず、徹夜で忙しくしていたんですとだけ言ってお茶を濁す。その後、私は改めて梓さんと和葉さんに事情を説明した。スーツのハードウェアがまもなく完成すること。そして、美幸さんの作ったOSの改修が必要で——サ、ク、ラ、の皆、さ、ん、に協力して欲しいということ。

「……なるほど、承知したよ。ただ——そういうことは、もつと早く言ってくれると助かるんだけどな？」

「すみません。モミジが絡むと、二人は頼ることができなくなるみたいで」

「はは、一番大事な部分で空回りするタイプなわけだ」

和葉さんたちもさすがは情報系……というよりも、美幸さんのことを知っていたからだろう、OSの件の飲み込みは素早かった。和葉さんからチクリと刺されたものの、協力することとでたちまち話がまとまってい

く。

「とにかく、善は急げだね。梓、どう思う？」

「美幸さんのコードは綺麗で見通しが良い、こちらのベテランに任せれば十分間に合うだろう。鈴音と伸行はど

うだ？ 当時、軍用ロボットの制御を担当していたはずだが」

「確かにあの二人なら得意そう。あとは……あー、正太郎の前職がOS開発者だったね。何でも屋の賢斗さんには諸々の監督をお願いしようか。とりあえず、このあたりを巡ってお願ひしてくるよ」

「頼んだ。俺は英生さんのスーツを確認しておく。倉庫にいるから、終わり次第戻ってきてくれ」

「了解」

和葉さんは私たちに手を振ると、早足で部屋を出ていった。この調子なら、明日からでもOSの改修に着手できるかもしれない。やっぱり二人に頼んでよかったな。和葉さんが玄関を出るのを待たず、梓さんが早々に話を切り出す。

「こちらも動かなくては。英生さん、完成間近のスーツを検分したい」

「そうだな。行くか」

そう言っ、男二人と柚もさつさと部屋を後にしようとして——出る直前、英生さんがふと立ち止まる。そ

のままこちらへ振り向くと、英生さんは遠慮がちな表情で、

「なあ、芽衣も来るんだろう?」

「……はい!」

待ちに待った作業部屋への招待を、私はもちろん快諾した。

*

「これが俺たちの強化外骨格——名付けて『一文字』だ」

英生さんが誇らしげにそう説明する横で、眼の前に立つ私たちのスーツ——一文字を見上げる。人型に組み立てられ壁に固定されているそれは、正直、カッコいいとは言えなかった。言葉を選ばないなら……明確に、ダサいの部類になる。鈍く銀色に光るむき出しの金属が全体を覆っていて、手足のパーツもゴツゴツとしていた。頭部はマスクというよりヘルメットに近く、目元を覆うように細長い黒色の装置が埋め込まれている。角ばった別のパーツと対照的に丸みを帯びている頭は、スーツの中でも特に浮いていた。まるで、アンドロイドの頭だけを

バケツに差し替えたような……

「あゝ、芽衣の顔が『なんだこのスーツダッサ』って言ってる」

「いやいや、とんでもない! 私がいいと思いますよ、ほら、なんか強そうだし……」

「嘘つきの下手すぎて逆に傷つくやつだねそれ」

芽衣がカマをかけてきたのを否定したつもりが、咄嗟の返事が微妙すぎて真逆の結果になってしまった。どうか他人事みたいに話してるけど、話を振っておいてこっちのせいにするのはセコくない? 柚を睨むと、露骨に目をそらされる。英生さんには当然プライドがあるのだろう、拳を握って悔しさを滲ませていた。あーもう、柚はこれだから……。

「ぐつ、良いんだ、俺も分かってるから……! 設備と資源不足に突貫作業の影響で無骨なのは百も承知。軽合金も厚いとは言えない。だがな、機動力はすごいんだぞ」

「そうですね……」

「やっぱり信じてないだろ!」

「何を言ってるんですか!? 信じてるに決まってるでしよ!!」

「お……おう。ならいいんだ」

『設備と資源不足に突貫作業』とか言われたらそりゃ心配になるだろ! と心の中で突っ込みながらも、私は声を張り上げてその場を乗り切る。叫んだ私に気圧されたのか、英生さんは何度か小さく頷いたきり黙ってしまっただ。ちよつと無理やり感がある対応だったけど、まあこは重要な点じゃないので一旦置いておくことにした。

そうだ、重要な点といえば。

「そういえば、誰が一文字に乗るかは決まってるんですか?」

「そう、俺もそこが気になっていたんだ。決まってるのなら選定も必要だしな」

私がパイロットについて尋ねると、無言で各パーツを細かく検分していた梓さんも同調してくれた。仮にスーツが完璧だったとしても、中に誰が乗るかによって勝敗は変わってくる。しかし、パワードスーツ向きな人ってどういう感じなんだろう。運動神経がいいのは当然とし

て、体型とか筋肉とか性別とか、まるで想像がつかないけど……

「ああ、私だよ」

「ええ?」

無難に大人が乗るのだろうと思っていた私は、まさかの袖が手を上げたことに驚きを隠せなかった。同時に、決闘がますます心配になってくる。

「袖で大丈夫なの? いくらスーツを着ても肉弾戦なのは変わらないし、もっと鍛えてる人の方が良いんじゃない?」

「サクラにそんな都合の良いマッスルがないのは知ってるでしょ。そもそもパワード、スーツなんだから、着ちゃえば力の強さは関係なくなるし」

「でも——」

「はあ、ここまで信用されてないとちよつとヘコむんですけど」

袖は私の言葉を遮ると、肩をすくめてそう答えた。

「やつぱさ、母さんの娘としては直で敵を討ちたいじゃん。もっと言えば、私ならOSの挙動をコードレベルでよく理解してるからね。こう見えても運動は得意だし、

スーツを最高に効率よく動かせるパイロットは私しかないってわけ」

「うーん……梓さんはどう思いますか？」

納得しきれない一方でうまい反論も出てこず、私は梓さんに助けを求める。が、

「不安要素がないと言えば嘘になるが、柚の言うことにも一理ある。このスーツの強みはOSだし、挙動を熟知している人間が乗るのはまったく正しい判断だろう。運動能力についても、下手に歳をとった大人よりよっぽどマシだ」

「ほら、梓さんもこう言ってるし」

「うう」

梓さんからも太鼓判を押されてしまい、パイロットが柚になるのがほぼ確定した。柚は梓さんの発言を追い風に、こちらへさらに畳み掛けてくる。

「そもそもさ、決闘に関係するのは私と相手だけじゃないよ。死角の監視とか含め、外側から指示を出してくれる人も必要で……ズバリ、私は芽衣に指示役を任せたい！」

「はあ、私が!？」

寝耳に水すぎる発表に、私は素っ頓狂な声を上げて訊き返してしまう。柚は平然とした様子で「そらそうよ」と答えた。

「仮に戦闘が激しくなっても、芽衣なら冷静で的確なアドバイスをくれるでしょ。それに、危機的な状況で一番信頼できる相棒^{パデ}って考えたら——世界中どこ探しても芽衣しかないよ」

「ちよっと、そんな風におだてても何も出ないってば」

「む、なんか思った「反応と違う。お世辞のつもりじゃないか」ってだけだな……それとも、嫌？」

「……嫌とまでは言わないけど」

「じゃ、決まりで！」

私が折れると、柚はその場で小躍りした。半ば強引に押された感があったものの、芽衣のクセをよく知っている上で冷静に指示を出せるのは……

「おっ、芽衣が指示^{カントク}出しやってくれるのか。何だったら、スーツ開発者の俺が直々に指揮を取ろうと思ってたんだが」

「いや当日一番興奮するであろう人間が何言っただけ？
父さんの感情的な指示なんか聞いてたら一瞬で負けるわ」

「んだとコラ!？」

「ほらすぐそうやってキレル!」

……一瞬だけ英生さんという選択肢が浮かんで、それは無理だと思い直した。恒例のキャットファイトでこんな過剰反応になるなら、本番は一体どんな爆発をすることやら。頭に血が上って「とにかくぶつとばせええええ!」とだけ指示を飛ばす英生さんがまざまざと想像できてしまう。妄想の絵面は面白いけど、本番でそうなったら洒落にならない。

「はあ、大丈夫かな……」

私の心は漠然とした不安の霧で覆われていた。なにせ、相手の戦力は今のところ未知数。このスーツの機動力で敵を圧倒できるのか、より正直に言うなら、本当に勝てるのか……なんて、考えても仕方ないとは分かっている。いるけど……

「何とかなるって! 私には芽衣がついてるし、芽衣に

は私がついてるんだからさ!」

不安がる私を見かねてか、柚が私の背中をパンパンと叩いて鼓舞してくれる。とはいえ根拠に欠けているし意味も分からない、勢いだけのセリフなのは明白だ。だから――

「やるしかない、か」

そう、今はただ前向きに考えるしかない。うん。まずは、スーツが完成するまでに指示出しがきっちりできるようにしておかないと。完成後は芽衣にスーツを着せて模擬戦みたいなこともやりたい。というかそれ以前に、そもそもスーツの性能や限界について詳しくしておく必要があるそうさ。

「英生さん。このスーツで想定している戦闘スタイルを教えてください。それをもとに、効果的な指示のパターンを考えてみます」

「よしきた!」

やるべきことは、文字通り星の数ほどある。結果はどうであれ、勝てる確率を高められることは全部やってくる。ヒマワリみたいにただ傍観するのは――二度と、

御免だから。

＊

一時間ほど経って、和葉さんが戻ってきた。予想通りサクラの人たちは全面的に協力してくれるとのこと、懸念だったOSも改修できそうだ。スーツの確認を終えた英生さんは和葉さんと軽く話してから、意を決したように「よし」と頷く。

「ハードは申し分ない。OSも改修の目処がついた。ゆえにサクラは——改めて、モミジに決闘を申し入れる。時期は孝介の交渉次第だが……准と話した際の温度感からして、恐らく、一ヶ月後になるだろうな」

＊

——一ヶ月と数日後、サクラ側の湖畔にて——

時が過ぎるのは早い。まさに光陰矢のごとし。私がヒマワリから命からがら逃げてきたのも、ほんの数ヶ月前

のこのように思えてしまうくらいだ。だから三年なんてあつという間で……英生さんや柚にとっての十年も、もしかしたらそういうものだったのかもしれない。

山の季節もいつの間にか移ろい、湖畔向かいの土手に立つ桜と紅葉の葉も赤く色づき始めていた。夏の暑さはどうに過ぎ去り、今や一枚羽織らなければ肌寒さすら感じる。湖から吹いた風で木々がざわめき、黄と赤の葉がさらさらと空を舞う。頭以外をスーツ——一文字で包んだ柚は、それを見上げて「ほう」と声を漏らした。

「ちよっと前までクソ暑かったのに今度は一気に冷え込むんだから、忙しななかったらありやしないよ。ま、キレイな紅葉が早めに眺められるって考えりや、ちよっとは得かも知れど」

そう言って柚が髪を掻き上げると、機械仕掛けの腕がわずかに唸った。風景に似つかわしくない異質な銀色が日光を反射してきらりと光る。作業部屋では不格好に見えたスーツも、自然と交じると……いやむしろ、その交わらなさが不思議とカッコよく見えた。とはいえ、紺色の作業着姿の私も交わらなさでは大概か。やっぱり銀色

というのがカッコよさの源泉なのかもしれない。

私は足元に置いた四角い茶色の置き時計をちらりと見る。時刻は十一時八分。十二時に決闘が始まると考えるだけで、心臓が早鐘を打つ。精神を落ち着かせようと木々のある陸側に來たのに、まったく効果が感じられない。無駄にバクバクと昂ぶり続ける胸を叩く。早く静まれ、静まるんだ、私。

「……あー、芽衣、大丈夫そ？」

苦笑いを浮かべながら、そんな風に柚が氣遣いの言葉をかけてくれた。それを聞いて私はますます焦る。一番緊張するはずの柚に心配されるって、指示役としてのメンツが立たない。私はかぶりを振って、素直に白状した。

「正直、全然大丈夫じゃない。この決闘にサクラの命運がかかってるんだよ？　そう考えたら……」

「今更何言ってるんだよ！　だから、今日のために一ヶ月間みっちり練習してきたでしょ。指示出しから格闘、スーツの操作、果てはOSのコードリーディングまで。私たちに死角はない」

「でも——」

思わず「決闘ってことは、最悪、芽衣の命の保証もないんだよ」という言葉が喉元まで出かけて、慌てて言葉を押し殺した。いくら何でもネガティブすぎる。そう、全てが今更だ。サクラのことも、決闘のことも……今更引き下がることなんてできない。決闘しなければ、サクラはモミジに吸収される。決闘しても負ければ同じ。サクラの未来は、決闘に勝つことでしか得られない。

「ほら、芽衣。この音を聞いてよ」

芽衣は合金の右腕を勢い良く突き出す。大きな駆動音と共に繰り出された怪力の拳は、宙を舞っていた紅葉を弾き飛ばした。柚は満足げな笑みを浮かべる。

「父さんが設計した機体に、母さんとサクラのみんなで作り上げたOS。戦うのは私たちだけじゃない、でしょ？」

突き出した腕の前腕にあるひときわ膨らんだ部分を、柚は左手の指先で優しく撫でた。私たちのスーツの中で唯一左右非対称なその部分にこそ、サクラ全員の思いと——文字の最終兵器が詰まっている。柚が「芽衣」と

私を呼んだ。

「私は勝つよ。だから、力を貸してね」

「……うん、任せて」

そうだ。今はただ、袖に的確な指示を出すことだけを考えればいい。勝つことだけを考えればいい。サクラのために戦うのは、私たちだけじゃない、サクラ全員の意思だから。

私は一度深呼吸をしてから、足元の時計を拾い上げる。まだ少し早いけど、もう十分だ。

＊

私たちは土手を降りて、葦が茂る浜へと立った。波一つない湖は鏡のように青い空を写して、遠くには緑黄赤が交じる山々がはつきりと見える。この見慣れたサクラの浜が、私たちの決戦の舞台だ。

経緯は、決闘の再申し入れのときに遡る。申し入れ時に一文字が未完成である点を逆手に取った孝介さんが、モミジに対するハンデとして決闘場所の指定権をもぎ取ってきた。サクラとモミジの資源差やスーツパイロツ

トの安全を考慮し「銃刀など、武器は決闘で使用しない」という条件で合意していたため、決闘はあくまでスーツ同士の純粋な肉弾戦になる。先に戦闘不能になった方が負け。それを踏まえてサクラ側が話し合った結果「OSによる体勢制御や俊敏さを利用するため、あえて足場の悪い浜辺を決闘場所にする」と決まったのだった。

『アー、アー。こちらワン。視界良好』

軽合金のフルフェイスマスクで顔を覆った袖……もとい、ワンの声が、ズボンのポケットからくぐもって聞こえてくる。私はポケットから声の発生源である黒の小型トランシーバーを取り出して、右側についたボタンを押しながら話しかけた。

「テスト、テスト。出てくる前に確認したからいいと思うけど、聞こえてるよね?」

『パッチリ。何なら音がデカいくらい』

「マイク音量下げよっか?」

『いや、戦ってたらデカくないと指示聞こえないだろうし、このままで。むしろそっちの音量は大丈夫? 戦闘中にこっちが私だって知られるのは避けたいんでしょ』

「うん。向こうとの距離次第だけど、気をつけとく」

そう、柚との会話で二つ名を使ったのもそのためだ。

決闘前の話し合いの際、和葉さんから「時間稼ぎでしかないと思うけど、相手に与える情報は絞りたい」と提案されたのがきっかけだった。確かに、こちらのパイロットが柚だとバレたら隙を生んでしまうかもしれない。こつちも、向こうのパイロットが誰かは知らないし。サクラとモミジは別々の場所で指示を出すはずだから多少の音は大丈夫だと思うけど、気をつけておくに越したことはない。

「お、主役が戻ってきたね」

私たちの声を聞いて、和葉さんと梓さん、英生さんの三人がぞろぞろとこちらに向かってきた。梓さんは凡な長袖長ズボン、英生さんは私と同じ作業着だったが、和葉さんだけは灰色のノースリーブに短パンという場違いすぎる服装で面食らう。マジかこの人。いやでも、そもそも和葉さんは毎年こんなだったっけ。流石に秋の湖畔では見たことなかったけど……寒くないんだろうか。

「ったく、直前だったのにどこほつつき歩いてんだ」

「英生さん、熱くなりすぎですよ。気分転換と集中のためなら、まったく問題ないでしょう」

「それはまあ、そうだが」

「歴史を見ても、戦いは最後まで冷静でいられた側が勝つものです。欲や恐怖に支配された側は、遅かれ早かれ自滅する運命にある」

「ウム……」

私が和葉さんの姿に釘つけになっている間、緊張からピリピリしている英生さんを梓さんがなだめていた。まったく、梓さんもつくづく苦勞人だ。英生さんはひとしきり黙った後でこちらに近づいてきて、私のトランシーバーの発話ボタンを押しながら話した。

「ワン。じきに決闘だが、準備はできてんだろうな？」

『もちろん』

「勝つ確率は？」

『一億パーセント』

「なら、よし」

英生さんは気合の入った芽衣の返事に納得したのか、幾分か落ち着いた様子で頷く。そのまま後ろに戻ろうと

振り返ったところで「あつ」と英生さんが声を上げた。

「あんたは——」

「あら。サクラのみなさん、こんにちは」

聞き覚えのある声を耳にして、咄嗟に後ろへ振り向く。私たちの背後で、黒のスーツを着た芝涵さんが微笑みながら立っていた。私たちを観察していたのか、やや離れた位置にいるために気が付くのに遅れたらしい。その振る舞いからは、見かけとは裏腹の底知れない嫌らしさを感じる。

「青空に湖、紅葉……ふふ、決闘にはもってこいのお日柄ですね」

「……最後の準備があります。冷やかしなら、お引取りを」

「おい、芽衣——」

言葉の裏に棘があるように感じられて、反射的に強い言葉で言い返してしまう。しかし芝涵さんは動じることなく、私を咎めようとした英生さんを片手で制した。

「芽衣さん。今日の私はあくまで審判役として、サクラの方を確認しに来ただけです。決闘には何の干渉もいた

しません……違反がない限りは」

「っ……」

睨む私をものともせず、芝涵さんはこちらへと近づいてきた。そして、袖……一文字の前で立ち止まると、その全身を舐めるようにゆっくりと視線を這わせていく。その姿に、なぜか背筋がぞわぞわとする。

「しかし、いいスーツですね。名前はなんと？」

「……一文字といえます」

「一文字……雅な名前ですね」

「お気に召されたなら、よかったです」

「ええ、とても。装飾や見栄えでなく性能に力を注ぐという熱意がまざまざと感じられて、実に気に入りました。ツバキにも欲しいくらいですよ」

「……」

「では、私はこれで。頑張ってください」

芝涵さんは小さく笑うと、そのまま私たちの向かい側へと歩いていく。すると見計らっていたかのように、タイミングよくモミジたち一行が土手から降りてきた。スーツの准さんを先頭に、私や英生さんと同じ紺色の作

業服を着たエンジニアらが数人、そして一番後ろにいるのは——なめらかに動く紫色のスーツ、参型だ。話には聞いていたけど、デザインは一字と天と地ほどの差がある。各パーツは磨かれていて、無駄に角ばっていることもない。フルフェイスのマスクは目元が赤色に光っていて、紫と相まって独特の毒々しさを感じさせた。そうやって色で威圧感を与えるのも戦略なのかもしれないけど……資源がないサクラからすれば、随分とリッチな話だ。

「やっと来やがったな、准」

英生さんが、芝涵さんと二人で話し始めた准さんを強烈に睨みつける。一方のモミジ側の人たちも、こちらをジロジロと見つめて値踏みをしているようだ。でも、その視線のほとんどは野暮っ、たい、一字に注がれていて……離れていても、向こうがそれを馬鹿にしていることくらいは読み取れる。

だからだろうか。私はたちまち、我慢できないほどの腹立たさを覚えた。

「ワン。私たち……サクラみんなで作り上げた、一字

の力を見せつけてやろう」

『任せて』

私の決意表明に答えて、駆動音と共に拳を強く握りしめる。そして、

『……母さん、見ててね。私、絶対勝つから』

柚が小声でそう誓ったのを、私は確かに聞いた。

＊

『ツバキの芝涵です。これより、サクラ・モミジ間の紛争解決のため、コミュニケーション協定第十七条に基づいた決闘が行われることを認めます。全体連絡はこの無線で行いますので、応答テストも兼ねて最終確認をします』

英生さんの持つ連絡用のトランシーバーから開始宣言が聞こえて、汗が滲む。相対する参型を見た。艶やかに加工されたボディが、日光を受けて不気味に輝いている。右手に広がる湖すらしんとして、浜辺は静まり返っていた。

いよいよ本番。柚たちと努力してきた結論がいずれにせよ出てしまうと考えると、足がすくみそうになる。も

し負けたら……って、ああもう、この考えは駄目だってば。そう、とにかく私たちは勝つ、勝つ、勝つんだ！

『サクラは、準備できていますか？』

「できています」

英生さんが問いかけに即答する。柚との最終確認は既に済ませてあるので、後はやり合うだけだった。

『よい。モミジは、準備できていますか？』

『できています』

准さんも、英生さん同様に即答だった。声も極めて平静を保っているというか……よほどスーツに自信があるとみた。だからこそ、私たちにそれが突き崩されたとき、冷静さが失われるのを聞いてみたい。

『よい。それでは予定通り、十二時開始としてカウントダウンを始めます……五十八、五十七、五十六』

手元のトランシーバーの発話ボタンを押し込む。柚は小さくサムズアップして、カウントが聞こえていることを示してくれた。私は深呼吸をして、一秒ごとに加速される脈拍を整える。冷静になれ。私の役目は、相手の動きを見極めて正確に指示を出すだけ。練習通り落ち着い

て、確実にやればいい。

『……二十二、二十一、二十』

カウントが二十を割ったところで、柚が左足を前に出してスタートの構えを取った。走り出しに備えて電力をチャージする一文字が、けたたましい高周波の唸り声を上げる。それに呼応するように、参型も姿勢を低くした構えを見せた。お互いに臨戦態勢のまま、張り詰めた十数秒が過ぎていく。

『……五、四、三、二、一』

そして、最後のカウントが終わった次の瞬間――

『はじめ！』

二つの強化外骨格パワードスーツが地面を蹴って――サクラの存亡をかけた、決闘という名の戦争が始まった。

＊

「ワン、後ろ！」

『うあつと』

背後からのタックルを、柚が間一髪のところでは避ける。脇を参型が通り抜けたのを確認して、私はほっと息

を吐く。ギリギリで躲して安心するの、今日何度目だろう。

『クソッ、思ってた動きが速い。見た目からもっと鈍重かと思ってたのに、なんなんだよアイツ!』

「落ち着いて! 機動力はこっちの方が上。正面だけならなるべく避けて」

『言われなくても——ッ』

力任せに方向転換をして再度突っ込んでくる参型を、横に飛び込んで避ける。小回りがいいから攻撃が当たらないとはいえ、このままじゃジリ貧なのは目に見えていた。

『だああああつ、このままじゃ埒が明かないって!』

緊張と防戦一方の状況に対して、露骨に苛立つ柚の感情が伝わってくる。このままじゃマズいのは分かるけど、とはいえ今のところ有効そうな戦術は……

『もう十分でしょう、英生さん。これ以上は危険です、諦めてください』

私が必死に思考を回していると、隣の英生さんのトラシーパーから准さんの声が聞こえた。連絡用の無線を

使ってこちらに投降を呼びかけてきているらしい。英生さんが即座に切り返す。

「黙れ、准。諦めるべきはそっちだろ? パイロットが無傷のうちに引いたらどうだ」

『高出力のジェネレータと厚い合金パーツを積んだこちらに、そちらの軽量スーツで適うはずがありません』

「ハッ、一文字を馬鹿にするんじゃないやねえよ。参型にいくらパワーがあったって、こっちに全部避けられてんじゃないか」

『逆です。一発でも当たったらどうなるか……考えたら分かりませんか?』

参型が繰り出した蹴りを躲して、一文字がもう片方の足を狙おうとした。だが、柚もカウンターが命取りだということとは分かっているのだろう、詰めきれずに後ろへ飛んで下がる。案の定、直後に参型の強力な拳が空振りした。下がっていなければ吹き飛んでいたかもしれない。准さんが言う通り、参型の攻撃は一発一発が強力で警戒せざるを得なかった。

『ほぼ一人で一文字を完成させた英生さんは流石です。』

それに、一文字のOSもここまで見事とは思いませんでした。完璧な姿勢制御に遅延の少なさ……サクラが作り上げただけのことはある』

「……」

『だからこそ、私たちは手を取り合うべきだ。ハードはモミジが圧倒しています。一方、ソフトはサクラに勝てる見込みがない。お互いに喧嘩しても、両方が損をする』

「追い出しておいて、よくもぬけぬけと言えるもんだな」

『待遇の向上は約束します。今の私たちの敵は、もはやお互いではない。気づいてください！』

「戯言を——！」

英生さんたちがそうやって口で争う間も、参型と一文字は鏑迫り合いを続けている。だけど、次の一手が見えず五里霧中だ。出力の暴力が荒れ狂う中、一文字は僅かな隙をつくのが精一杯だった。

『もう一度言います、英生さん。絶対に悪いようにしません、降参を』

准さんは、凄んだ声で呼びかける。だが、英生さんが

その程度で譲るわけがない。

「くたばれ」

『……相変わらず強情な人だ』

准さんがそう言い終わると同時に、参型の突進を躲した柚が、真横から思い切り蹴りを直撃させた。さすがの参型もバランスを崩し、何歩か後ろに下がってよろめく。すぐに攻撃を再開してくるかと思ったが——一撃を食らって制御が甘くなったのか、その場で何度か足踏みをしていた。そう、モミジのファームウェアはこっちのOSほど出来が良くないんだ！ 今なら行ける！

「今だ！」

『待ってたあああ！』

この一瞬を逃すまいと、私は急いで指示を飛ばす。柚は即座に加速して参型への間合いを詰めた。ここで大きく損傷を与えれば、私たちにも勝機がある！

一文字が参型に接近し、頭を狙って突きを出す。当たればパイロットに相当なダメージだろう。だがその直前で、これを狙っていたかのように、参型がずるりと構えへと移行するのが見えた。

気づいたときにはもう遅い。しまった、これは罠——

『がはっ』

私のトランシーバーから、柚の声にならない悲鳴が響く。参型は柚の拳を避けると同時に、ガラ空きの胴体へ強力な膝蹴りを直撃させていた。倒れ込んだその胴体に容赦なく突きを入れると、参型は一文字の首元を掴んで軽々と持ち上げてみせた。

『——言っただでしょう。一発でも当たればどうなるか、と』

惨い光景に言葉を失った私たちへ、准さんが冷淡かつ冷静な口調で語りかけてきた。私はハッとして柚に指示を出す。

「腕を掴んで蹴りを入れて！」

『——ダメ！ スーツが操作を受け付けない！』

半狂乱状態の柚から報告された現実には、私は目の前が真っ白になる。こんなに努力してきたのに、たった一撃だけで？ 二人の十年間が、こんなあっさりと踏みにじられるのもあり得ない。

『英生さん、あなたの設計は私も知っています。制御用

のプロセッサの配置も、概ね見当がつく』

「まさか、さっきのはそこを狙って——」

『全部を壊す必要なんてありません、相手の一番弱い部分を叩けばいい。ソフトはハードが動かなければ無効化できる。これが、考えられる中で最も効率的かつ安全な戦法です』

歯ざりりする英生さんに対して、准さんは一定の抑揚で淡々と正論を述べ続けた。私は体の芯からぞつとする。この人には本当に血が通っているんだろうか。状況一つで人を追い出し、呼び戻し、抵抗されれば効率的に締め上げる。とても同じ人間の所業とは思えない。

参型は動かない一文字を片手で持ち上げながら、浜から湖の中へと進んでいく。腿のあたりまで水に浸かったところで、ようやく参型は立ち止まった。水没耐性のないスーツをここに運ぶことが何を意味するのか、誰が見ても明白だ。

『最後のお願いです。英生さん、パイロットのためにも降参してください。これ以上手荒な真似はしたくない』

「てめえ——どこまで下衆になれば気が済む？」

『約束を果たすためなら何でもしますよ。私の責任でサクラを分離したのですから、私の責任で併合も行うだけの話です。批判は甘んじて受け入れますが、これが全員にとつての最善という認識は変わりません』

准さんが平然とそう答えてしばらく、参型の駆動音だけが場に響いていた。数秒間の沈黙の後、英生さんが改めて問いかける。

「なあ……正気か？」

『いつだって私は正気です。狂っているとすれば、この世界でしょう』

「そうか」

英生さんはそれを聞いて深く頷くと——意味ありげに、ニヤリと笑って答えた。

「なら、お前の負けだ」

『今更何を——』

准さんの言葉が言い終わらぬうちに、停止していたはずの一字から大きな駆動音が轟いた。それから一瞬で、一文字は首を締め上げていた参型の腕を両手でがちりと掴む。

『再起動!? プロセッサは殺したはず!』

「詰めが甘え! お前の効率主義な性格は死ぬほど承知してんだ! 十年間、俺が何の対策もせずにいたと思っ
たか!」

『待機系プロセッサか——』

「美幸さんの提案でな。冗長化に最適化、やれることは全部やったぜ。切り替えに時間がかかったのはヒヤッとしたが……俺たち、サクラ全員の覚悟を、舐めんじゃねえッ!」

『ぐっ——』

准さんが珍しく焦った口ぶりになったところで、プツリと向こうの声が聞こえなくなった。逃げたか。モミジも参型のカウンターや英生さんのスーツ設計の研究など、相当綿密にこの展開を計画していたのだろう。でも、英生さんと美幸さんの執念の方が一歩上手だったらしい。相手が油断した隙を突いて、一文字は一気に反撃に出た。

『あああああああああ!!』

袖の叫びと共に、再起動した一文字が、参型の腕を支

点に振り子のようにして頭部へ渾身の鋭い蹴りを入れる。参型は寸前で腕を離して回避したが、避けきれず肩へと強烈な一撃を食らった。想定外の攻撃に体勢を崩しよろめいたところで、先に復帰した柚が一気に間を詰める。どんな体勢からでも素早く立て直せる姿勢制御——私たちのOSの真価を遺憾なく発揮して。

『食らえオラ!』

安定しないまま無理やり攻撃を避けようとした参型の頭部へ、一文字がすれ違いざまに体重を乗せた裏拳をお見舞いする。同時に、その背中を蹴飛ばして間合いを作った。参型は浜の方へ勢いよくふっ飛ばされ、情けなく地面を転がりまわった。

『ハア、ハハッ、ざまあみろってね! 膝蹴りはマジで死ぬかと思っただけ』

柚が息を切らしながらも勝ち誇ったような声を上げる。参型は倒れ込んだままピクリとも動かない。電源が喪失したか、パイロットが気絶したのかも。このまま試合終了になれば……と私が期待した瞬間、参型が体を揺らしながらようやく体を起こす。さすがにそう簡単には

いらないか。柚も内心KOを願っていたのだろう、軽く舌打ちした音が聞こえた。

だけど、相手の動きが少し奇妙に思える。参型はフラフラと立ち上がったが、私たちとは微妙にズレた方向を向いている。まるで、私たちの位置が分かっているやうな——

『どうする芽衣? 今ならワンチャンありそう』

柚が逸る様子で指示を仰いできた。弱っているところを狙いたいという気持ちには分かる。だけど、その博打には乗るべきじゃない。

「さっきみたいにハッターかも。こっちも損傷を受けてるし、次に一撃を食らったらヤバイでしょ。警戒しつつ後ろから近づいて様子を見よう。相手が消耗していけそうなら、アレを使ってもいいと思う」

『了解……いよいよか』

柚はそう返事をする、音をなるべく立てないようゆっくりと相手の後方に回り込みを始める。すると突然、参型が両手で自分のマスクを掴んで暴れ始めた。柚は万が一に備え、バックステップで素早く距離を取る。

私は悶えている参型をじつと観察するが、その行動の意図が読めない。脳震盪？ 癩癩？ あるいはブラフ？ どれも有り得そうだけど、これだと言い切れる材料もない。

参型の方からバキッと固い何かが砕ける音がして、すぐに思考が中断される。そこでようやく、参型はただ暴れているのでなく、恐らく壊れたマスクを脱ぎ捨てようとしていたのだと分かった。立て続けに破砕音が響いてから、一際大きな音と共に参型のマスクが完全に外れる。そうして中から現れたのは、

「え、なんで」

波打つくせ毛を生やした、同年代の男の人。見覚えのあるその顔に、私の全思考が急停止した。

だって、どう見ても智明だったから。

袖の方へ振り向こうとした彼と、一瞬、視線が交わる。でもすぐに逸らされて、智明は一文字を睨みながらマスクを湖へと放り投げた。やっぱり、さっきまでの変な挙動はマスク不良のせいだったらしい。だけど、そんなことはもう重要じゃない。

——俺にも千載一遇のチャンスが巡ってきてき。うまくやれば、今後はあんまり心配せずに過ごせるようになるんだ——

あの時言っていたあのセリフの意味を、今更ながら理解した。なるほど、だからあの時に付き添いで呼び出されたわけか。袖と英生さんたちの前に現れたのも、きつと……

「……ふざけんな」

我慢できず、悪態が口をついて出る。外様で馴染めないからってこんなことまでして。世の中分かってますみたいな顔で私に話をしてたくせに、結局何も分かってない。潤沢な報酬の裏側……移民の智明が、なぜ参型のパイロットに選ばれたのか。そんなの、一つしかないだろうに。

そこで私は、ある仮説に思い至る。すると、彼の一連の行動が途端に腑に落ちた。そうだ、智明が湖畔に来たのは偶然私を見かけたからじゃなかったんだ。そもそも

心が決まっていたのなら、最初から会議所の中で待機し続けていたはず。それなのに外へ出て湖に向かったのは

—— 智明も、私と同じように迷つて、いたんだ。

智明は、ただ私を元気づけてくれたわけじゃない。

巡ってくるチャンス逃すなど言っただのは、私のために言っただんじゃない。彼は、自分の行動を正当化するために私を利用した。それなら辻褃が合う。

……本当に、バカバカしい。

『向こうもだいたい疲弊してるみたい。さっきの話の通り、いけそうだったらアレを使うよ』

柚の声で現実引き戻される。見ると確かに、参型の重心が若干ズレていることに気がついた。マスクを外す直前の不安定さこそないものの、疲れか故障か、いずれにせよ序盤の安定感がなくなっているのは間違いない。

今こそアレ……すなわち、右腕の最終兵器を使えば勝てるかもしれないと、私も柚と同じことを思った。いや、使うべきだ。ここを逃せば、今度こそやられてしまいかもしれない。

「……うん」

私は逡巡してから、短くそう答える。悩む必要なんかない、あんなヤツどうなったっていい。私を壁打ち代わりに使ったオナニー野郎なんて、思いつきりやられてしまつて当然だ。

柚はその場で屈んで飛び出す構えになる。最終兵器は勢いと方向が肝心だ。柚の正面には参型が立ち、その奥には湖が広がっている。この方向のまま押し切れるなら申し分ない。幸いなことに、相対する参型もこちらへと突っ込んでくる体勢になった。細かい操作が怪しい状況では、参型の出力という強みを活かした方がいいという判断だろう。最悪、刺し違えられると読んでいるのかも。

だけど、今回ばかりはそうはいかない。脚力の出力差が大きくても、最終兵器を使えばどうなるかが私には分かりきっている。智明だつてきつと、それを察しているはずで。

それでも彼は、けたたましい駆動音をたてながら柚へと突進してきた。それが、智明にとって唯一のチャンス、だから。それに応えるように、柚も右腕を後ろに隠すよ

うにして、勢いよく参型へと走り寄る。

そして二人が衝突する直前になって、

——移民同士、絶対幸せになってやろうぜ。じゃなきゃ、世の中バカバカしくてやってられんだろ——

そんな風に話していた智明の姿が、一瞬、脳裏をよぎった。

「ダメ——」

思わずそう声が漏れ出てしまい、我に返ってトランシーバーを確認する。幸い、指は発話ボタンから外れていた。もし押し込んでいたら、柚の命取りになったかもしれない。でも、押しさえすれば……

ううん、無理だ。私はぐちゃぐちゃの感情のままかぶりを振って、ただ、この決闘の成り行きを見守ろうと決めた。

『もらったああああああああああああ!!』

音割れした柚の叫びが轟く。同時に一文字から勢いよく放たれた拳は、参型に触れて——

＊

一文字の右腕前腕、膨らんでいた部分のカバーが弾け飛ぶ。中から現れたのは、巨大な装置——パワーユニット。英生さんがモミジに復讐すべく用意した、文字通りの最終兵器^{リカウェポン}。

パワーユニットに一文字の残電力が全て集中し、雄叫びのような唸りを上げる。そして、迫ってきた参型の胴体に柚の拳が入ると同時に、蓄積されていたエネルギーが一気に放出された。

刹那、爆発したかのような音——あるいは、復讐成就を祝う喝采が響き渡って。

リチャージを考慮しない一度限りのパワーユニットが放つ桁違いのエネルギーが、右腕を経由して参型の胴へと怒涛の勢いで叩き込まれる。接近してきた参型の推進力はたちまち打ち消され、むしろ来たときの何倍もの強さで、加速度ベクトルが一文字の拳の方向に上書きされたのがはっきりと見えた。

拳の先は、上空。一文字の爆発的なアップパーは、合金

の塊である強化外骨格も玩具のようにあっけなく吹っ飛ばす。一気に数メートル上空へと打ち上げられた参型は、私たちの前で大きな放物線を描き――

――桜と紅葉の葉が舞う、青藍の空の下で。

――参型と智明は、水しぶきと共に姿を消した。

＊

『サクラの勝利！ 繰り返します、サクラの勝利――』

参型が沈むと同時に、芝涵さんが私たちの勝利を宣言した。私は目の前で起きたことにただ呆然として、思考がまとまらない。勝利の実感もなく、事態の理解も進まないまま数秒が経ち――モミジ側の大騒ぎが聞こえて、私はやつと現実に取り戻された。

「……きゅ、救出！ 救出だ！ 救護班急げ！」

「まずいぞ、あんな重さのスーツを着てたら……」

「いいから船を出すんだ！ クソッ、このままじゃ――」

大慌てで沈んだ智明の救出に向かうモミジの人々をよ

そに、顔を隠すのも億劫になったのか、柚が大はしゃぎで一文字のマスクを脱ぎ捨てる。止める間もなく、汗ばんだ彼女の顔がたちまち現れて、

「だいしょーり、ぶい！」

こちらに向かって、柚が満面の笑みでVサインを送ってきた。興奮するのも当たり前だ。形成不利になりつつも、サクラとスーツを信じてモミジという巨悪を倒し、未来を見事に掴み取ったのだから。その笑顔は弾けるように明るくきらきらとしていて、とても魅力的だった。

私の隣では、英生さんが声にならない雄叫びを上げながらミラーレス一眼のシャッターを切っている。一文字という強化外骨格パワードスーツを駆り、諦めずに戦い抜き、激戦を制した英雄――名付けるなら強化外骨格少女パワードガールとして、柚の笑顔はサクラの歴史に残り続けるのだろうなと思う。

だから私は、喜ばなくちゃいけない。勝利を。独立を。大好きな人が笑顔でいられることを。

だから私は、

「うん、お疲れ様！」

柚に、とびきりの笑顔でそう答えた。

――
頬に、
一筋の線を描きながら。

たのしい手書きあとがきコーナー

執筆のためにコメダへ
通ったら数万溶けたので
実質風俗みたいなものです

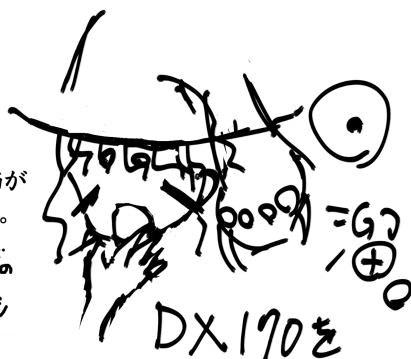
パンダ
難しい 有坂



上司「出来らあ！」ワイ「!？」
上司「この円高の最中に部下をシリコン
バレーまで出張させるんだよ！」
ワイ「えっ!?ワイがですか!？」
～3週間後～

ワイ「まさか即落ち2コマで
出張させられるとはなあ（トホホ）
ということがありました。なお物価が
アホみたいに高い以外はいい街です。

みみずの
ひも



団地の図書館

サイコー!

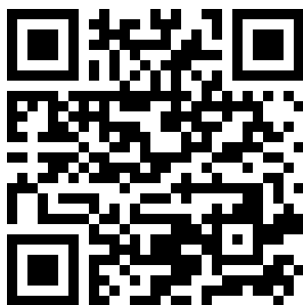
野に草

置いた
DX160 ver 2020.5.4
モッサリしない! up

パンフレット記載のユーちゃん(左)と
リーちゃん(右)は全国ゆり税共同組合連合会の
公式キャラクターで、日々百合営業をしながら
百合税のイメージアップに貢献しているそうです。

あまね

ここから「東雲銀座広報 ゆり時計」の感想をお聞かせください！



または、

<https://hentaigirls.net/book/yuri-watch/feedback/>

「もやの先」を除く全ての作品は CC BY 4.0 でライセンスされており、ライセンスの条件に従っている限り自由に利用できます。

ライセンスの詳細は以下の URL で確認できます。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

To the extent possible under law, 野沢菜 has waived all copyright and related or neighboring rights to もやの先. This work is published from: Japan.

ライセンスの詳細は以下の URL で確認できます。

<https://creativecommons.org/publicdomain/zero/1.0/>

書名 東雲銀座広報 ゆり時計
発行日 2022/11/30
発行 変態美少女ふいろそふい。
印刷 (電子書籍版のため省略)
連絡先 circlemaster@hentaigirls.net
